

特別支援学級 スタート応援ブック

授業づくり編

第4版



読んで なっとくん

茨城県教育研修センター

特別支援教育課

「特別支援学級スタート応援ブック授業づくり編 第4版」について

特別支援教育は、共生社会の形成に向けて、インクルーシブ教育システム構築のために必要不可欠なものと言われています。その際、障害のある子供と障害のない子供が可能な限り同じ場でともに学ぶことを追求するとともに、障害のある子供の自立と社会参加を見据え、一人一人の教育的ニーズに最も的確に答える指導を提供できるよう、多様で柔軟な仕組みを整備することが重要です。この内容をより明確化するために、令和4年4月に「特別支援学級及び通級による指導の適切な運用について（通知）」が文部科学省より出されました。それに伴い、令和4年11月には、茨城県教育委員会より「小・中学校等における特別支援学級の教育課程編成ガイド【改訂第4版】」が出され、児童生徒の適切な学びの場の柔軟な見直しが重要とされています。

今回の改定は、最近の特別支援教育の動向に伴い、以下の内容を見直しています。

- 「授業づくり編」第Ⅰ章「教育課程について」の内容に、「小・中学校等における特別支援学級の教育課程編成ガイド【改訂4版】」、令和3・4年度 特別支援教育に関する研究（教育研修センター）の内容を反映
- 「授業づくり編」第Ⅱ章「特別支援学級等の授業づくり＜授業づくりの8つの視点＞」の内容に、「小・中学校等における特別支援学級の教育課程編成ガイド【改訂4版】」の内容を反映

新しく特別支援学級・通級指導教室を担当される先生方はもちろん、経験を積まれた先生方にも、基礎的・基本的な事項の再確認に、ご活用いただけると幸いです。

令和6年3月

茨城県教育研修センター特別支援教育課

特別支援学級スタート応援ブック

【授業づくり編】

第4版

I 教育課程について	1
1 日常生活の指導	5
2 生活単元学習	6
3 作業学習	8
4 自立活動	10
5 教科別の指導	15
6 「特別の教科 道徳」、「特別活動」、「外国語活動」、「総合的な学習の時間」	16
7 交流及び共同学習	20
 II 特別支援学級等の授業づくり<授業づくりの8つの視点>	 23
1 実態把握、目標設定の工夫	26
2 場の工夫	35
3 導入・展開・まとめの工夫及び単元計画	36
4 発問・応答・称賛などの言葉かけの工夫	39
5 特性に応じた支援	41
6 教材・教具の工夫	47
7 ティーム・ティーチング	52
8 評価の工夫	58
 III 指導案作成にあたって	 61
1 指導案とは	61
2 指導案を作成するよさ	61
3 指導案作成のポイント	62
(1) 各教科(国語・算数等)、各教科等を合わせた指導の指導案の例	62
(2) 小集団による自立活動の指導案の例	65

特別支援学級スタート応援ブック

【授業実践事例編】

授業実践事例の見方について	70
実践例 1 算数「重さを調べよう」	72
<小学校知的障害特別支援学級>	
実践例 2 生活単元学習「転校した友だちを元気づけよう」	76
<小学校知的障害特別支援学級>	
実践例 3 自立活動「いろいろな顔」	80
<小学校自閉症・情緒障害特別支援学級>	
実践例 4 自立活動「ペットボトルボウリングをしよう」	84
<小学校自閉症・情緒障害特別支援学級>	
実践例 5 算数「あまりのあるわり算」	88
<小学校知的障害特別支援学級>	
実践例 6 国語「漢字の広場」	92
<小学校言語障害特別支援学級>	
実践例 7 自立活動「ことば遊びをしよう」	96
<小学校言語障害特別支援学級>	
実践例 8 国語「かるたのひみつを読もう」	100
<小学校言語障害特別支援学級>	
実践例 9 作業学習「オルゴールボックスを作ろう」	104
<中学校知的障害特別支援学級>	
実践例 10 自立活動「上手に聞こう」	108
<特別支援学校高等部>	
実践例 11 総合的な学習の時間「和（日本文化）を味わおう」	112
<特別支援学校高等部>	
実践例 12 数学「ボウリングをしよう」	116
<特別支援学校中学部>	
参考・引用文献.....	120

授業づくり編

I 教育課程について

1 「特別の教育課程」の編成に当たって

特別支援学級の教育課程は、基本的に「小学校学習指導要領」または「中学校学習指導要領」に基づいて編成します。ただし、対象となる児童生徒の障害の種類、程度等によって、障害のない児童生徒に対する教育課程をそのまま適応することが必ずしも適当でない場合があることから、「**特別の教育課程を編成することができる**」と規定されています。その際、「特別の教育課程」を参考にするということをなぜ選択したのか、保護者等に対する説明責任を果たしたり、指導の継続性を担保したりする観点から、理由を明らかにしながら教育課程の編成を工夫することが大切であり、教育課程を評価し改善する上でも重要です。

2 児童生徒の障害の状態等に応じた教育課程編成の考え方

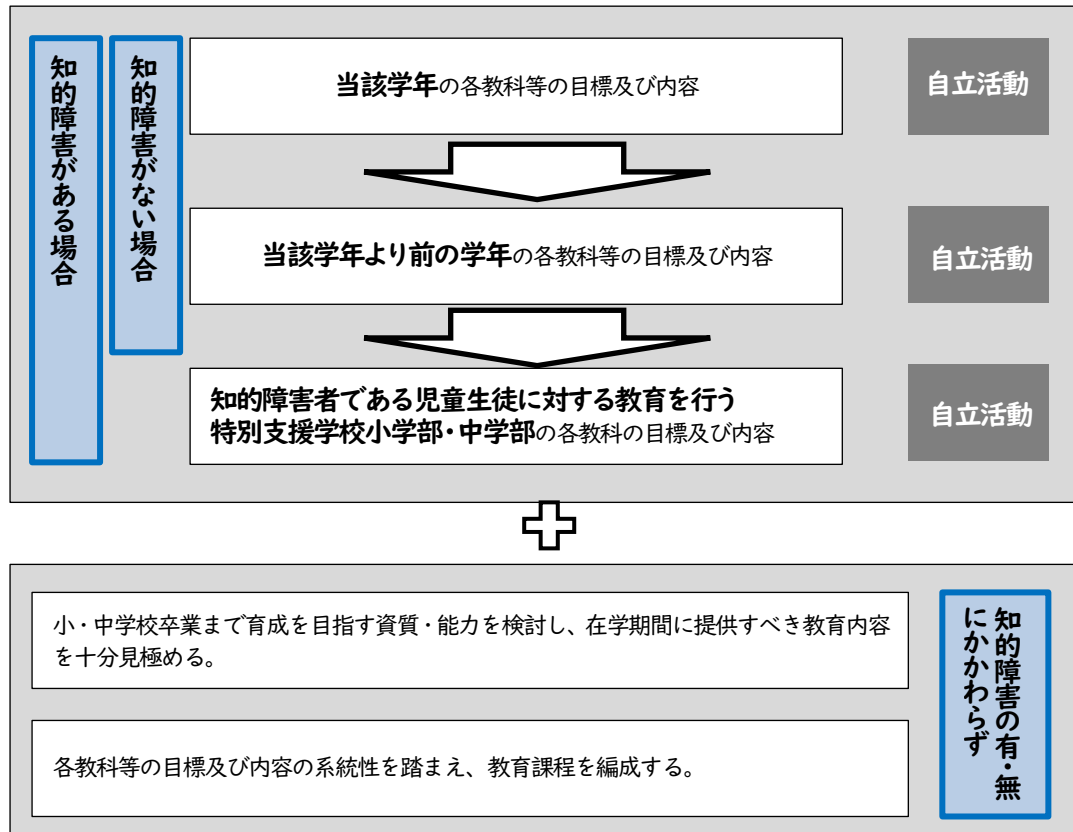
○特別支援学級の場合

- a 小・中学校学習指導要領の第2章各教科に示されている目標及び内容について、次の手順で児童の習得状況や既習事項を確認してください。
 - ① 当該学年の各教科の目標及び内容について
↓（困難な場合）
 - ② 当該学年より前の各学年の各教科の目標及び内容について
- b 知的障害があり、a の学習が困難又は不可能な場合、特別支援学校小学部・中学部学習指導要領の第2章第1節第2款第1に示されている知的障害者である児童を教育する特別支援学校小学部の各教科の目標及び内容についての取扱い又は第2章第2節第2款第1に示されている知的障害者である生徒を教育する特別支援学校中学部の各教科の目標及び内容についての取扱いを検討してください。
- c 児童の習得状況や既習事項を踏まえ、小・中学校卒業までに育成を目指す資質・能力を検討し、在学期間に提供すべき教育内容を十分見極めてください。
- d 各教科の目標及び内容の系統性を踏まえ、教育課程を編成してください。

なお、特別支援学級について、特別の教育課程を編成する場合であって、文部科学大臣の検定を経た教科用図書を使用することが適当でない場合には、当該特別支援学級を置く学校の設置者の定めるところにより、他の適切な教科用図書（下学年用の文部科学省検定済教科書、文部科学省著作教科書〔特別支援学校用〕、一般図書）を使用することができるようになっています。

※ 「特別の教育課程」を編成する際、個々の児童生徒の状況を踏まえ、例えば自立活動に加えて算数(数学)や国語といった教科のみを学び、それ以外は交流及び共同学習として通常の学級で学ぶといった、機械的かつ画一的な教育課程を編成することは適切ではありません。

児童生徒の障害の状態等に応じた教育課程編成の考え方



〈引用：【改訂第4版】特別支援学級の教育課程編成ガイド 茨城県教育委員会〉

○通級による指導の場合

通級による指導は、小・中学校の通常の学級に在籍している障害のある児童生徒(言語障害者、自閉症者、情緒障害者、弱視者、難聴者、学習障害者、注意欠陥多動性障害者など)に対し、各教科等の大部分の授業を通常の学級で行いながら、一部の授業について当該児童生徒の障害に応じた**特別の指導**を**特別の場**で行う教育形態です。

【通級による指導における「特別の指導」とは…?】

◎ 自立活動の指導

障害による学習上又は生活上の困難の改善・克服を目的とする指導を行う。

◎ 特に必要があるときは…

障害の状態に応じて各教科の内容を取り扱いながら行うことができる。



教育課程を届け出ましょう

特別支援学級において、特別の教育課程を編成する場合は、各市町村の教育委員会の管理規則等に従って、届ける必要があります。

(☞学級経営編 I-5 教育課程の編成)



○指導に当たっての考え方

一人一人の発達や心理的状況、環境等、その実態を的確に把握し指導に当たることが大切です。

(例)

・対人関係に課題のある児童生徒

対人関係を中心とした多面的な課題を有する場合があります。その際には、日常の生活習慣を身に付けること、感覚機能や運動機能の調和的発達を図ること、対人関係を改善し、言語等による理解と表出を促すこと、生活意欲を高めることなどを中心として指導することが大切です。また、主として心理的な要因による選択性かん黙等がある場合は、温かい雰囲気の中で、各教科の指導の他、情緒の安定や円滑な対人関係を図る指導をすることが大切です。

・かん黙やチックのある児童生徒

一人一人の実態に即して、カウンセリングを行う他、遊びや共同制作などを通して、人との円滑な関わり方を指導することが大切です。

【特別支援学級における指導のポイント】

- ① 発達の状態や心理的状況、環境要因、認知特性など、多面的な実態把握を実施する。
- ② 心理的に安定できる学習集団（個別、小集団）や学習環境、教材・教具を準備する。
- ③ 学習環境の調整（整理された刺激の少ない環境、活動の見通しがもてる環境）を図る。
- ④ 子供の心の動きを十分理解し、カウンセリングマインドを生かした学習指導を工夫する。
- ⑤ 認知特性や得意な学習など、個々のよさを生かし、高める学習指導を工夫する。
- ⑥ 日常生活における具体的な課題を解決するための体験的な学習を工夫する。
- ⑦ 家庭での様子など、保護者や関係者からの情報収集及び情報活用を図る。
- ⑧ 一人一人の実態に即した効果的な交流及び共同学習を工夫する。

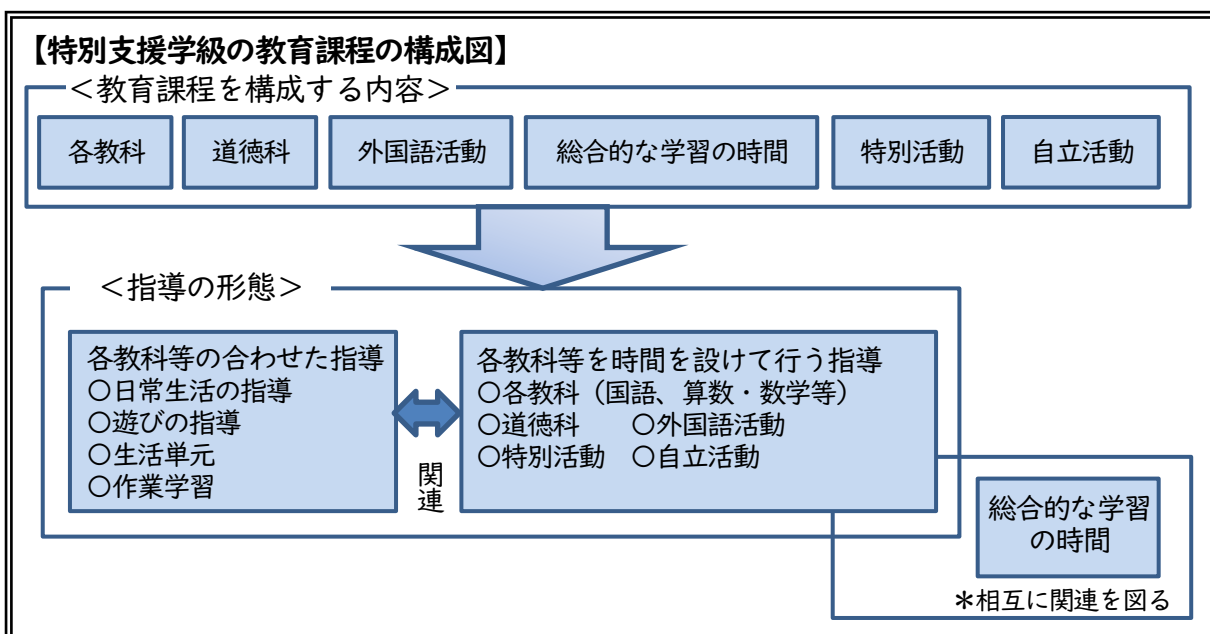


3 各教科等を合わせた指導について

小・中学校における教育課程は、各教科、道徳科、外国語活動、総合的な学習の時間、特別活動がそれぞれ別に指導されていますが、知的障害特別支援学級においては、特別の教育課程を編成した場合、各教科等の一部または全部を合わせて指導をすることができます。それらは「**各教科等を合わせた指導**」と呼ばれており、日常生活の指導、遊びの指導、生活単元学習、作業学習などがあります。

この背景として、知的障害のある児童生徒の学習上の特性として、学習によって得た知識や技能が断片的になりやすく、実際の生活の場で生かすことが難しいということがあります。実際の・具体的な内容の指導を通して、達成感が味わえるような指導を工夫しましょう。

また、各教科等を合わせて指導を行う際には、各教科等で育成を目指す資質・能力を明確にした上で、効果的に実施していくことができるようにカリキュラム・マネジメントの視点に基づいて計画(Plan)－実施(Do)－評価(Check)－改善(Action)していくことが必要です。



児童生徒の実態に応じて「各教科等の時間を設けて行う指導」「各教科等を合わせた指導」のそれぞれの指導の形態の特性を考慮して、教育課程を編成しましょう。総合的な学習の時間は、これらと関連を図りながらも適切な時間を設けて指導する必要があります。



I 日常生活の指導

日常生活の指導は、児童生徒の日常生活が充実し、高まるように日常生活の諸活動について、知的障害の状態、生活年齢、学習状況や経験等を踏まえながら計画的に指導するものである。

日常生活の指導は、生活科を中心として、特別活動の〔学級活動〕など広範囲に、各教科等の内容が扱われます。

○基本的生活習慣の内容

衣服の着脱、洗面、手洗い、排泄、食事、清潔等

○集団生活をする上で必要な内容

あいさつ、言葉遣い、礼儀作法、時間を守ること、きまりを守ること等

【指導のポイント】

○日常生活の自然な流れに沿い、指導を実際的で必然性のある状況下で行う。

（例）体育の授業前の着替えて、たたみ方、ボタンかけ等を指導。

給食の時に、食べ方、食事のマナー等を指導。

給食後の歯みがき指導など。

○毎日反復して行い、望ましい生活習慣の形成を図る。

○できつつあることや意欲的な面を考慮し、適切な支援を行うとともに、課題に対して段階的な指導を行う。

○指導場面や集団の大きさなど、活動の特徴を踏まえ、個々の実態に応じた効果的な指導を行うよう計画する。

○家庭等との連携を図り、児童生徒の学習状況等を共有して、指導の充実を図る。



中学校では・・・

生徒たちの日々の生活が充実したものとなるように、中学校でも重要な教育活動の一つになります。そして、青年期のエチケットも含めた洋服の選択、身の回りの処理などで適切な支援をしていくことも重要になります。



2 生活単元学習

生活単元学習は、児童生徒が生活上の目標を達成したり、課題を解決したりするために、一連の活動を組織的・体系的に経験することによって、自立や社会参加のために必要な事柄を実際的・総合的に学習するものです。

生活単元学習では、広範囲に各教科等の内容が扱われます。生活単元学習の指導において児童生徒の学習は、実際の生活上の課題に沿って指導目標や指導内容を組織されることが大切です。児童生徒の知的障害の状態等に応じ、遊びを取り入れたり、作業的な指導内容を取り入れたりして、生活単元学習を展開している学校もあります。

生活単元学習の指導を計画するに当たっては、一つの単元が2、3日で終わる場合もあれば、1学期、あるいは1年間続く場合もあるため、年間における単元の配置、各単元の構成や展開について十分検討する必要があります。

1 単元の種類(学習内容例)

○行事を中心とした単元

学校行事:遠足、学習発表会、卒業進級を祝う会等

季節行事:七夕、収穫祭、豆まき等

○季節の生活を中心とした単元

春:花壇や畑作り等

夏:夏祭り、林間学校等

秋:秋の野山、収穫祭等

冬:雪遊び等

○生活課題を中心とした単元

宿泊学習、校外学習、調理実習、買い物学習等

○製作・生産活動を中心とした単元

カレンダー作り、万国旗作り、さつまいもの栽培等

2 生活単元学習 実践例

小学校4年 知的障害特別支援学級「小中学校交流学習会に参加しよう」

市内の小学校、中学校の特別支援学級の児童生徒が参加し、年に1度実施している行事。笠間市へ行き、陶芸(手びねり)、「笠間芸術の森公園」散策、「県立陶芸美術館」見学と、様々な体験ができるように計画する。

交流学習会は、児童生徒たちにとって楽しい行事のひとつである。

交流学習会を通して、社会のマナーや集団行動でのルールなど、学校生活ではできないことを体験することで、今後の生活の中に生かすことをねらう。

学習計画(16時間扱い)

次	時	学習活動・内容	他教科との関連
1	①	○交流学習会について知り、活動計画を立てる。	国語、自立活動
2	①～②	○しおりを作成する。○笠間市について調べる。 ○開閉会式の進行の練習をする。	国語、社会 自立活動
小 中 学 校 交 流 学 習 会			
3	①～②	○交流学習会の思い出を絵や文でまとめる。	国語、図工
4	①	○陶芸作品の鑑賞会を行う。	図工

※ 事前準備では、知的障害特別支援学級と自閉症・情緒障害特別支援学級との合同授業を実施し、計画的に準備を進める。どのような分担で進めるか児童生徒たちで話し合い、得意なことを生かし、「しおり」や開閉会式の台本を一緒に作成する。難しい作業の時はお互いに教え合い、助け合いながら、協力してやり遂げる達成感を味わうことができるようにする。

【単元設定のポイント】

- 実際の生活から発展し、児童生徒の興味や関心、発達の段階に合った内容で構成するとともに、個人差の大きい集団にも適合するものにしましょう。
- 必要な知識・技能の獲得とともに、生活上の望ましい習慣・態度の形成を図りながら、身に付けた内容が日常の生活で生かされるものにしましょう。
- 児童生徒が目標や見通しをもち、単元の活動に積極的に取り組みながら、目標意識や課題意識を育てる活動も含んだものにしましょう。
- 一人一人がもっている力を発揮し、主体的に取り組みながら集団全体で単元の活動に共同的に取り組めるものにしましょう。
- 各教科等に係る見方・考え方を生かしたり、働かせたりすることのできる内容を含んだ活動で組織され、児童生徒がいろいろな学習活動を通して、多種多様な経験ができるように計画しましょう。



3 作業学習

作業学習は、作業活動を学習活動の中心にしながら、児童生徒の働く意欲を培い、将来の職業生活や社会自立に必要な事柄を総合的に学習するもので、主に中学校段階で取り組まれています。

Ⅰ 作業学習の種類例

- 農耕・園芸（野菜、花、ドライフラワー等）
- 紙工（再生紙による紙すき、ハガキ・名刺・箱の作成等）
- 木工（プランターボックス、写真立て、ペン立て等）
- 金工（七宝焼き、ちりとり等）
- 縫製・織物（刺繍、小物入れ、ランチョンマット、巾着、マフラー、コースター等）
- 手芸（ビーズ手芸、アイロンビーズ等）
- 窯業（食器、箸置き等）
- 印刷（名刺、カレンダー、ハガキ等）
- 調理・製菓（味噌、クッキー、ジャム等）
- リサイクル（空き缶、古新聞等）
- レーザークラフト（ペンケース、キーホルダー等）
- 企業等の事業所から注文を受けて行う作業（製品の袋詰め、箱の組み立て、プラスチック製品のバリ取り等）



【指導にあたって考慮する点】

- 教育的価値の高い作業活動等を含み、活動に取り組む喜びや完成の達成感が味わえるようにしましょう。
- 社会の変化やニーズ等にも対応しつつ、地域性に立脚した特色も考慮し、持続性のある作業活動を選定しましょう。
- 児童生徒の実態に応じた段階的な指導ができ、相互の役割等を意識しながら協働で取り組める活動を含むようにしましょう。
- 作業内容や作業場所が安全で衛生的、健康的であることに加え、作業量や作業の形態、実習期間などについても適切な配慮をしましょう。
- 作業製品等の利用価値が高く、生産から消費への流れと社会貢献などが理解しやすい内容を選定しましょう。



2 効果的な展開のポイント

○児童生徒一人一人の作業能力や特性を適切に把握し、それに合った作業課題を個別に用意しましょう。

- ・作業工程の分析をする。
- ・複数の作業や工程を試行的に経験させる。

○一人でできる状況づくりをしましょう。

- ・個の実態に応じて支援の手立てを定める。
- ・補助具の用意をする。
- ・支援を段階的に少なくしていく。

○児童生徒同士が相互に影響し合い、やる気を喚起する環境を用意しましょう。

- ・作業工程の動線に配慮する。

○集中して取り組めるよう、めあてをもつことができるようにしましょう。

- ・具体的な作業目標をもつ。
 - ・毎日の作業目標を個別に設定する。
- (例:「印の付いている場所に穴を開ける作業を 30 分間継続することができる。」)

○自分の取組に自信をもつことができるようにしましょう。

- ・段階的に徐々に難しい作業にも挑戦する。
 - ・製品のできばえを高める工夫を行う。
- (例:製品に貼るシールや包装紙、化粧箱など販売を意識したデザインにする等)

3 小学校での作業的な学習

小学校段階でも、働くことの基本になる活動やそれにつながる活動があります。例えば「係活動」「清掃」などを日々繰り返し行う中で役割を果たすことを継続・習慣化していく、生活単元学習で作業的な活動を設定していく等です。こうした取組を大切に、働くことの基礎を培うようにします。

作業学習でできた製品は・・・

作業学習は、製品を作るだけでなく、児童生徒が生産から消費の流れを理解できるようにすることも考慮しましょう。製品をバザー等で販売したり、注文を受けて製品を作ったりすることによって、消費者を意識した製品を作ることができるよう学習を計画していきましょう。

例2:「文化祭で販売をしよう」

- ・卓上織り機を使って、コースターや花瓶敷きを作る。
- ・文化祭のバザーコーナーにブースを設け、販売活動を行う。

例1:「注文をとって製品を届けよう」

- ・ビーズ手芸でストラップやキーホルダーを作る。
- ・お世話になっている先生方から、形、色、大きさ、数などの注文を受け、注文通りの製品を作る。



4 自立活動

自立活動では、児童生徒の実態に応じ、日常生活や学習場面等の諸活動において、その障害によって生じるつまずきや困難を軽減しようとしたり、障害があることを受容したり、つまずきや困難の解消のために努めたりする態度を育てることをねらいます。

自立活動は「自立活動の時間における指導」として授業時間を特設して指導する場合と、教育活動全般の中で自立活動の内容を取り入れて指導する場合があります。

児童生徒の実態把握を基に、次に示すような6区分27項目の中から、個々の児童生徒に必要とされる項目を選定し、それらを相互に関連付けて具体的な指導内容を設定することになります。それぞれの項目における指導内容の例は、『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編』を参照してください。

1 健康の保持

- (1) 生活のリズムや生活習慣の形成に関すること
- (2) 病気の状態の理解と生活管理に関すること
- (3) 身体各部の状態の理解と養護に関すること
- (4) 障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること
- (5) 健康状態の維持・改善に関すること

2 心理的な安定

- (1) 情緒の安定に関すること
- (2) 状況の理解と変化への対応に関すること
- (3) 障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること

3 人間関係の形成

- (1) 他者とのかかわりの基礎に関すること
- (2) 他者の意図や感情の理解に関すること
- (3) 自己の理解と行動の調整に関すること
- (4) 集団への参加の基礎に関すること

4 環境の把握

- (1) 保有する感覚の活用に関すること
- (2) 感覚や認知の特性についての理解と対応に関すること
- (3) 感覚の補助及び代行手段の活用に関すること
- (4) 感覚を統合的に活用した周囲の状況についての把握と状況に応じた行動に関すること
- (5) 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること

5 身体の動き

- (1) 姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること
- (2) 姿勢保持と運動・動作の補助的手段の活用に関すること
- (3) 日常生活に必要な基本動作に関すること
- (4) 身体の移動能力に関すること
- (5) 作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること

6 コミュニケーション

- (1) コミュニケーションの基礎的能力に関すること
- (2) 言語の受容と表出に関すること
- (3) 言語の形成と活用に関すること
- (4) コミュニケーション手段の選択と活用に関すること
- (5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること

【知的障害特別支援学級での自立活動の例】 ※全教育活動の中で指導した例

課題 「座っている姿勢が悪い、姿勢が崩れやすい」→ 関連項目 5-(1) など

内容 体育や休み時間等を利用し、体幹を鍛えるトレーニングを意図的に導入する。

○「体育で体幹トレーニング」

リズムに合わせて、四つ這いの姿勢から右手・左足を挙げて静止、その逆の姿勢で静止、を繰り返す。
みんなで掛け声をかけながら行くと、楽しく取り組むことができる。

○「ちょっとした時間に姿勢改善!」

休み時間、何もすることがないような時には声をかけて、「壁立ち」に取り組む。

※壁立ち…壁に背中、かかと、おしりをつけて 30 秒くらいを目安に立つ。教師が背中に手を入れて壁と背中との空間(空きすぎ、狭すぎ)をチェックする。

○「いつもカッコよく椅子に座ろう」

正しい椅子の座り方をイラストや写真で学級に掲示し、いつも意識できるようにする。

ポイント

- ・おしりを奥までしっかりと…前に滑ってしまう時にはすべり止めシートを敷いてみる。
- ・足の裏を床につける…椅子の高さの調整、足元に台を置く。
- ・背筋を伸ばす…「これから話をします」などの言葉によって姿勢を整える機会を意図的につくる。

【自閉症・情緒障害特別支援学級での自立活動の例】 ※時間を設定して指導した例

課題 「友だちとのトラブルが多い」→ 関連項目 3-(2)、6-(1) など

内容 ロールプレイを通して、適切な対応を学ぶ。

- 「読みたい本を友だちが読んでいて、貸してほしいときは?」「好きなことをしている時に別のことを頼まれたら?」「次の日曜日、一緒に遊びたいときは?」「断りたいときは?」など、身近で実生活に即した場面を設定し、適切な対応を考えたりロールプレイをしたりして、対応のパターンを学習する。
- 生活の中で実践できた報告をする場面を設定する。例) 自立活動の時間や帰りの会で。

ポイント

- ・人とのかわりを深めるための基礎…人の声に注意を向ける。
- ・対人関係を構築する…大人との一対一の関係づくりから小集団の児童生徒との関係に広げる。
- ・モデルを示す…言葉による説明だけでなく、モデルを示す。
- ・報告の仕方のパターン化…「いつ・どこで・だれが・何を」などの型を決める。
- ・ヒントを用意…報告の仕方の手順表(ヒント)を見えるところに提示し活用しやすくする。

【言語障害特別支援学級での自立活動の例】 ※時間を設定して指導した例

課題 「舌に力が入ってしまい、発音が不明瞭」→ 関連項目 2-(3) など

手だて キャスターになって他者へのインタビューを行う活動を行い、日常会話でも自信をもてるようにする。

- リハーサルを十分に行ってから、本番へ!
「練習だから、間違っても大丈夫」「間違っても練習すれば上手になる」という経験を繰り返すことで、自信をもって取り組めるようにする。
- 活動の様子を録画することで、まわりからどのように見えるのか、自分を客観的に振り返ることができるようにする。

ポイント

- ・雰囲気づくり…症状が伴いながらも楽しく楽に話せる、リラックスできる雰囲気をつくる。
- ・練習中の聞き手の役割…話し方に注意を向けるのではなく、話す内容に注意を向ける。

自立活動における指導内容設定のためのプロセスシート(例)

学校名	学年・学級	氏名
-----	-------	----

<昨年度末の指導状況>

指導状況	
評価	

<今年度の指導状況>

実態把握	【担任の見取り】【交流学級担任の見取り】 a ● 約束事の理解はしているが、実際の場面になると自分のしたいことを優先してしまう。 b ● 友達を泣かせてしまってもなかなか謝れないが、○落ち着いてから話すと「僕が悪かったかも」と言う。 c ○ ゲームを面白くするルールを提案できるが、●唐突にルールを変えようとすることもある。 d ○ 体を動かすことは好きだが、●道具を操作する活動が苦手で、途中でやめてしまうことがある。 e ● 約束やきまりを聞いて覚えるより、紙面で見ながら説明を聞く方が理解しやすい。 f ○ 役割を与えられたり、取組を認められたりすると熱心に活動する。					
	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
		b	f	e	d	a、c
【3年後の姿】 落ち着かなくなった時の対策を自分で理解し、得意な力を発揮できる。成功体験を積み重ね、自信をもっていろいろな活動に取り組む。						

指導すべき課題	取組を認められると熱心に取り組むことから、落ち着いて係の仕事などに取り組めた時にはすぐに褒めることで、徐々に自分の言動をコントロールできるようになることが期待できる。また、衝動的な言動を減らすことで楽しい活動ができる経験を多く積み、自分で衝動的な言動をコントロールする力を高めていく。
---------	--

長期目標	成功体験を積み重ね、衝動的な言動をコントロールしながら、望ましいコミュニケーションや円滑な集団参加ができる。
------	--

自立活動の指導内容	項目リストアップ	健康の保持 ☐ 生活リズムや生活習慣 ☐ 病気の状態の理解と生活管理 ☐ 身体各部の状態の理解と養護 ☐ 障害の特性の理解と生活環境の調整 ☐ 健康状態の維持・改善	心理的な安定 ☐ 情緒の安定 ☐ 状況の理解と変化への対応 ☒ 障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲	人間関係の形成 ☐ 他者との関わり ☒ 他者の意図や感情の理解 ☒ 自己の理解と行動の調整 ☐ 集団への参加の基礎	環境の把握 ☐ 保有や感覚の活用 ☐ 感覚や認知の特性についての理解と対応 ☐ 感覚の補助及び代行手段の活用 ☐ 感覚を総合的に活用した周囲の状況についての把握と状況に応じた行動	身体の動き ☐ 姿勢と運動・動作の基本的技能 ☐ 姿勢保持と運動・動作の補助的手段の活用 ☐ 日常生活に必要な基本動作 ☐ 身体の移動能力	コミュニケーション ☐ コミュニケーションの基礎的能力 ☐ 言語の受容と表出 ☐ 言語の形成と活用 ☐ コミュニケーション手段の選択と活用 ☒ 状況に応じたコミュニケーション
	指導内容	小集団において、ルールを守ることや負けた時の対応などを身に付けるため、簡単なルールのあるゲーム等に取り組む。【心(3)、人(3)、コ(5)】		学校の中で起こる様々な場面をビデオや絵で見て、その場面を、登場人物の気持ちを考えながら演じたりビデオ撮影等で自分の言動を客観的に見たりしながら、適切な行動を、その理由とともに話し合う中で理解する。【人(2)、コ(5)】		気持ちを安定させるために、身体を自分で適切にコントロールできるようになる。【心(3)、人(2)(3)】	
	短期目標	簡単なルールのゲームで、順番を守ったり約束を守ったりして最後まで参加することができる。		ソーシャルスキル絵カードを見て、セリフを考えたり、ロールプレイをしたりすることができる。		イライラした時に、アンガーマネジメント6秒ルールを使うことができる。	
指導の手立て		・トランプゲーム ・UNO ・ストラックアウト ・ボードゲーム など		・ソーシャルスキル絵カードを使ってロールプレイ ・コミック会話		・アンガーマネジメント6秒ルールを書いた掲示物	

○指導の継続性や系統性を踏まえるために、前年度1年間の目標の達成状況を記入する。

【○うまくいっているところ】(既に行っていること、興味・関心、得意なこと)

【●もう少しでできること、支援があればできること】

○児童生徒に関わりのある人や機関からの情報収集したこと、検査等の結果を示す。

○捉えた実態を6つの区分に振り分ける。

○児童生徒の現在の姿から、数年後や卒業後の目指す姿を想像して記入する。

※中心的な課題を抽出する際や指導目標を設定する際の手がかりとする。

○実態把握で集めた多くの情報が、なぜその長期目標につながるのかという根拠を明確にし、説明する。

※情報を整理したり、取捨選択したりしながら、指導すべき課題を明確にする。

○「指導すべき課題」を踏まえながら、1年間という長いスパンで達成を目指す。

※適宜見直し、適切に変更するなど弾力的に対応する。

○長期目標を達成するために何を指導すれば良いのか6区分27項目を観点にして検討し、指導が必要な要素をリストアップする。

○困難さの原因は1つとは限らず、様々な観点から指導する内容を検討する必要がある。

○洗い出した要素を組み合わせ、具体的な指導内容を設定する。

※関連性高いもの同士を組み合わせたり、実際の学習や生活の場面を踏まえながら組み合わせたりする。

○1学期間程度で、達成を目指す具体的な目標を設定する。

※自立活動の区分項目も記入する。

○短期目標を達成するために、困難さの背景に目を向けて指導の手立てを選ぶようにする。

○児童生徒の得意なことやできることを取り入れる。

【自立活動の指導のポイント】

自立活動の内容は、各教科等のようにそのすべてを取り扱うものではなく、一人一人の実態に応じて必要な項目を選定して取り扱います。よって、時間割の中に「自立活動」という時間を設けて行う場合と、各教科・領域別の授業の中で相互に関連付けて行われる場合と、学校における教育活動全般にわたり行われる場合とがあります。具体的な指導内容を考える際には、本人の特性を踏まえて取り組みやすい環境設定・調整が重要となります。目標は、「あれも・これも」と欲張らずに、達成可能なものを設定しましょう。1～3年を目安とする『長期目標』、1学期(前期・後期)を目安とする『短期目標』の系統性が大切です。

なお、本人が得意とし意欲をもって取り組める活動を大切にしましょう。また、多面的な視点から自立活動の各項目を組み合わせる必要があります。自立活動の指導は、個別の指導計画に基づき、個別指導の形態で行われることが一般的です。指導の目標を達成する上で効果的である場合には、集団を構成して指導することも考えられます。しかし、最初から集団で指導することを前提とするものではないという点に十分留意しましょう。形態、指導期間などに適切な配慮をしましょう。



5 教科別の指導

教科別の指導とは、時間割の中に、各教科の時間を設けて指導することです。指導を行う教科やその授業時数の定め方は、対象となる子供の障害の程度や教育的ニーズ等によっても異なります。

児童生徒の障害の状態や発達段階等に応じた教科別の指導を展開しましょう！



I 知的障害のある児童生徒の各教科の指導

知的障害教育における教科別の指導は、「児童生徒が将来自立し、社会参加する」ためにあります。一人一人の子供の興味・関心、学習状況、生活経験等を十分に考慮して、下の内容から、「I 教育課程について(P1～2)」も参考にして児童生徒にあった内容を選択、編成するとよいでしょう。

○通常の学級の同学年と同じ内容

教科によっては、当該学年と同じ内容が適切である場合があります。

○当該学年より下の学年の内容

その学年の教科の内容を下学年の内容に替えることができます。

○知的障害特別支援学校の各教科の内容

特別支援学校学習指導要領に示されている内容です。知的障害特別支援学校の各教科の内容は、小・中学校の学習指導要領と教科名は同じですが、生活に結びついた内容で構成されています。

【知的障害のある児童生徒の指導計画作成にあたって】

- ① 一人一人の実態を的確に把握することに努め、個々の目標及び指導する内容を明確にすることが大切です。そのためには指導内容をできるだけ具体的に整理し児童生徒にとって、当面必要と考えられる基礎的・基本的な内容を精選します。
- ② 指導内容の具体化については、児童生徒の生活に密着した内容・方法で、系統的・発展的な教科別の指導計画を個別に作成することが大切です。
- ③ 生活に密着した体験的な学習や課題解決的な学習等を他の指導形態との補足的・補完的な関連を図り、発展的な指導ができるようにすることが大切です。指導期間などに適切な配慮をしましょう。



2 視覚障害、情緒障害、肢体不自由、病弱・身体虚弱等の児童生徒の各教科の指導

各教科の目標、各学年の目標及び内容並びに指導計画の作成と各学年にわたる内容の取り扱いについては、小学校及び中学校学習指導要領の第2章に示すものに準じます。

6 「特別の教科 道徳」、「特別活動」、「外国語活動」、「総合的な学習の時間」

いずれの学習も小学校学習指導要領又は中学校学習指導要領に示すものに準ずるほか、特別支援学校学習指導要領を参考にして、指導計画を立てます。児童生徒の特性によっては、習得した知識や技能を実際の生活に応用しにくい傾向があるため、抽象的な指導内容より、体験的に学んでいく方が効果的です。

【指導計画上の配慮点】

- 児童生徒の興味や関心を引く題材(単元)を工夫し、实际的で具体的な体験的活動を通じて、日々の生活の質が高まるようにします。
- 成功体験を多くするとともに、自発的、自主的活動を大切にし、主体的な活動を促します。
- 児童生徒が、集団の中で役割を得て、その活動が遂行できるよう工夫します。



Ⅰ 特別の教科 道徳

よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てることが、道徳科の目標です。さらに、それぞれの障害による困難を改善・克服して、強く生きようとする意欲を高め、明るい生活態度を養うとともに、健全な人生観の育成を図ることが必要です。学校生活においては、係の仕事や手伝い等の取組、動植物の世話をすることで協力する態度や優しい心を身に付ける等の体験的な学習活動の工夫が大切です。

○道徳の内容では、以下4つの項目を踏まえた内容の工夫が必要です。

- A 主として自分自身に関すること
- B 主として人との関わりに関すること
- C 主として集団や社会との関わりに関すること
- D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること

○道徳の指導では、抽象的な思考が苦手な場合を考慮し、各教科等を合わせた指導をはじめ、日常生活のあらゆる場面で、具体的な活動や視覚的教材を活用し、基本的な事柄を身に付けていく方が効果的です。

(例) ペープサート・パネルシアター・

紙芝居・動画・動作化(ロールプレイ)等



○自分の考えを深めるために、ICT機器の思考ツールを活用することもできます。

書字が苦手な児童生徒は、タブレット端末を用いて文字入力をするすることで、書くことへの負荷を下げるができます。また、口頭で発表することが苦手な児童生徒も気持ちを表現することができます。(例)クラゲチャート(ロイロノートの思考ツール)

また、一人一人の障害の状態に応じて、道徳の授業は特別支援学級で行うことも考えられます。

2 特別活動

集団や社会の一員としての見方・考え方を働かせながら、学年や学級その他の様々な集団活動に、自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、資質・能力を育むことを目指しています。その際、児童生徒の障害の状態や特性、生活年齢、学習状況及び経験等に応じて、内容や形態などを工夫することが大切です。

○学級単独で実施する場合、指導の内容として「日常生活の指導」及び「生活単元学習」など各教科等を合わせた指導で効果的に扱えるものもあります。

○人数の少ない学級においては、必要に応じて他の学級や学年と合同で行うなど、適切な集団構成に配慮することが必要です。

○交流及び共同学習の中で実施する場合には、そのねらいについて、通常の学級の担任と実施の方法や内容について十分に検討することが必要です。

○具体的活動内容例

【小学校】

学級活動、児童会活動、クラブ活動、学校行事(儀式的行事、文化的行事、健康安全・体育的行事、遠足・集団宿泊的行事、勤労生産・奉仕的行事)

【中学校】

学級活動、生徒会活動、学校行事(儀式的行事、文化的行事、健康安全・体育的行事、旅行・集団宿泊的行事、勤労生産・奉仕的行事)

特別活動の指導を計画する際には、各教科、道徳科、自立活動、総合的な学習の時間や各教科等を合わせた指導との関連を図ることが必要です。



3 外国語活動

小学校の特別支援学級に在籍する、3年生及び4年生においては、通常の学級と同様に外国語活動を行うことになります。ただし、知的障害者である子供に対する特別支援学校の教育課程を参考にした場合には、「児童や学校の実態を考慮し、必要に応じて設けることができる」となっています。

○障害の状態や興味・関心等を考慮し、指導内容の適切な精選に努め、その重点の置き方など工夫するようにします。

○指導に当たっては、自立活動における指導と密接な関連を保つようにします。

○中学校の知的障害特別支援学級では、生徒一人一人の実態に考慮し、必要に応じて外国語科を設けることができます。外国語科では「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語の音声や基本的な表現に触れる活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成する」ことを目標にしています。

①視覚的・聴覚的教材の活用、②身近なコミュニケーションの場面設定、③日常生活でなじみのあるものを活用、の3点を意識して外国語活動・外国語科の効果的な授業づくりを目指しましょう。



4 総合的な学習の時間

授業時数を確保し、内容については個々の実態に合わせて、興味・関心を引き出すとともに、生活の諸活動に関連する事柄を体験的に取り上げます。また、学校や地域の実態に応じた工夫を生かした活動を検討して進めます。実施の際には個別指導の形態では難しいこともあるので、特別支援学級全体、グループでの学習、もしくは通常の学級との交流及び共同学習として実施していくとよいでしょう。

○各教科、領域の内容について横断的、総合的な課題を設定しましょう。

○発達段階を考慮して具体的なねらいを設定しましょう。

○実施時間及び実施形態

・学年で行う時間 ・特別支援学級独自の時間

・通常の学級や他の特別支援学級との交流及び共同学習

○総合的な学習の時間と生活単元学習の相違点

	総合的な学習の時間	生活単元学習（詳細はⅠ－２「生活単元学習」参照）
ねらい	○自ら課題を見つけ、学び、考え、主体的判断をすることで問題を解決していく資質や能力を育成する。 ○学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的に取り組む態度を培う。	○将来の生活に必要な基礎的知識・技能・態度等の育成を目指す。 ○児童生徒が、日常の生活を送っていく上での課題解決や問題解決に関連した活動を授業の中で経験する。 ○身近な生活から地域社会の中で、個々の実態に応じた自立的な生活を送るために必要な事柄を体験的に学習する。
留意点	○総合的な学習を通して、自己の生き方を考えることができるようにする。	○各教科や領域等の内容が含まれ、将来の生活の流れやまとまりに基づいた計画を作成する。
学習内容例	興味のある課題を調べる学習、居住地などの地域に関する調査学習、交流学習（交流学級、他校、他校種）、国際理解学習等	日常生活にかかわる学習（整理整頓や身近自立的なもの）、買い物や交通手段などの社会参加にかかわる学習、季節にかかわる学習、行事にかかわる学習等

7 交流及び共同学習

特別支援学級の児童生徒と通常の学級の児童生徒が一緒に参加する活動は、相互の触れ合いを通じて豊かな人間性をはぐくむことを目的とする交流の側面と、教科等のねらいの達成を目的とする共同学習の側面があるものと考えられます。「交流及び共同学習」とは、このように両方の側面が一体としてあることをより明確に表したものです。

通常の学級の児童生徒、地域社会の人々や特別支援学校の児童生徒と共に活動し、互いに触れ合う機会を設けることは、豊かな人間性や社会性を育む上で大きな意義があります。障害のある児童生徒への正しい理解や認識を深める上でも良い機会となります。

1 意義

我が国は、障害の有無にかかわらず、誰もが相互に人格と個性を尊重し合える共生社会の実現を目指しています。幼稚園、小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、中等教育学校（以下「小・中学校等」という。）及び特別支援学校等が行う、障害のある子供と障害のない子供、あるいは地域の障害のある人とが触れ合い、共に活動する交流及び共同学習は、障害のある子供にとっても、障害のない子供にとっても、経験を深め、社会性を養い、豊かな人間性を育むとともに、お互いを尊重し合う大切さを学ぶ機会となるなど、大きな意義を有するものです。

（交流及び共同学習ガイド H31 文部科学省改正版より）

2 形態

○通常の学級と特別支援学級との交流及び共同学習

校内等の通常の学級と特別支援学級との交流及び共同学習

○地域の人々との交流及び共同学習

学校のある地域の人々との交流及び共同学習

○居住地校における交流及び共同学習

特別支援学校に通う子供たちと、居住する地域の小・中学校等の子供たちの交流及び共同学習

○学校間における交流及び共同学習

幼稚園、小・中学校、高等学校、中等教育学校と特別支援学校間の交流及び共同学習

3 交流及び共同学習の時数

交流及び共同学習を実施するに当たっては、特別支援学級に在籍している児童生徒が、通常の学級で各教科等の授業内容が分かり学習活動に参加している実感・達成感を持ちながら、充実した時間を過ごしていることが重要です。児童生徒一人一人の障害の状態や特性が異なることと同様に、交流及び共同学習が必要な時数についても、児童生徒一人一人異なるものです。

通常の学級における交流及び共同学習を必要とする特別支援学級に在籍している児童生徒については、「原則として週の授業時数の半分以上を目安として特別支援学級において児童生徒一人一人の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等に応じた授業を行うこと。」と示されています。ただし、例えば、次年度に特別支援学級から通常の学級への学びの場の変更を検討している児童生徒について、段階的に交流及び共同学習の時数を増やしている等、当該児童生徒にとっての教育上の必要性がある場合においては、この限りではありません。また、特別支援学級に在籍している児童生徒が大半の時間を交流及び共同学習として通常の学級で学んでいる場合は、通常の学級における指導と通級による指導を組み合わせた指導を検討すべきであると考えられます。

(引用：特別支援学級の教育課程編成ガイド【改訂第4版】R4 茨城県教育委員会)

4 通常の学級と特別支援学級との交流及び共同学習の内容

特別支援学級の一人一人の児童生徒の実態や目標などに応じて、どのような交流及び共同学習を経験させるのか吟味することが大切です。具体的には次のような内容が考えられます。

- 学校行事(運動会・学習発表会・遠足・合唱コンクール等)
- 総合的な学習の時間
- 各教科等の学習
- 給食や清掃活動、学級活動、児童会・生徒会活動、部活動
- 休み時間での交流

5 交流及び共同学習における配慮事項

通常の学級と特別支援学級との交流及び共同学習を進めるに当たっては、次のような点に配慮することが大切です。

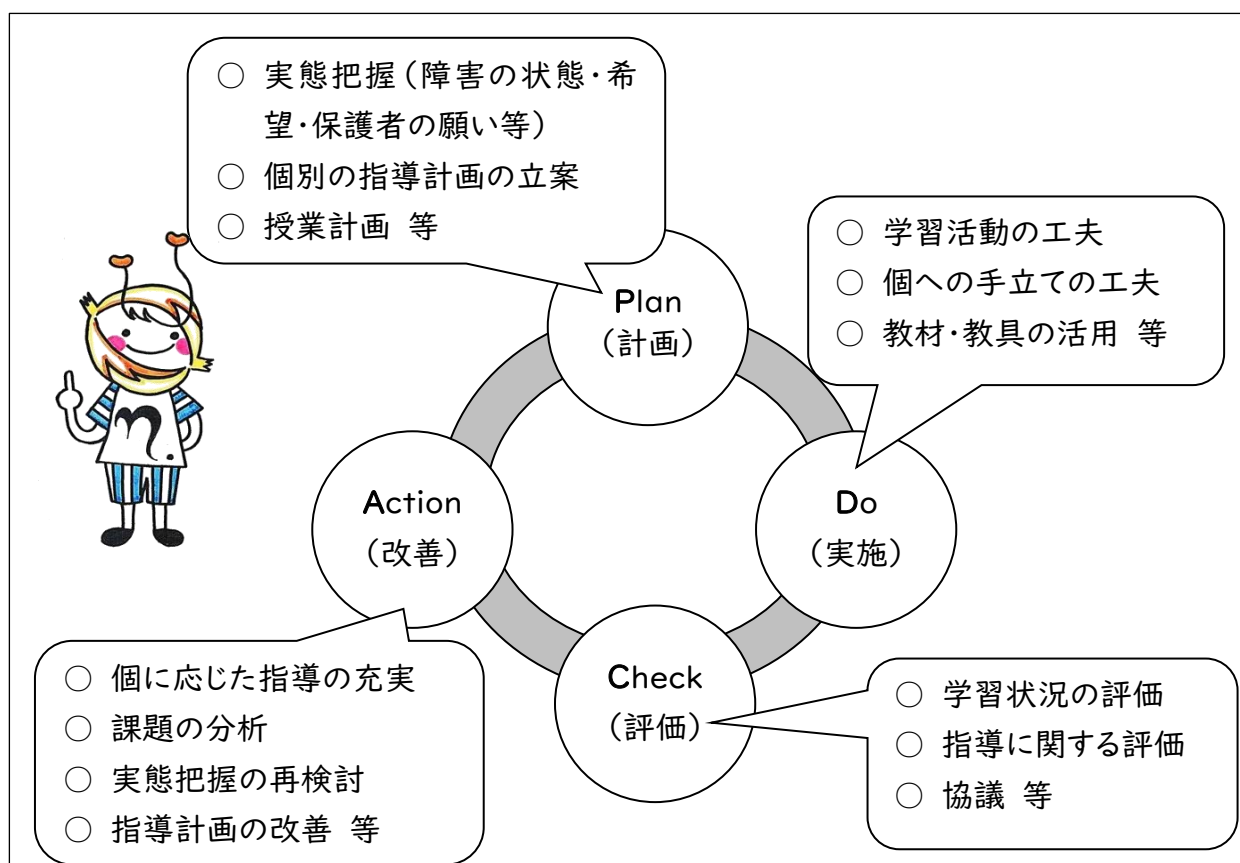
- 特別支援学級の児童生徒の障害の状態、発達段階、特性等を踏まえた指導上の配慮点について、通常の学級の担任と共通理解を図りましょう。チーム・ティーチングを実施する場合は、役割分担について事前に打ち合わせを行いましょう。
- 特別支援学級及び通常の学級の児童生徒相互に、過度の負担が生じないように、交流する内容を十分検討しましょう。
- 個別の指導計画や年間指導計画に位置付けるなど計画的に実施しましょう。

- 交流及び共同学習を行う通常の学級において、特別支援学級の児童生徒が学級の一員として受け入れられるように、事前学習を丁寧に行うなどの配慮をしましょう。机や椅子、ロッカーや靴箱等についても確認しましょう。
- 授業において交流及び共同学習を実施する場合は、特別支援学級の児童生徒が通常の学級の授業の中でも、授業内容が分かり学習活動に参加している実感・達成感を持ちながら、充実した時間を過ごしつつ、生きる力を身に付けられるよう、合理的配慮の内容を十分に検討しましょう。
- 特別支援学級に在籍している児童生徒の実態によっては、最初から通常の学級全員と交流するのが難しい場合があります。少人数の児童生徒との交流からスタートするなど集団に対する不安感に配慮しましょう。
- 保護者の協力を得られるよう、計画については必ず説明をし、理解を求めましょう。

Ⅱ 特別支援学級等の授業づくり

この章では、特別支援学級における学習指導について説明をしていきます。一日の学校生活において、中心となるものは、もちろん学習指導、つまり毎回の授業になります。児童生徒は1年間に 1,000 時間あまりの授業を受けています。その授業を児童生徒にとって、わかりやすいものにしていくことは、彼らの将来の自立と社会参加の基盤を養う上で大切なものであり、私たち教師の力量が問われます。

授業づくりは、「個別の指導計画」をもとにして、次のように進めていくことが基本となります。まず、児童生徒の実態を的確に把握し、指導計画を立案します(Plan)。次に、指導計画に従って、様々な手立てを講じながら学習活動を実施します(Do)。そして、児童生徒の学習状況を評価するとともに、教師の指導の妥当性についても評価します(Check)。その評価をもとに、課題を分析し授業の改善を図ります(Action)。この一連の流れをPDCAサイクルによる授業づくりといいます。＜下図参照＞



【PDCAサイクルによる授業づくり】

では、一人一人の教育的ニーズが異なる児童生徒に対し、どのように授業をつくって実践していけばよいのか、基本的な考え方や配慮事項についてまとめてみます。

【授業づくりの手順】

：授業づくりの8つの視点

① 児童生徒の実態把握を的確にする

※単元・題材に関する実態も的確に把握する。



② 指導の目標・ねらいを明確にする

※年間指導計画、学習指導要領等から指導目標（単元目標）やこの単元で何をねらうのかを明確にする。



③ 妥当性のある目標・ねらいを考える

※児童生徒のこれまでの経験や実態に合っているか考える。



④ ニーズに合った内容を考える

※指導内容を工夫する。児童生徒の発達段階や障害の特性に合わせて考える。

☆「個別の指導計画」との関連を考慮する。



⑤ 順序性のある指導計画を考える

※児童生徒の目標達成度合いを予測し、それを順序立てて指導計画を立てる。
導入・展開・まとめを工夫する



⑥ グループ編成は適切か考える
＜全体、グループ、個別＞

導入・展開・まとめの工夫

※児童生徒のこれまでの経験や実態に合っているか考える。



⑦ 学習環境や設定は適切かどうか考える

※指導内容を工夫する。児童生徒の発達段階や障害の特性に合わせて考える。

☆「個別の指導計画」との関連を考慮する。



⑧ 授業の効果を高める教材・教具の工夫をする

場の工夫

※目標を達成できるように、発達段階に合った効果的な教材・教具の工夫をする。



⑨ 教員の役割分担を明確にする

教材・教具の工夫

※授業づくりの段階で共通理解を図り、役割分担を明確にする。



⑩ 児童生徒の反応を予想する

チーム・ティーチング

※実態の分析から、児童生徒の動きや反応の様子を予測し、指導や発問の内容、称賛の仕方などを工夫する。



⑪ 評価方法について明確にする

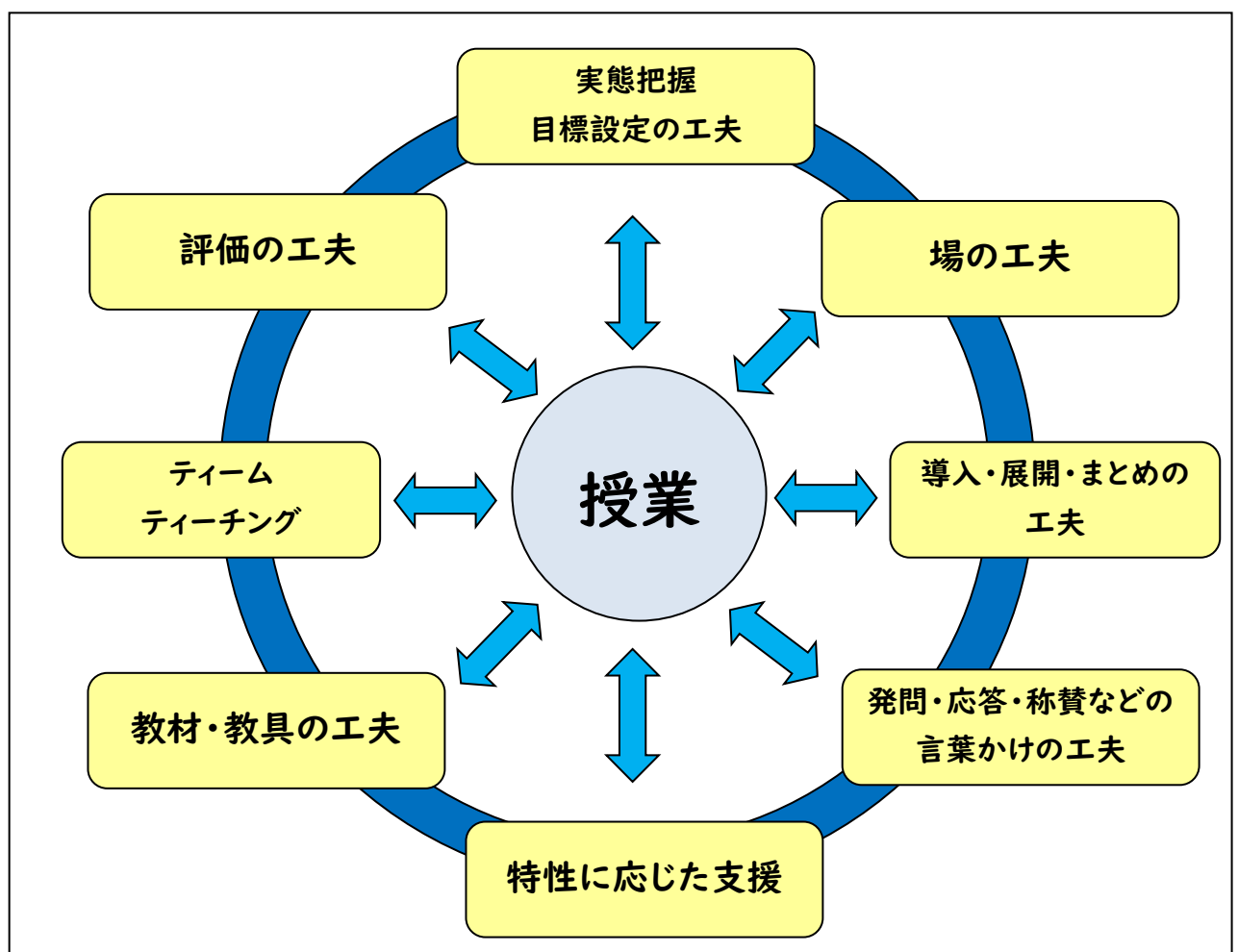
発問・応答・称賛などの言葉かけの工夫

※児童生徒の反応や内容を客観的に見取り価値するとともに教師自身の指導についても評価し、次時の授業改善につなげる。

評価の工夫

児童生徒にとってわかりやすく、達成感を得られ、さらに意欲と自信を高められるような授業を実践していくためには、多くの配慮すべき事項があります。「何をどう計画、準備していけばいいのかわからない」という声もよく聞かれるところですが、ここでは、多くの配慮点の中から、授業づくりに必要な8つの視点を示し、焦点化することで、授業づくりをより効果的に進めていけるようにしました。（下図参照）

この8つの視点については、特に順序性があるわけではなく、それぞれが密接に関連しています。ここに示した8つの視点について、目の前の児童生徒を想定しながら、授業を計画し、準備していくことで、よりよい授業が実践されることと思います。この後、8つの視点について1つずつ簡単に解説をしていきます。



【授業づくり8つの視点】

Ⅰ 実態把握、目標設定の工夫

児童生徒の障害の状態は、一人一人異なっていますので、必然的に指導内容や指導方法も一人一人に合わせていくことになります。そのため、的確な実態把握が求められます。まずは、様々な情報を収集し、その子の全体像を把握しましょう。

実態把握 学級経営編 5 教育課程の編成

Ⅰ 実態把握の考え方の基本

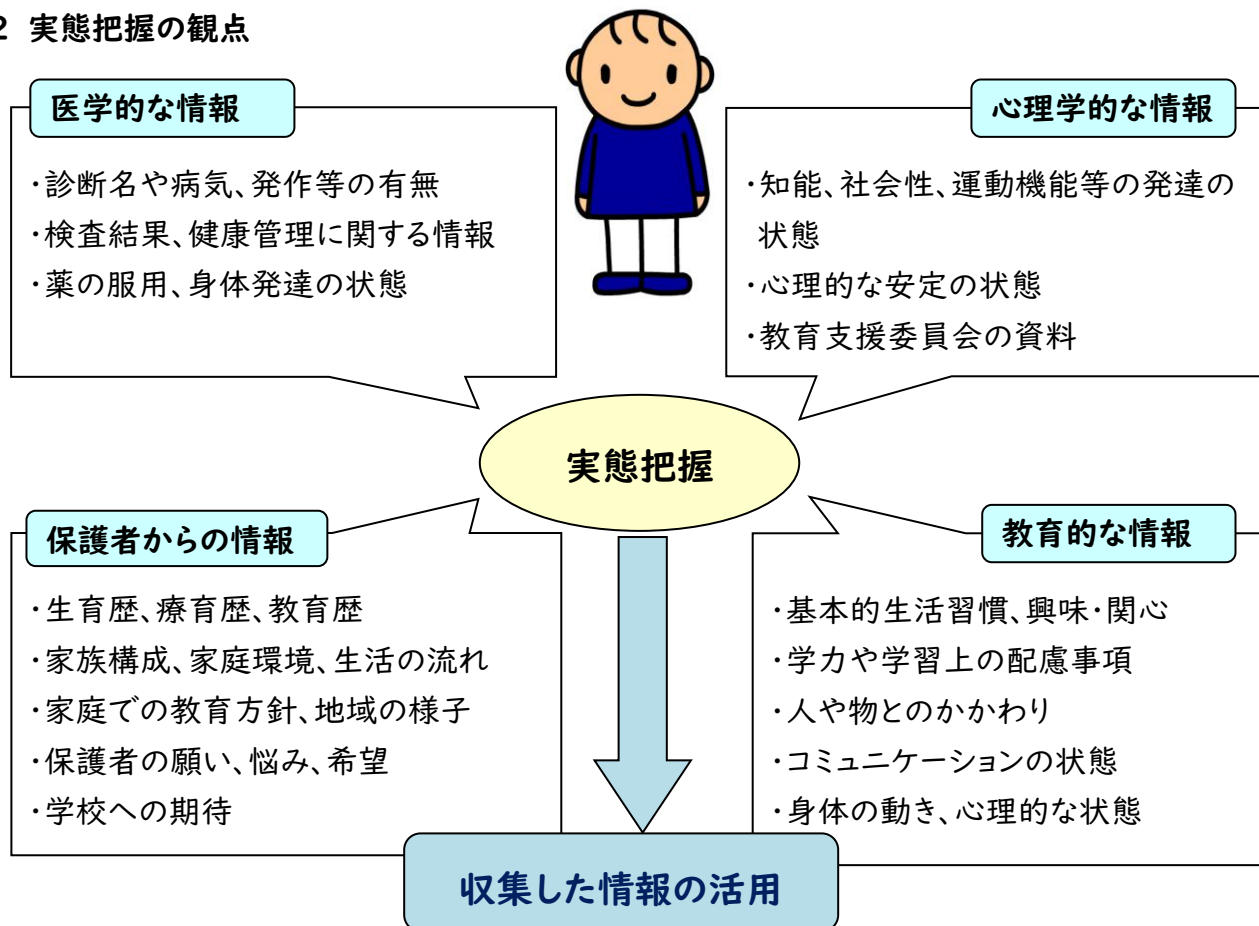
一人の子供として考えること

障害名にとらわれず、まずは目の前の「子供」本人を受け入れて、その姿を見い出すことが大切です。「ADHDの指導」ではなく、「A君の指導、B君の指導は」といった、個々の実態把握に基づく対応が基本です。

「できること」を知ること

障害を背景要因、環境要因からも肯定的に理解することが大切です。「できないこと」だけでなく、「できること」「できそうなこと」を知ることが実態把握の基本です。

2 実態把握の観点



きちんと整理し、教師が指導の中で位置付けて活用していくことが重要

3 実態把握の留意点

- 指導に役立つ実態把握を目指しましょう。
 - 実態把握を指導に生かします。
- 「できるところ」「もう少しでできそうなところ」の発見を心がけましょう。
 - 「できないところ」だけを見ないようにします。
- 柔軟な目で児童生徒をみましょう。
 - 思い込みによる実態把握にならないようにします。
- 常に児童生徒と関わりながら観察しましょう。
 - 児童生徒の様子は場面によって変化します。
- 現象面のみに目を向けず、行動の背景理解に努めましょう。
 - 表れる行動は氷山の一角です。
- 検査、調査、観察は実態把握のための資料の一つと心得ましょう。
 - 例えば検査結果のみにとらわれるのではなく、全体像、臨床像を見失わないようにします。
- 複数の教師の目からの情報を実態把握に反映させましょう。
 - ひとりよがりの、自分だけの見方にならないようにします。
- 一時期の検査、調査、観察で実態把握を終わらせないようにしましょう。
 - 子供の姿は日を追うごとに変化し、日々成長します。

4 各単元(題材)に関する丁寧な実態把握を

児童生徒の実態について、上記のような情報を収集し整理して、全体像を把握しながら、個別の指導計画や年間指導計画を並行して作成していきます。そして、各単元や題材の計画を立案し、毎回の授業へとつなげていきます。

ここで、考えておかなければならないことは、先ほどの全体的な児童生徒の実態のみでは、これから、実施しようとしている単元(題材)、あるいは、本時の授業に関する児童生徒の実態について、十分に把握しきれていないことが多いということです。

そこで、これから行う授業に関する実態を丁寧に把握しておけば、的確な目標が設定でき、指導の手立てを講じることができます。

※例えば、算数・数学等で、「買い物学習」の単元を実施する場合…

- 買い物の経験はどの程度あり、どのように行っているのか
- 金銭(紙幣、硬貨、おつり、価値…)に関する理解はどの程度なのか
- 必要な額を出せるのか、おつりをもらうことの意識はもっているのか
- 計算力はどの程度なのか
- 決められた金額内で品物を選ぶのか

など必要と思われることが多く出てきます。今回の「買い物学習」におけるねらいは何かを整理した上で、そのねらいに関するより詳細な実態を把握しておくことが的確な目標設定につながります。次に示すような学習到達度をみるチェックシートのようなものを活用することも有効です。

学習達成度チェックシート＜金銭＞

主なねらい	具体的な指導目標	A	B	C
1 お金の種類を分別することができる	① 1円、5円、10円、50円、100円、500円をそれぞれの金種に分けることができる			
	② 1,000円、2,000円、5,000円、10,000円をそれぞれの金種に分けることができる			
2 硬貨、紙幣の名称を言うことができる	① 1円、5円、10円、50円、100円、500円の名称を言えることができる			
	② 1,000円、2,000円、5,000円、10,000円の名称を言えることができる			
3 単一硬貨や紙幣を10枚まで数えることができる	① 1円硬貨10枚までの金額を数えることができる			
	② 10円硬貨10枚までの金額を数えることができる			
	③ 100円硬貨10枚までの金額を数えることができる			
	④ 1,000円紙幣10枚までの金額を数えることができる			
4 各硬貨間、及び紙幣間の等価交換が分かる	① 10円と1円10枚、100円と10円10枚、1,000円と100円10枚の等価関係が分かる			
	② 5円と1円5枚、50円と10円5枚、500円と100円5枚の等価関係が分かる			
	③ 10円と1円10枚、50円と10円5枚、500円と100円5枚の等価関係が分かる			
	④ 5,000円と1,000円5枚、10,000円と1,000円10枚の等価関係が分かる			
5 紙幣の値段より、大きいお金を支払って買い物することができる	① 100円以下の品物に100円を支払うことができる			
	② 500円以下の品物に500円を支払うことができる			
	③ 1,000円以下の品物に1,000円を支払うことができる			
	④ 1,000円より高い品物に対して、適当な枚数の紙幣や硬貨を支払うことができる			
6 品物の値段に見合ったお金（硬貨や紙幣を組み合わせ）を支払うことができる	① 2種類の硬貨の組み合わせで支払うことができる（例：23円）			
	② 3種類の硬貨の組み合わせで支払うことができる（例：512円）			
	③ 4種類の硬貨の組み合わせで支払うことができる（例：851円）			
	④ 硬貨と紙幣を組み合わせで支払うことができる（例：1,734円）			
7 割引や値引きされた金額が分かる	① 割引や値引きによって、品物が安く買えることが分かる			
	② 100円の半額が50円であることが分かる			
	③ 100円の2割（20%）、3割（30%）引きが分かる			
8 小遣い帳をつけることができる	① 買い物後、レシートを見て、自分がいくら払ったのかが分かる			
	② レシートのお釣りの表示金額と実際のお釣りの金額が同じであることが分かる			
	③ 小遣い帳に買った品物、支払ったお金、お釣りをそれぞれ記入することができる			

※評価の観点

A:できる（分かる）と思われる

B:部分的な支援があればできる（分かる）と思われる

C:できない（分からない）と思われる

＜参考＞ HI9 岩手県立総合教育センターより

同じように、「調理実習」を行うのであれば、調理に関する様々な知識や技能、関心や意欲等について、事前に十分把握して、適切な目標を設定し、学習を進めていくことが必要になります。

【各単元（題材）に関する実態把握のポイント】

☆授業で指導しようとしている内容に関して・・・

- つまづいている点、課題を発見する
- どこまで習得しているか把握する
- 強い力、得意なやり方を探る
- 課題に取り組んでいるときの様子を観察する
- つまづいている要因を推定する（未学習、誤学習の有無も）
- どこで支援を必要としているかを把握する
- 本人、家族のニーズを把握する



日頃の教育活動全般を通して、意識的にこれから授業で扱う事柄に関する実態を把握していくことが大切です。「昨年はこうでした」という前担任からの情報や「家庭ではこうやっています」という保護者からの情報も貴重な資料となります。時には、単元に入る前に、時間を見つけて、また遊びの時間を活用して、試行的な学習を取り入れて、情報を得ておくことも有効です。

（例）

- 調理実習で包丁を使用する
 - ・図工や遊びの時間に粘土遊びを行い、おもちゃの包丁で切ってみる
 - ・模型の野菜と包丁で、ごっこ遊びをしてみる など
- サッカーをする
 - ・休み時間に一緒にボール蹴りをしてみる
 - ・教室で簡単なPK合戦をしてみる など

各教科の学習（漢字、計算等）については、前ページに示したような系統的に整理された学習達成度をみるチェックリスト等が教育機関や文献等で紹介されていますので、それらを活用してもよいでしょう。各検査等で使用されている項目＜LDI-R（LD 判断のための調査票）、S-M 社会生活能力検査等＞も参考にできると思います。



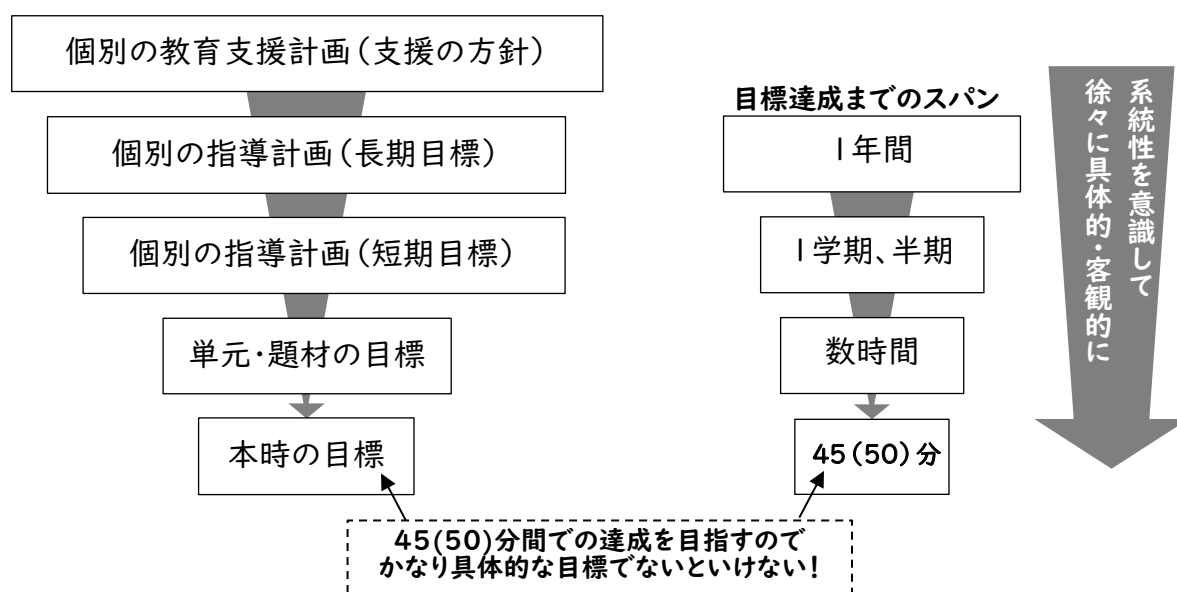
目標設定の工夫

単元（題材）目標や本時の目標については、その単元（題材）、その時間で達成可能な内容を具体的に表記することが重要です。具体的に表記することで、評価の際、目標の達成状況が明確になり、次の目標を的確に設定していくことができます。その積み重ねが、一人一人の教育的ニーズに応じたよりよい授業となります。

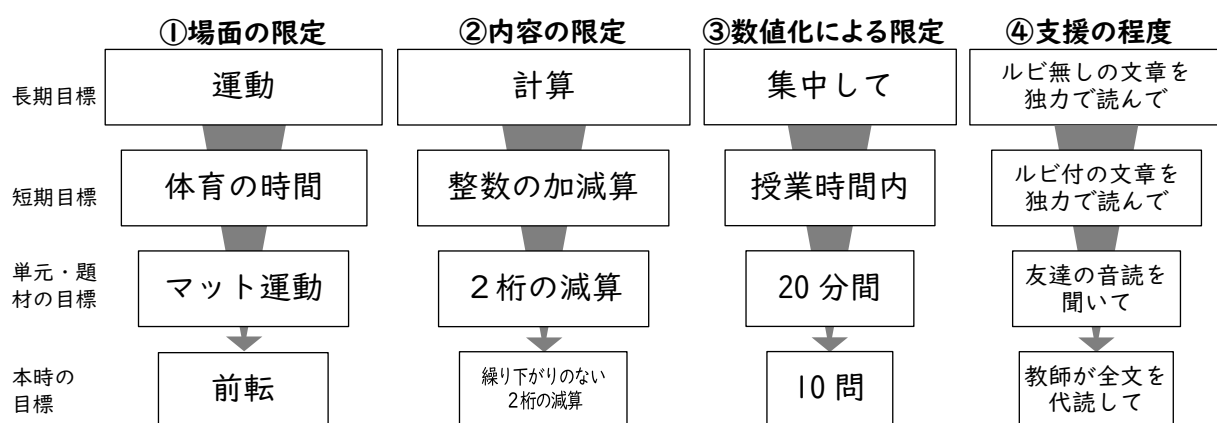
キーワードは、**系統的、具体的、客観的**です。

Ⅰ 系統的な目標設定

授業における目標設定は、個別の教育支援計画に記された支援の方針や、個別の指導計画に記された目標との系統性（つながり）を意識することが大切です。



【系統的な目標設定の観点と例】



※支援の量を減らしたり、より間接的な支援にしたりする。

本時の目標については、基本的に、その時間に達成すべきものなので、次時も同じ目標にならないようにしたいものです。達成できないということは、目標が高すぎた、あるいは手立てを含め指導が適切でなかったということになります。



2 個別の指導計画における目標設定の考え方

児童生徒の実態に応じて、小学校学習指導要領、中学校学習指導要領、特別支援学校学習指導要領を参考にします。

例として、小学校3年生のある児童を対象に、どのように目標を設定していくのか、考えていきましょう。

例：対象児童が小学校3年生の場合

(1) 当該学年の各教科等の目標及び内容

実態把握の結果、もし、当該学年の学習内容が適切と判断した場合には、当該学年は小学校3年生なので、小学校学習指導要領解説の第3学年及び第4学年の目標や内容を参考に、目標設定を行います。

〔第3学年及び第4学年〕

1 目標

- (1) 日常生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に親しんだり理解したりすることができるようにする。
- (2) 筋道立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをまとめることができるようにする。
- (3) 言葉がもつよさに気付くとともに、幅広く読書をし、国語を大切にして、思いや考えを伝えあおうとする態度を養う。

※ 身に付けるべき資質・能力の3つの柱のうち、「学びに向かう力、人間性等」に係る指導事項は、国語科の学習指導要領の内容には示されていません。そのため、第3学年及び第4学年の「目標」を参考に、設定することになります。

2 内容

〔知識及び技能〕

- (1) 言葉の特徴や使い方に関する次の事項

- ア 言葉には、考えたことや思ったことを表す働きがあることに気付くこと。
- イ 相手を見て話したり聞いたりするとともに、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などに注意して話すこと。
- ウ 漢字と仮名を用いた多表記、送り仮名の付け方、改行の仕方を理解して文や文章の中で使うとともに、句読点を適切に打つこと。また、第3学年において、・・・

〔思考力・判断力・表現力等〕

- A 話すこと・聞くこと

- (1) 話すこと・聞くことに関する次の事項を身に付けることができるように指導する。

- ア 目的を意識して、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を比較したり分類したりして、伝え合う必要な事項を選ぶこと。
- イ 相手に伝わるように、理由や事例などを挙げながら、話の中心が明確になるよう話の構成を考えること。
- ウ 話の中心や話す場面を意識して、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などを工夫すること。
- エ 必要なことを記録したり質問したりしながら聞き、話し手が伝えたいことや自分の聞きたいことの中心を捉え、自分の考えをもつこと。

学習指導要領を参考にして、資質・能力の3つの柱に基づいた目標を設定する。

(2) 当該学年より前の各教科等の目標及び内容

対象児童が、障害の種類や程度により、当該学年の各教科等の目標及び内容が困難な場合には、「当該学年より前の各学年の各教科等の目標及び内容」を設定します。

小学校3年生の児童の場合、当該学年より前の学年は小学校2年生になりますので、小学校学習指導要領の、第1学年及び第2学年の「目標及び内容」が適切かどうかを判断し、適切と判断した時には、同様に学習指導要領を参考にして、資質・能力の3つの柱に基づいて目標を設定します。

[第1学年及び第2学年]

1 目 標

- (1) 日常生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に親しんだ理解したりすることができるようにする。
- (2) 筋道立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをまとめることができるようにする。
- (3) 言葉がもつよさに気付くとともに、幅広く読書をし、国語を大切にして、思いや考えを伝えあおうとする態度を養う。

2 内 容

[知識及び技能]

学習指導要領を参考にして、資質・能力の3つの柱に基づいた目標を設定する。

- (1) 言葉の特徴や使い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
 - ア 言葉には、物事の内容を表す働き方や、経験したことを伝える働きがあることに気付くこと。

(3) 知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校小学部・中学部の各教科の目標及び内容

知的障害があり、「当該学年より前の各学年の各教科等の目標及び内容」が難しい場合には、「知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校小学部・中学部の各教科の目標及び内容」に基づいて設定します。

その際、参考とするのは、特別支援学校学習指導要領各教科等編です。

特別支援学校には、小学部・中学部・高等部が設けられており、幅の広い実態差にも対応できるように、それぞれの学部で1段階、2段階、などと、段階が設定されています。各部のそれぞれの段階が、児童生徒の発達段階のどのあたりに相当するのかを表で示してあります。対象となる児童生徒が、知的障害のどの段階に当てはまるのかを、学習指導要領の内容と照らし合わせて、目標を設定していきます。

小学部			中学部		高等部	
1段階	2段階	3段階	1段階	2段階	1段階	2段階
発達初期	幼稚園	小1～2	小2～3	小3～4	小4～6	小5～中1～

<参照：筑波大学 米田宏樹「各教科等を合わせた指導の基本」>

3 具体的、客観的な目標設定

目標をより具体的・客観的に記述することで、評価の観点が明確になり、誰が評価しても同じ評価ができるようになります。また、授業のねらいが焦点化され、児童生徒にとって分かりやすい授業にもつながります。具体的・客観的な目標設定には、以下の3つのポイントがあります。

(1) 観察及び評価（○×）可能な目標にします。

子供の内面で起きていることを目標にするのではなく、外からでも観察可能な行動を目標にします（行動の用語を使います）。

<例>

知ることができる（行動の用語ではない）

↓

選ぶことができる、記述することができる、言うことができる…（行動の用語）

理解することができる（行動の用語ではない）

↓

説明できる、例を挙げることができる、言い換えることができる…（行動の用語）

きちんと、しっかりと、丁寧に ～ できる

↓

手順表のとおり、手本と同じように、印と印を合わせて…

(2) 目標達成の条件を示します。（場面、教師の支援の内容等）

目標をより具体的にするために、条件に関する記述を添えます。これによって、評価の観点が明確になります。以下に条件の例を示します。

○言語的な指示に関する条件

<例>・口頭でのルール説明で… ・一つ一つ順番に言葉で伝えることで…

○視覚的に示された指示や教材に関する条件

<例>・教室前に掲示された学級のルールを読んで… ・挿絵のある文章を読んで…

○デモンストレーションに関する条件

<例>・教師が前転をするのを見て… ・友達が発表するのを見て…

○道具や教材に関する条件

<例>・漢字にルビが振ってある文章を読んで… ・4年生相当の文章題を…

○環境設定に関する条件

<例>・ペアでの説明活動で…

○支援の仕方に関する条件

<例>・隣で教師が教科書を読むのを聞いて… ・教師が注意を促す言葉かけをした時に…

(3) 目標達成の基準を示します。(回数、持続時間、正答率等、数値で示すとよい)

目標をより具体的にするために、数値化できるものは数値化しながら、目標の達成基準に関する記述を添えます。あわせて、評価の方法に関する記述も添え、評価の観点を明確にします。

○達成基準の例

- ・ 80%できる ・ 10問中7問できる ・ 5回できる
- ・ 算数の授業の間～できる ・ 10分間続けてできる ・ 2m運ぶことができる

○評価の方法の例

- ・ 業者テストで… ・ 子供が記述したワークシートで…
- ・ 教師自作のテストで… ・ 教師による観察で… ・ 子供の発言で…

<例>本時の目標「落ち着いて課題に取り組むことができる」

このような目標を立ててしまうことがよくありますね。

「落ち着いて」とは、どのような状態をいうのでしょうか？

「落ち着いて」の評価基準が曖昧なため、教師の主観による評価が中心となったり、教師間の評価がズレてしまったりするため、適切な評価にならず次の目標設定も難しくなります。例えば・・・

- ・ 「20分間着席してプリントに取り組むことができる」
- ・ 「課題に10問取り組み、7問正解することができる」
- ・ 「手順表を見て、最後まで一人で作成することができる」・・・

このように目標設定を工夫すると確かな評価ができ、次の目標設定に確実につながっていきます。



4 「本時の目標」設定のポイント

- 個別の教育支援計画、個別の指導計画との系統性が意識されている。
- 観察及び評価（○×）可能な目標である。
- 条件が示されている。
- 基準が示されている。
- 学習を終えた段階で予測される成果や結果を書く。
- 子供の視点に立って設定する。主語は子供。 例)～させる。→ ～できる。
- 肯定的な表現で書く。 例)～離席しない。→ ～着席して取り組むことができる。
- 一つの目標について、一つのことだけを述べるようにする。
- 子供の強い力を利用できている。

2 場の工夫

児童生徒の学習意欲を高め、目標に迫るためには、指導内容や一人一人の実態に応じた場の工夫が必要になります。人的・物的な環境を整えたり、活動の場所を変化させたりして、児童生徒が安心感をもち、集中して楽しく学習できる場を工夫してみましょう。

1 人的環境を整える

通常の学級のような大きな集団の中では、緊張感や不安感から自分をうまく表現できないことがあります。安心して学習に取り組むために、まずは教師との一対一の個別の学習から始め、徐々にペアやグループなどの小集団にしていくのもいいでしょう。

ただし、個々の発達段階の違いや児童生徒同士の相性もありますので、小集団の編成の際には配慮が必要です。

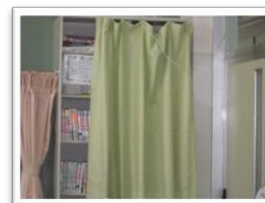


2 物的環境を整える

授業に意欲的に参加したり、目的とする活動に集中して取り組んだりすることができるようにするためにも、物的環境を整えることが必要です。例えば、算数・数学等では、「買い物学習」でお店を設定し、代金の計算をすることや、「数」の学習でボウリング場を設定し、倒したピンの数の計算をする活動など、楽しくできるように工夫しましょう。児童生徒の趣味や好きなキャラクター等を利用した場の設定も効果的です。



また、集中の妨げになる掲示物や備品等は、精選したり、カバーやカーテンで見えないようにしたりして、視覚的な刺激を減らしましょう。音（聴覚的な刺激）に対する配慮も必要です。



カーテンの活用

3 活動場所を変化させる

同じ教室内を、パーテーションなどを利用しながらいくつかのスペースに分けることで、決まった活動は決まった場所で行えるよう、教室環境を設定するとよいでしょう。

（場の構造化）

- （例）
- ・ 各自の机のスペース→学習
 - ・ 大きめのテーブルのスペース→作業（製作活動）
 - ・ カーペットのスペース→ゲームや遊び
 - ・ ソファのスペース→読書 等

また、パソコン室や調理室等、特別教室の利用も効果的です。



パーテーションの利用

3 導入・展開・まとめの工夫、単元計画

1 時間の授業を計画する際に、導入→展開→まとめの一連の流れを工夫することは、活動への意欲づけや集中力の持続、学習目標の達成のために、重要なポイントになります。45分(50分)の時間を児童生徒の実態を踏まえながらどう組み立てていくか、順序立てて考えていきましょう。

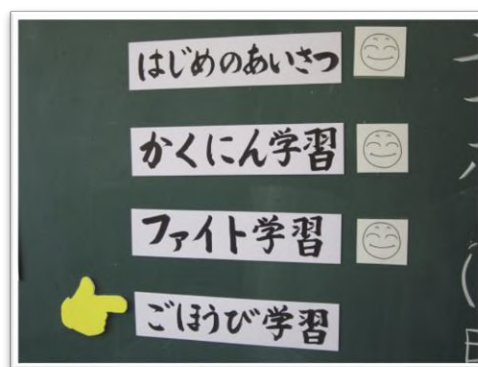
1 導入の工夫

授業の導入の時間には主に次の3つことをねらいます。



特別支援学級に在籍している児童生徒は、見通しがもてないために、不安になったり活動に取り組めなかったりする場合があります。授業の始まりには、視覚的な情報(板書や掲示)と聴覚的な情報(言葉での説明)で見通しをもたせることが必要です。

授業を小集団で行う場合には、一人一人に設定された目標を伝えましょう。児童生徒が自分の目標を理解して活動に取り組むことによって、それができたという達成感を感じることができるのです。



1 時間の学習の流れの掲示



子供の意欲を高めることをねらった
読み聞かせ

また、日付・曜日・天気 of Q&A、歌、音読、読み聞かせなど、興味・関心の高い活動でウォーミング・アップをするのも、意欲を高めるのに有効です。それが、次の展開につながる活動であればさらに効果的です。

2 展開の工夫

展開の工夫は、授業づくりの視点の全てに大きく関連しています。個に応じた指導するためには、児童生徒一人一人の実態把握をもとに、授業の目標達成のための活動内容と方法（どんな場で、どんな教材・教具を活用して、どんな支援で）を工夫することが必要です。展開の例については、授業実践事例を参照してください。

児童生徒の実態から、集中できる時間にも配慮して、授業をモジュール化（ひとつの活動を 10～15 分程度として、それを組み合わせる）してみましょう。

展開の例については
授業実践事例を参照
してね！

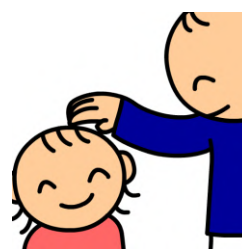


3 まとめの工夫

授業の終末であるまとは、それぞれの活動の振り返りをする時間です。児童生徒の学習の評価、教師の指導内容・方法の評価を行う場であり、授業づくりの 8 つの視点の「評価の工夫」と関連しています。児童生徒が導入で確かめた目標が、自分なりにどう達成できたかを表現（発表やワークシートに記入）できるようにしましょう。それに対して教師は児童生徒の活動に対してのフィードバックをし、大いに称賛することが必要です。児童生徒同士も「友達の良かったところ」をお互いに表現し合うこともよいでしょう。それらによって、児童生徒は達成感を感じ、自信をもって次の授業にチャレンジしていくのです。

称賛の言葉とともに、授業終わりの数分間を児童生徒の好きな活動（パソコン学習、トランポリン運動等）の時間にしたり、頑張ったご褒美のシール等を与えたりして、良い行動を強化するなどの工夫も必要に応じてしてみましょう。更なる意欲づけにつながります。

教師も児童生徒の振り返りを基に、指導内容・方法の評価をし、次の授業に生かしていきましょう。（PDCAサイクルによる授業づくり）



単元（題材）ごとに導入→展開→まとめをパターン化してみましょう。

各単元や題材ごとに、導入・展開・まとめの流れや活動内容をパターン化することで、児童生徒がより見通しをもちやすくなります。

（例）

導入（活動内容・目標の確認・読み聞かせ）

↓

展開（メインの活動）

↓

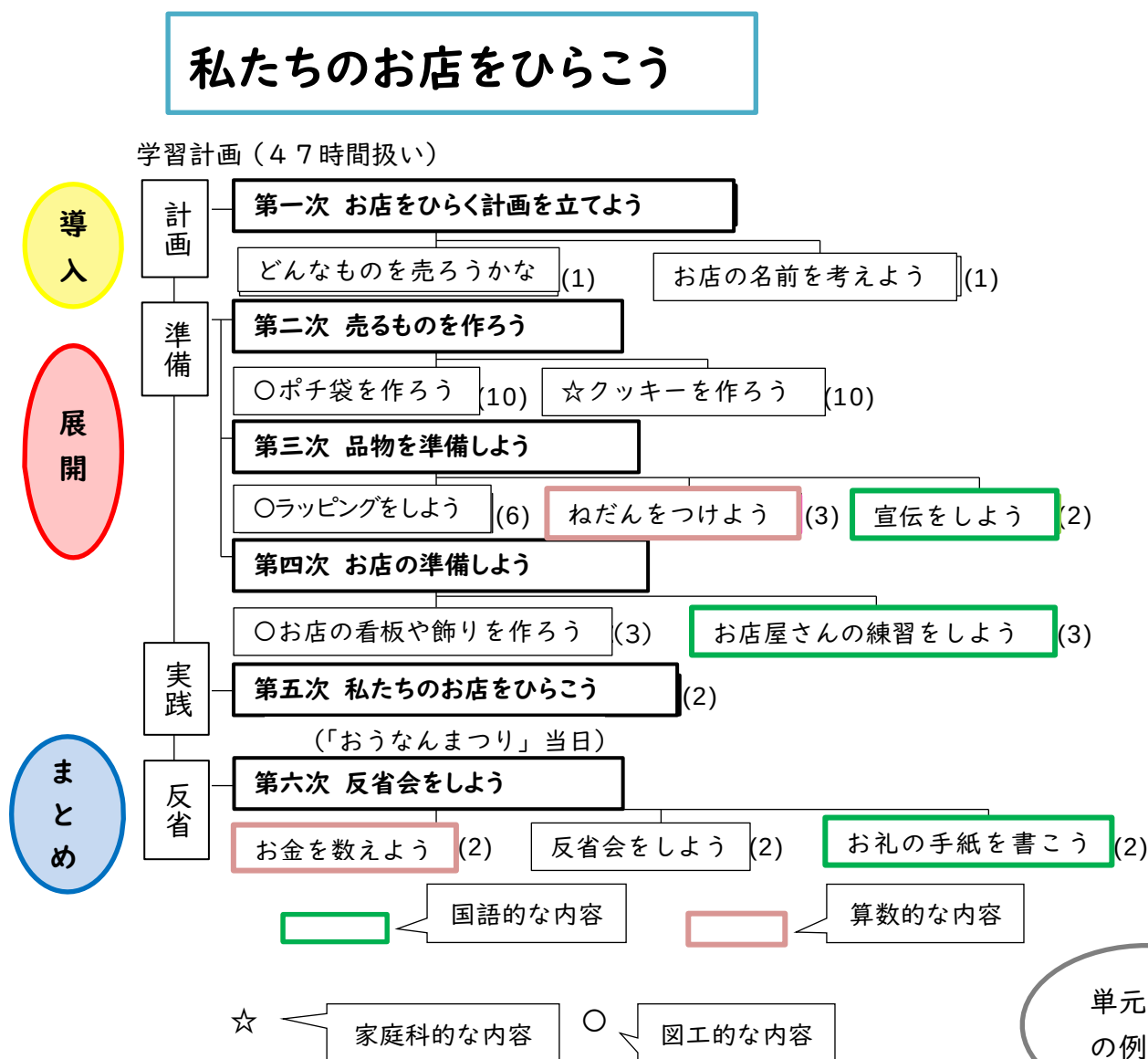
まとめ（振り返り、良い行動を強化する活動）



4 単元計画

1 時間ごとの授業の計画を進める上で、そのもとになる単元計画の工夫が重要になります。単元によって全指導時間に違いが出るのは当然ですが、どの単元においても、単元全体の流れが導入→展開→まとめの流れになるようにするなどの工夫をしましょう。生活単元学習であれば、各教科等の内容の扱いや各行事との関連も明確にしていけることが大切です。

<生活単元学習の単元計画の例>



「生活単元学習」については、以下の書籍も参考にしてください。

「各教科等を合わせた指導」エッセンシャルブック 名古屋恒彦 著

「各教科等を合わせた指導」Q&A 名古屋 恒彦 著



単元計画
の例です

4 発問・応答・称賛などの言葉かけの工夫

学習活動や日常生活において、失敗の経験が多くなっている児童生徒の中には、自己肯定感の低下が見られることがあります。適切な発問、応答、称賛は、本人に自信をもたせ、自己肯定感を高めるなどの効果が期待できます。児童生徒が答えやすいような発問の仕方を工夫したり、答えや活動に対して言葉やうなずき等で教師が応答したりすることで、児童生徒の学習や活動の意欲を高めることができます。また、児童生徒は、称賛を多く受けることで、安心して活動に取り組み、持続力も高まると思われます。児童生徒が積極的に学習や活動に参加できる言葉かけの工夫をしてみましょう。

1 発問の工夫

発問には、児童生徒の思考を深める役割とともに、次の役割があります。

- ・指示…児童生徒の活動を促す
- ・説明…児童生徒の理解を助ける
- ・助言…児童生徒のつまずきを解消する
- ・評価…児童生徒の意欲を高める

これらをバランスよく、効果的なタイミングで使いましょう。授業のどこでどの発問を使うのか、十分に教材研究をして発問計画を立てましょう。



【発問や指示のポイント】

聞いて理解することが苦手な児童生徒は、発問の意味や指示の内容を理解することが難しい場合があります。発問や指示は、下の例のように、児童生徒にとって具体的で分かりやすいものとなるよう工夫しましょう。

(例) 選択肢を用いた発問	「AとBのどちらですか？」
尊重する発問	「〇〇さん、知っていたら教えてくれる？」
具体的な指示	「線の上をはさみで切りましょう」 「左手で紙を押さえましょう」
予告する	「あと10分で始めるよ」「あと〇回で、おしまい」
尊重する指示	「～をお願いね」「〇〇さんの出番ですよ」

2 応答の工夫

少人数学習や個別学習の形態で行われることの多い特別支援学級等の授業においては、通常の学級の授業以上に、教師と児童生徒とのやりとりの密度が濃くなることが多いです。そのため、教師の応答一つ一つが児童生徒の学習に大きな影響を及ぼします。児童生徒の思いを受け止め、児童生徒の働きかけや行動に肯定的に応答することで、学習や活動の意欲を高めることができます。

【応答のポイント】

活動に飽きてしまったり、興味のあるものに気持ちがそがれて離席してしまったりする児童生徒には、「だめ！」などの禁止用語を使わずに、「～しようね」と肯定的に伝えましょう。また、頭ごなしの応答、一方的な決め付けは禁物です。

(例) 受容する	「なるほど」「いい考えだね」「よく気がついたね」
気持ちに共感する	「そう、～なの」「～したかったのね」 「～と思ったんだよね」
優先順位を伝える	「～の続きができたなら、やってみようか」 「1番目は～、2番目は～」
理由を伝える	「～だから～しようね」
見通しをもたせる	「～できたら、おしまいにするよ」 「あと2問で合格！」



3 称賛の工夫

称賛することは、児童生徒の、自己肯定感（私はこれでいいんだ）、自信（私はできる！もっとがんばるぞ！）、信頼感（私を認めてくれたこの先生、好きだなあ）を育てます。

【称賛のポイント】

- よかった行動を具体的にほめましょう。
- 何がよかったか、具体的に伝えましょう。
- よいところを見つけたら、その時にほめましょう。
- 心をこめてほめましょう。
- 児童生徒の発達段階に応じたほめ方を工夫しましょう。

(例) ほめる	・行動のはじまり 「〇〇さん、もう気づいたね」「準備が早いね」
	・途中経過 「いいね」「がんばっているね」 「どんどんうまくなっているね」
	・達成時 「できたね」「〇〇がすごいね！」「花丸！」 「〇〇さんの発表、～がよかったよ」
認める	「順番を守れてえらいね」「待つことができたね」「その調子！」
喜ぶ	「～ができてよかったね。先生もうれしいな」
感謝する	「〇〇さんのアイディア、最高だね！ありがとう」 「進んで片付けをしてくれて、助かるなあ」

みんなの前で大げさにほめるよりも、サインやアイコンタクト等、さりげなく伝える方が有効な場合もあります。



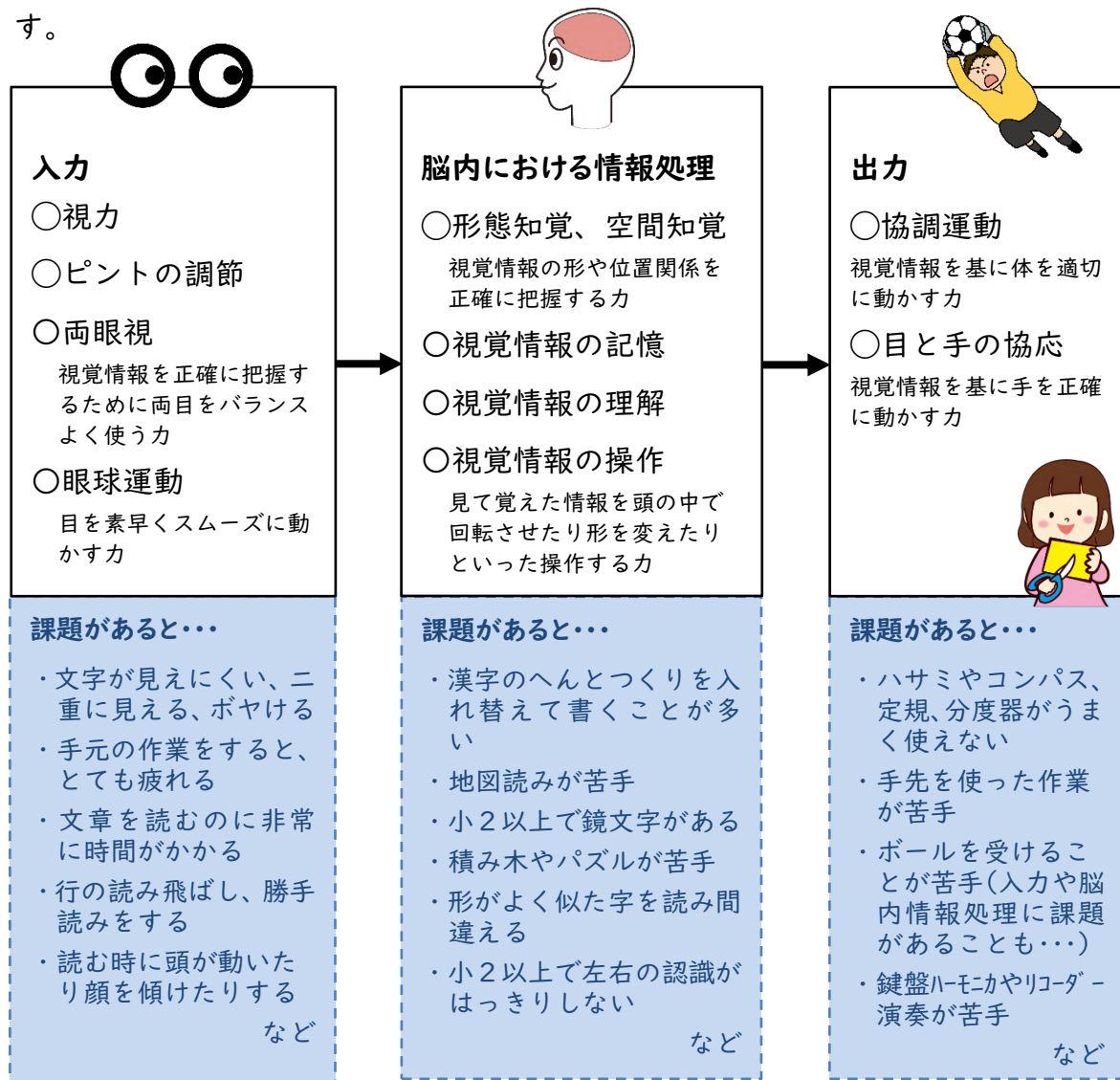
5 特性に応じた支援

特別な配慮を必要とする児童生徒は「本人の努力不足」「怠けている」「自分勝手なことをしている」と見られてしまうことがあります。これらの状態は、児童生徒の特性に起因していることがあり、その特性に応じた指導及び支援が必要です。

Ⅰ 見る力（視機能）と学習



見る力とは、目で見たものの正確に捉え（入力）、それを理解し（情報処理）、適切な行動をとる（出力）ための力です。見る力に関する機能は様々あり、視力もその一つです。視力がよくても、それ以外の機能に課題があると、それが学習のつまずきにつながる場合があります。見る力を支える代表的な機能を〔入力〕－〔脳内における情報処理〕－〔出力〕という一連のプロセスに沿って整理すると、以下のようになります。



視機能に関わる困難の改善には時間がかかりますが、ごく日常的な工夫や練習（ビジョントレーニング等）で楽になることがあります。気になることがあれば視機能の専門家に相談するとよいでしょう。



2 聞く力と学習



聞く力に関しては、音が「聞こえる聞こえない」ということに加えて、音の「聞こえ方」も学習に大きな影響を及ぼします。例えば、音そのものは聞こえても、様々な音の中から必要な音を聞き分けることが難しい児童生徒もいます。ある特定の音が不快であるため、気持ちが不安定になりがちな児童生徒もいます。声の高低によって聞き取りやすさに影響を受ける児童生徒もいます。

本人が頑張っても勉強しても、なかなか成果があがらない場合、聞く力に課題がある可能性があります。そのような場合、本人に話を聞いたり専門家の助言を受けたりしながら、聞く力の実態を丁寧に把握し、それに応じた環境調整等を行うことで、学習状況が改善されることがあります。

3 感覚過敏・鈍麻

ある特定の感覚が過度に敏感だったり（感覚過敏）、逆に過度に感じにくかったり（感覚鈍麻）するような感覚の異常は、発達障害、特に自閉スペクトラム症のある児童生徒で認められることが多いです。

例えばそれぞれの感覚について、次に示すような異常がある場合があります。

○視覚では、ある視覚対象に異常にひきつけられたり（流水に見とれるなど）、光を非常にまぶしがったりすることがあります。

○聴覚では、特定の音（機械音、突発音、乳児の泣き声、怒鳴り声など）を怖がって耳をふさぎ、騒々しい環境では必要な情報が聞き分けられず、落ち着かなくなることがあります。逆に音への反応が乏しく難聴を疑われることもあります。

○味覚・嗅覚では、極端な偏食や特定の舌触りや匂いへの敏感さがある場合があります。

○触覚では、特定の肌触りや服のタグを嫌う、砂場を素足で歩けない、などが見られることがあります。

○痛覚でも過敏と鈍麻の両方が見られるが、見えないと痛みとして感じないことがあり、打撲や虫歯、中耳炎などの発見が遅れることがあります。

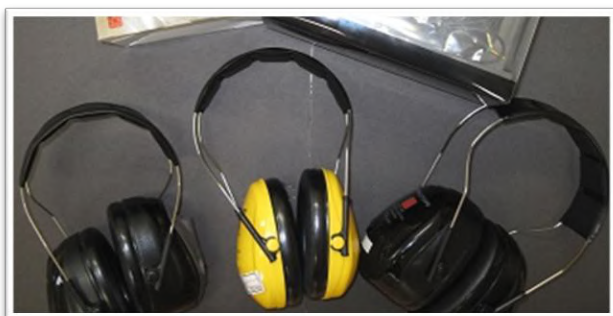
○前庭覚の鈍麻があるときは、自己回転を好み、回転後眼振が出にくいことがあります。

○暑さや寒さに敏感であるときは、温度変化に大きな影響を受けてしまうことがあります。感覚の異常は、周囲からはなかなか理解されにくいのです。そのため、感覚の異常からくる児童生徒の行動は「怠けているだけ」「ふざけているだけ」「意志が弱くて、嫌なことから逃げてばかりいる」と思われがちです。しかし、感

覚の異常を本人の頑張りで克服しようとした場合、そこには大きな困難が伴います。そのため、不快刺激の発生源を無くす、児童生徒から遠ざけるといった環境調整をしたり、道具を使って不快刺激を防いだりすることが、感覚異常への対応の基本となります。

児童生徒のつまずきの背景に感覚の異常が関与している可能性も考慮しながら、日々の指導にあたります。

<不快刺激を和らげる道具の例>



聴覚的な不快刺激を和らげるイヤーマフや
ノイズキャンセリングヘッドフォン

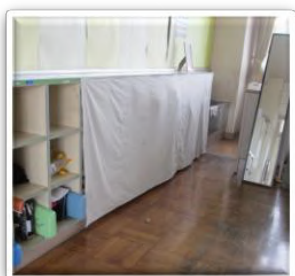


光の過敏性を和らげるアーレン
レンズを使った眼鏡

4 注意と学習

注意とは、本人がもっている様々な力を適切な場所に適切な間、振り向ける働きをいいます。注意に課題があると、本人は頑張って授業に集中しようとしているにもかかわらず、注意を適切な場所に向けたり持続したりすることができないため、結果的に授業に集中できないといったことがあります。場合によっては、怠けている、サボっている、一生懸命やっていない、と周囲の人たちから誤解されてしまうこともあります。そうした場合、学習を密かに妨げている視覚・聴覚刺激の量を教室全体で調整したり、活動を小刻みに設定したりすることで、学習に取り組みやすくなる場合があります。

<刺激量調整の手立ての例>



カーテンで目隠しをして
注意をひくものを隠す



掲示物を精選し、黒板に注
意を向けやすくする



椅子の脚にテニスボールを
はめて、余計な音を減らす

5 認知処理スタイルについて

障害の有無にかかわらず、全ての児童生徒にとってそれぞれ自分に学びやすい学習のスタイルがあります。認知処理スタイルと呼ばれることもありますが、視覚的な情報を活用することが得意で、物事の全体像を捉えてから学習するタイプ（視覚優位、同時処理）、聴覚的な情報を活用することが得意で、時系列的に順番に学習するタイプ（聴覚優位、継次処理）などがあげられます。

視覚優位、同時処理型指導の方法	聴覚優位、継次処理型指導の方法
○全体を踏まえた教え方 指導のねらいの本質的な部分を含んでいるような課題を最初から提示する指導方法 ○全体から部分へ 複数の刺激を1つのかたまりとして最初から一度に提示し、刺激全体を捉えさせてから細部へ移行させていく指導方法 ○関連性の重視 提示された複数の刺激間の関連性に注目させる指導方法 ○視覚的・運動的の手がかり 視覚的・運動的の手がかりを用いて課題解決を図る指導方法 ○空間的・統合的 空間的な手がかりを用いたり、統合的な手法で課題解決を図ったりする指導方法 <具体的な支援方法> ○授業の流れやまとめの部分を、わかりやすく板書する。 ○授業中の約束や課題について、絵やカード等を書いて示す。 ○課題の提示にプロジェクター、実物投影機、パソコン等を使う。 ○問題を解く場面で、図表や矢印などの記号を活用してヒントを出す。 ○簡潔に短い言葉で指示をする。 ○指示語や抽象的な言葉は使わず、具体的にわかりやすい言葉で指示をする。 ○手本や見本を示し、最終的に何をどこまでやるのかを示す。	○段階的な教え方 いくつかの指導ステップを経て、指導のねらいに到達するような段階的な指導方法 ○部分から全体へ 注目させるべき刺激を、最初は部分的に提示し、徐々に全体へ広げていく指導方法 ○順序性の重視 番号等を用いながら、課題解決への順序性を重視した指導方法 ○聴覚的・言語的の手がかり 聴覚的・言語的な手がかりを用いて課題解決を図る指導方法 ○時間的・分析的 時間的な手がかりや分析的な手法を用いて課題解決を図る指導方法 <具体的な支援方法> ○板書や教科書について、重要な部分は、一緒に音読する。 ○図形や式、約束などについて、一つ一つ言葉で説明する。 ○問題を解く場面で、順序立てて考えられるようなマニュアルを用意する。 ○板書文字の大きさ、色、行間について全員が読みやすいように配慮する。 ○板書の形式を一定にする（黒板の分割や小黒板の活用）。

視覚的な支援は、わかりやすい授業や見通しをもたせるための手がかりにつながり、たいへん有効な支援方法です。しかし、場合によっては、視覚的な支援としての教材や板書、掲示物などが、集中を妨げてしまう原因となる場合もあります。児童生徒の実態をよく把握し、効果的な使い方を工夫しましょう。視覚情報が多すぎるのは禁物です。



6 一人一人の苦手さに寄り添った支援

【聞く】



- 一番前の席や黒板の見えやすい位置など、注意がそれにくい座席の位置にする。
- 注意を向けさせてから話しかける。
 - ・話しかける前に名前を呼んだり、視線を話している方に向けたりさせる。
 - ・そばに行って小声で話しかける。
- 活動内容や指示など紙に書いて提示する。
- 文の長さや知っている言葉などに配慮して、ゆっくり、簡潔に、具体的に話す。
- 動作や絵、写真などを活用しながら、指示をしたり、説明したりする。
- 指示をした行動を終えてから、次の指示を出すようにする。
- 聞いたことを復唱させて確認する。
- 聞いたことを書く（聴写）練習をさせる。（メモを取ることににつなげていく）

【話す】

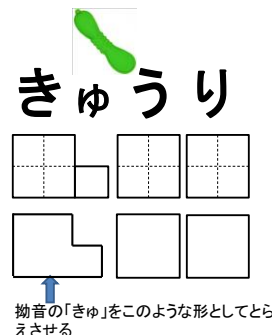


- 子供の話をよく聞き、よい話し方や内容の伝え方を、その都度分かりやすく伝える。
 - ・話したことをメモにして、それを整理して提示する。
 - ・声の大きさや速さ、助詞の使い方などについても必要に応じて指導する。
- 気持ちを表す言葉をいくつか提示し、その中から自分の気持ちに合う言葉を選択させ、実際に言葉にする練習をする。
- 単語カードや絵カードなどを使って、話の内容や順番を考えさせてから話をさせる。
- 話を絵や文にしたり、絵や写真を見ながら状況を説明させたりする。
- 子供が経験した出来事を話題にして、その状況や気持ちを話すことができるようにする。
- 理解しにくい言葉の意味は、絵や図を活用させたり、身近なことに例えたりして説明する。
- 状況に関係なく話し始めた場合には、そばに行って子供の状況を把握し、注意を促す。

【読む】



- 一度に読む量、提示する量を少なくする。
- 文に / を入れて、語と語、文節と文節を分けて提示する。
- 文字単位ではなく、その文字を含んだ単語として覚えさせる。「きゅ」→「きゅうり」
- 読む場所に視点を定める工夫をする。
 - ・行間を空けた文を用意する。
 - ・読む場所を指でなぞらせたり、定規を文に当てさせたりする。
 - ・読む場所以外を下敷きやスリットを入れた用紙で隠すようにさせる。
- 似たような形の字の違いに気付くように工夫する。
 - ・注目するところに色をつけたり、特徴を言語化したりする。
 - ・文字を拡大する。



【書く】



- ノートやワークシートのマス目は、本人が書きやすい大きさにする。
- 点結びや曲線など、運筆の基本的な練習をさせる。
- 空書きするなど、身体のイメージを併用して、字形をとらえさせる。
- 漢字をへんやつくりなどにばらして、漢字の構成に着目して練習させる。
- 「はね」や「はらい」にこだわらず、書けたら認める。
- ひらがな（カタカナ）表などを下敷きなどに使用させ、
困ったときに見ることができるようにしておく。
- 写真やメモなど、作文を書くときの手がかりを用意する。

筆順を教えても覚えられない子は、文字を形で理解していることがあります。字形が整っていれば評価することも必要です。

【計算する】



- 筆算の計算の中に矢印を入れて、計算の手順を示す。
- 具体物を提示しながら計算の方法を言語化する。
- 具体物・半具体物を操作しながら、視覚的に数や計算の仕方をとらえさせる。
- 位取りの桁がずれないように、枠をつけたり、縦線に色をつけたりする。
- 文章題で使われる「全部で」「合わせて」「残りは」「～より多い」などのキーワードへの注目を促し、正確な立式ができるようにする。

	1	3	2
×			2

6 教材・教具の工夫

児童生徒が自主的・主体的に学習を進め、基礎的・基本的な内容を確実に身に付けるようにするために、教材・教具を適切に活用することが大切です。

1 教材・教具の定義

教 材	教育目標を達成させるために、教師が意図的にもたらすところの媒体ともいうべき教育学上の素材を意味する。 文化的素材としての資料的側面が強調されたもの
教 具	教育の方法または手段として使われる具体的道具を意味する。 文化的素材としての道具的側面が強調されたもの

○一般的に教材と教具は区別されにくく、「教材・教具」と併記して用いられます。

○活動の場、かかわる人、活用する用具等・・・すべてが教材・教具と言えます。

2 教材・教具の役割

○自発的な行動の促し

児童生徒の興味・関心を引く教材・教具は、児童生徒の自発的な行動を自然に起こしやすくします。

○学習への動機づけ

児童生徒に何らかの学習のきっかけを作ること、取りかかりの動機づけが重要です。

○系統的な学習の展開

児童生徒の発達の段階に合わせて、系統的な学習を進めるために様々な工夫が必要です。

○学習効率の向上

実態に合った教材・教具が準備され、適切な指導が行えると、児童生徒の学習効率が上がります。

【教材・教具を作成するときのポイント】

- 児童生徒の障害の状態及び能力、特性に応じて工夫します。
- 一人一人の発達段階と指導目標や学習課題に合わせて工夫します。
 - ①発達段階に合ったもの
 - ②「できた」という達成感があり、またやってみたいと思うようなもの
 - ③結果が分かりやすく、確認しやすいもの
 - ④興味・関心をひくもの
 - ⑤使用しても壊れにくいもの（ラミネートをしておくなど）
 - ⑥安全に使用できるもの

市販されているものもありますが、教材カタログや特別支援学校の教材なども参考にしながら、実態に応じた手づくり教材・教具を作成し、活用していくことが必要な場合もあります。授業の目標を常に念頭におき、効果的に活用していくことが重要です。



【教材・教具の工夫・作成の観点】

- ①注意を引きつけ、活動を引き出すこと
- ②正しい反応を強化できるものであること
- ③個のニーズに合ったものであること
- ④身近生活の処理能力の伸長を促すこと
- ⑤集団生活への参加を促すこと
- ⑥生活経験の拡大を図ること
- ⑦事柄を数量的、合理的に処理する力を養うこと
- ⑧感受性を高め、表現力を伸長すること
- ⑨ことばの発達や弁別、形態把握の力の向上を促すこと
- ⑩健康の増進を図ること
- ⑪感覚、運動機能の発達を促すこと など



児童生徒一人一人の顔を思い浮かべ、教材・教具を工夫、作成していきましょう。授業の流れをイメージし、教材・教具の効果的な活用について考え、児童生徒の反応を予想します。このような入念な準備は、授業者自身が授業を楽しむことにもつながります。そのような授業を毎行行っていきたいものです。



3 教材・教具の具体例

学習への見通し	学習予定カード、タイマー、手順カードなど
学習全般	具体物、写真、絵カード、紙芝居、ワークシート、フラッシュカード、スリット付きカード、50音表、ひらがなチップ、なぞり書きカード、筆順カード、読みがなつき教科書、マス目付きノート、筆算手順カード、ボウリング、百玉そろばん、発表カード、縫いさし、ペグさし、ひも通し、折り紙、パソコンなど
コミュニケーション	意思表示カード、表情カード、ソーシャルスキルトレーニング・カードなど
構音指導	鏡、ストロー、かるた、吹きだし、ペープサートなど

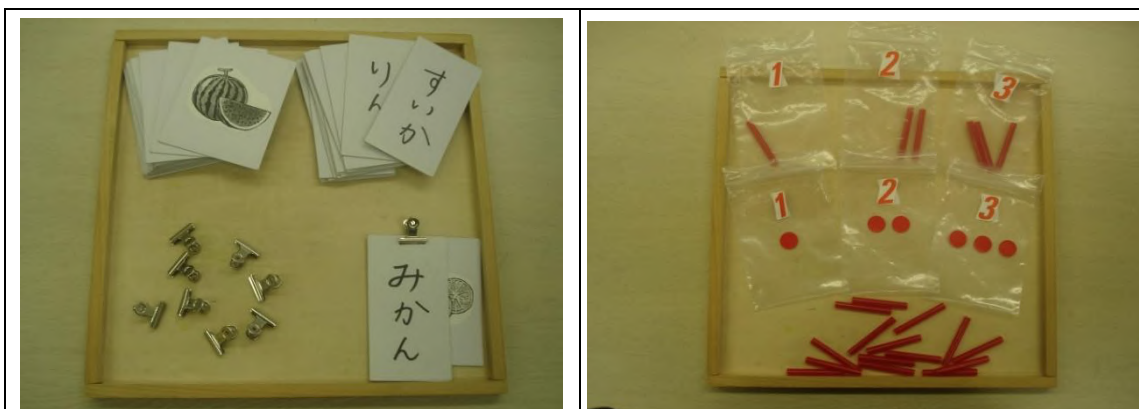
4 教材・教具の紹介



<ルールについての掲示物>

左の掲示物は、授業の終わりに行う学習用具の片づけ方や、次の授業の準備までの活動の流れです。右は、移動教室に行く時と帰ってきたときのあいさつの仕方です。両方とも、イラストを用いて、いつ、何をすれば良いのか分かりやすく書かれています。

このように、児童生徒に大切にしてほしいことや、日常生活などで役に立つポイントが書かれた掲示物を貼ることで、自分で意識して行動できるようにしていきます。

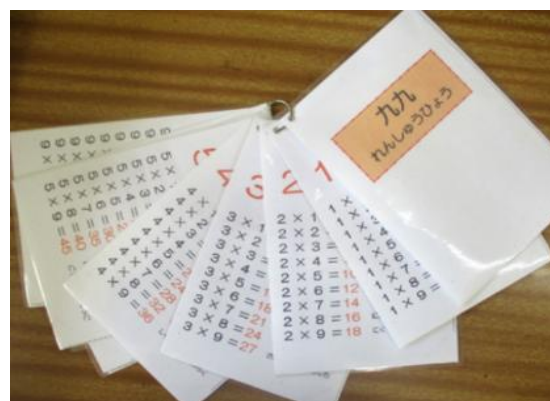


<絵と文字のマッチング>

絵と文字を合わせて、クリップでとめていく課題です。どれだけやると終わりなのか、見通しがもちやすく、また、クリップでとめるという工程が意欲を高めるようです。少ない数から練習し、ある程度定着すると、一人でも学習を進められるようになります。

<数(1～3)の学習>

1～3の数字を見て、その数の分だけ、物を入れていく課題です。これは、赤いストローを切った物を使っています。まずは、袋に赤いシールを貼ったものから練習し、徐々に数字だけで、できるようにしていきます。この課題も慣れてくると一人で進めていくことができます。



<学習カード>

児童の個別の指導計画や実態把握に基づいて、既習事項の確認を行い、繰り返し学習が必要な内容などについては、学習カードを作成しています。個別課題の時間に活用するだけではなく、集団授業で学習速度の違いを調整するための教材としても活用できます。ラミネート加工を施すことで、繰り返し使用することができます。



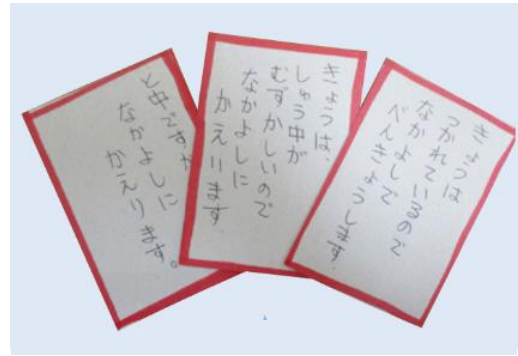
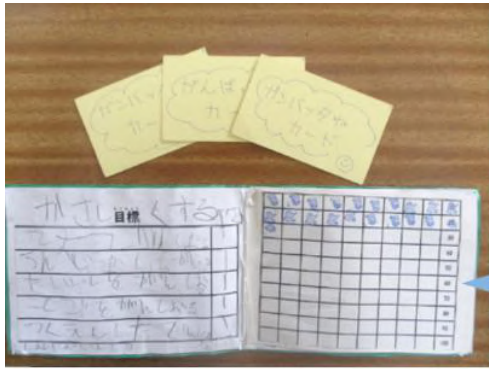
<ひも結びの練習>

最近、マジックテープの靴やかぶりのエプロン等もあり、ひもを結ぶ場面が減ってしまいました。蝶結びができるよう毎日練習をしていくといいですね。太めのひもで色を分けるとわかりやすいです。徐々に同じ色で細くしていきます。板に自分の名前を書いておき、毎日行くとよいでしょう。



<ネジの締めはずし>

大小様々あるネジとナットの大きさを区別し、締めたり、はずしたりしていきます。指先の巧緻性や集中力の向上にもつながります。最初は同じサイズのもので練習するとよいでしょう。



<児童の目標を評価する工夫>

スタンプを押してもらい、増えていくことや、「がんばったねカード」をもらうことで、目標達成に向けた行動を促します。自分の頑張りが可視化されるので、児童生徒自身が達成感を味わうことができます。

<自分の伝えたいことカード>

伝えたい気持ちを予めカードにしておき、交流学級での授業中などに、教師に提示することで欲求を伝えることができます。自分の気持ちを言葉で伝えることが苦手な児童生徒も、「自分の気持ちを相手に伝えることができた。」という体験をすることで、次のコミュニケーションにつなげることができます。

100 円ショップやホームセンターにも教材に利用できるものがたくさんあります。ちょっとした工夫で一人一人に合った教材・教具が作成できます。



<参考・引用文献>

- 「特別支援教育の授業づくり 46 のポイント」、太田正己著 梁明書房（2006）
- すけっと、独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所（2021）

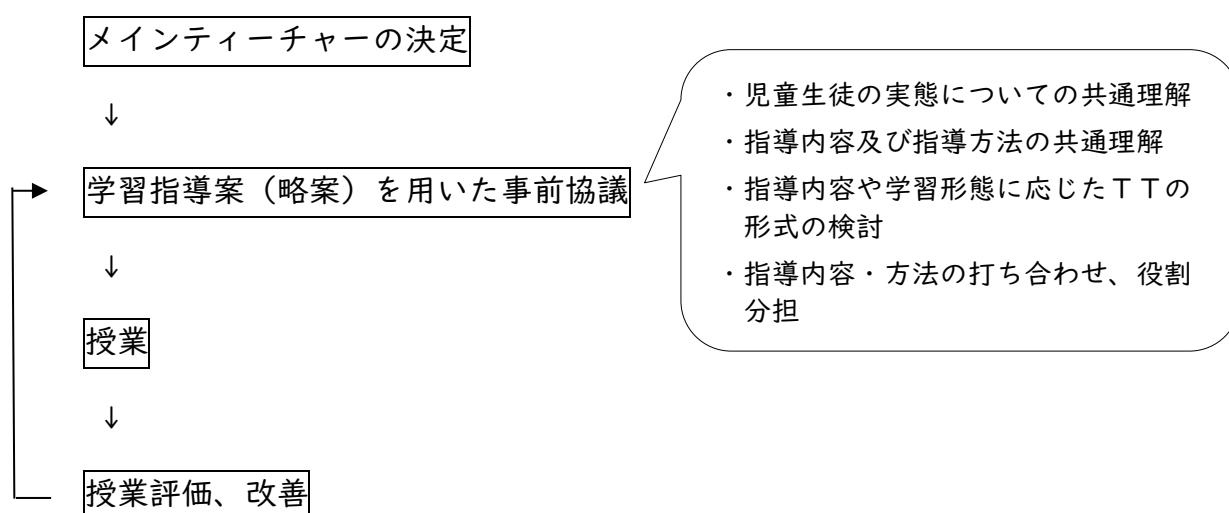
7 ティーム・ティーチング

ティーム・ティーチング（TT）とは、複数の教師が役割を分担し、協力し合いながら教育計画をたて、実践指導する方式のことです。

ティーム・ティーチングによる授業では、事前と事後に次のことを行いながら進めていくことが重要です。

- ①チーム全員で、題材・単元の指導計画を検討する。
- ②指導計画に基づいて、共同で教材・教具を作成する。
- ③題材・単元等の終了後、指導の評価について共に協議し、反省する。

1 ティーム・ティーチングの実施手順



※ TTに関する評価も行いましょう。

【ティーム・ティーチングのメリット】

- 児童生徒の実態把握を、多くの視点から行うことができます。
- 個々の教師の専門性や特性を生かし、創造的な授業を実施することができます。
- 学習グループを多様に編成でき、個々の能力や特性に応じた指導が可能になります。
- 一斉指導において、特別な支援を必要とする児童生徒へ個別の対応ができます。
- それぞれの教師が分担して教材・教具を準備することができます。
- 学習内容によっては、教師の特技を生かしたり、学級合同での活気あるダイナミックな授業を行ったりすることができます。
- 互いの発想・方法が刺激となり実践力が高められます。



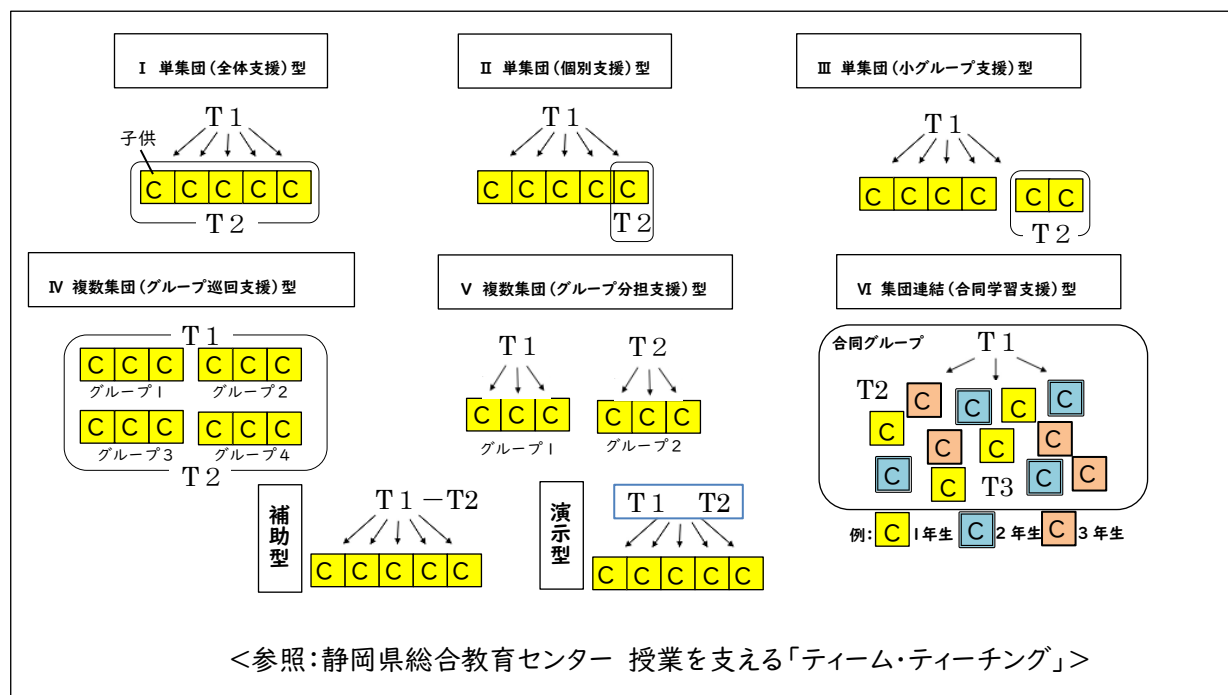
3 ティーム・ティーチングの例

○学級内の授業の中で・・・

- ・ 課題の異なる児童生徒を分担して指導する。
- ・ 特に配慮の必要な児童生徒をサブとなる指導者が重点的に担当する。 など

○交流学級や特別支援学級合同での授業の中で・・・

- ・ メインとなる指導者が全体の指導、サブとなる指導者が個別の言葉かけをする。
- ・ 児童生徒を小集団に分け、それぞれの集団を担当する。 など



これらは、学習形態の基本的なモデルです。実際の授業では、児童生徒の目標や支援のニーズ、対応できる教師の数、学習スペースなどによって多様な形態が考えられます。また、授業時間内にこれらの学習形態をいくつか組み合わせていくこともあります。目標や課題に応じて学習形態の組み合わせも様々に工夫することが重要です。

TTのメリットを意識して、日々の授業を効果的に改善していきましょう。

チーム・ティーチングによる授業では、児童生徒の指導に関する共通理解や役割分担をしっかりと行い、その場限りの対応や児童生徒の補助や管理に終始しないように気をつけましょう。また、メインとなる指導者に任せっきりにするのではなく、全員で授業をつくっていくという意識をもつことが重要です。担当の児童生徒の指導にあたりながら、授業全体を見ていく視点が大切です。

特別支援学校におけるチーム・ティーチングの指導・支援の技術・スキル(事例)

技術	スキル	具体的な事例
		MT (メインティーチャー) ST (サブティーチャー)
場の構成	機材の操作	・ パソコンの操作の補助 ・ オーディオ・ビデオ機器の操作
	教材提示	・ 学習の流れに沿ったスムーズな視覚教材等の提示 ・ 急に必要になった教材の準備・提示
	教材の設置	・ 体育や図工等の時間に導入の説明と並行して教材・教具を準備する。
	効果づくり	・ 音響機器やピアノによる雰囲気づくりをする。 ・ 照明のコントロール
意欲誘導	活動の先導	・ 歌を歌えるように先に歌う。 ・ 活動課題を例示する目的で先にやる。(サーキットトレーニング) ・ 答えに戸惑う子供へ例示する意図で発言する。
	雰囲気の盛り上げ	・ 生徒役になり、間違っただけたりしながら活発な意見交換を促す。 ・ 授業に消極的になりがちな生徒に付き添い、一緒に活動することで心を解きほぐす。 ・ 子供のようにリアクションをとって盛り上げる。 ・ 読み聞かせの時など合いの手を入れる。
	発言を促す	・ ちょっとしたきっかけがあれば発言・発表ができる子供に言葉かけをする。 ・ 意見を引き出すような言葉かけとして、「一緒に考えてみよう」等の発言をする。
	活動を促す	・ 「やってみよう」「面白そう」などの言葉かけをする。 ・ 活動の流れにのれない子供に、興味を引き出したり、一緒に参加するよう働きかけたりする。
	課題への意識づけ	・ 活動から気持ちが離れた子供に意欲を高める言葉かけをする。 ・ 教材提示に時間がかかるときなど、期待感を膨らませるような発言をする。
	学習への意欲づけ	・ 離席した子供を授業に向くよう対応する。 ・ 情緒的に不安定な子供へ情緒の安定を図り、課題へ向かわせようとスキンシップや言葉かけによって子供の気持ちに寄り添って支援する。 ・ しかられて落ち込んでいる子へ意欲付けを図る。 ・ 教師との関係がこじれ、活動が止まったときに、対応者が代わることによって子供がスムーズに活動に参加できるようにする。 ・ 学習の導入で、寸劇など行い興味・関心を引き出す。



理解援助	補足説明	・授業で、MTの説明では、その子にとって分かりづらかった時に、STが補足して説明をすることで、子供が活動内容を理解できるようにする。 ・子供の反応が今ひとつの時、子供の代弁者としてMTの補足説明を求める質問などとする。 ・MTの難しいことばを分かりやすく説明する。 ・MTにかわって全体へ美術や体育などの専門分野の補足説明をする。 ・発問の意味が分からない子供に、分かりやすく伝える。 ・MTの発言を繰り返し理解の徹底を図る。
	演示	・MTが説明をし、STが分かりやすく手本の実技をする。 ・良い例、悪い例を演じて見せ、子供達に具体的に考えさせる場面を作る。 ・手本となるよう歌を歌ったり、楽器を演奏したりする。 ・教師と子供役を演じ、子供の発言や発表の仕方を、分かりやすく教える。 ・挨拶などソーシャルスキルの手本を例示する。
	ヒント	・MTの「海について知っていること？」に対し、他の教師が波の動作をしたり、ザザーと音を発したりして「波」ということばを引き出す支援をする。 ・問いかけに対して子供の反応があまりないとき、STがヒントとして一つの答えを提示する。 ・誤答を例示することによって子供へゆさぶりをかけ理解を深める。
	視覚化	・MTが説明したことを板書し、視覚的な補助をする。 ・大きな集団で話を聞くと、話のキーワードを文字で提示し理解を助ける。 ・絵を描くなど分かりやすい方法で支援する。 ・必要に応じSTが絵・写真カードを提示して理解を助ける。
活動の補助	発言（意思表示）のフォロー	・うまく気持ちを表現できない子供の気持ちを、「たのしかったよー」等と代弁する。 ・重度の子供の僅かな動きから意思を読みとりMTに返す。 ・会話が困難な子供に代わって会話や返事をする。 ・表現が苦手な子供に代わって発表する。
	活動の補助	・走るコースがわからないとき伴走する。 ・一緒に鬼ごっこをして逃げることを教える。 ・トランプを持ってあげゲームを一緒にやる。 ・子供が少ないとできない野球やバレーボールの時にゲームに入る。楽器の演奏で手を添えて一緒にやる。 ・大玉乗りやトランポリン、シーツのブランコ等人数が必要となる活動を補助する。 ・プールでの活動や体育での活動を一緒に取り組む。
	技能面の補助	・ミシンの操作、はさみの操作の時に補助する。 ・調理時のガス器具の操作や包丁の介助をする。 ・マヒのある子供のノートの固定やページめくりを介助する。 ・筆記の際に手を添えて介助する。 ・衣服の着脱の際、手先が動かない子供のボタンかけを介助する。
	姿勢の保持・介助	・学習時のポジショニング作りや粗大運動などの一人では難しい活動の補助をする。

		・車椅子の乗り降りの補助をする。 ・体の向き、教材との距離などの介助をする。
指導の分担	グループの指導	・目標に合わせたグループをつくり指導を担当する。 ・実態に合わせ、課題を変えて数人の指導を分担する。 ・活動の中で班を編制し指導を担当する。
	個別の指導	・教科指導で、子供が課題につまずいた時それぞれの子供に適切な個別支援を行う。 ・集団内の個人差（個別目標）に合わせて指導にあたる。 ・一斉指導ではついていけない子供に付いて個別の支援をする。
	違う課題の指導	・活動にのれない子供に、その子供の興味に合わせて個別に指導する。 ・多動な子供等、集団に適応できず同じ活動ができない子供について、場所を変えたりしながら指導にあたる。 ・体調のため活動が制限されるなど一斉活動ができない子供の課題を容易にして共に学習できるよう対応する。
	場面の担当	・歌、合奏、ダンス等の分野、ボール、器械体操等の分野、木工、農作業等の分野と教師の得意分野の場面を分担する。 ・学習の途中でS Tが全体指導を引き受け、M Tがグループや個別の指導を行う。 ・しかり役、なだめ役を分担する。
評価・称賛	評価	・音楽や体育など、大集団での活動の評価を分担し、細かく多面的に見る。 ・授業中、ほとんど発言しなかった子供が、内容をどれだけ把握しているかS Tが個別に対応して理解度をチェックする。
	称賛	・M Tの称賛を受け、より称賛が効果的になるようS Tが拍手や言葉かけをする。 ・S Tが身近な子供に細かな励ましや称賛をする。
	公平性	・称賛・叱責がM Tの主観的になるのを防ぐ。 ・M Tが気づかなかった発言や行動を適性に評価し取り上げる。
	即時性	・一人ずつ細かなワークノートの指導やその場での採点などをする。 ・注意すべき子供を取り出してその場でその時に指導する。
臨時的対応	パニックへの対応	・パニックを起こした子供に対応し、他傷や自傷行為を防ぐ。 ・パニックを起こした子供を室外へ連れ出す等混乱を避ける。
	情緒の安定	・情緒が不安定になった子供を落ち着くよう指導のため席や教室から落ち着ける場所へ一時的な移動の補助を行う。 ・授業が始まっている教室に入れない子供へ対応する。
	集団逸脱への対応	・予想しなかった子供が突然、集団行動から逸脱した時に臨機応変な対応をする。 ・活動の場から離れてしまった子供へ対応する。 ・移動中に座り込んで動かなくなった子供に対応する。
	治療等	・怪我人や急病者を保健室へ引率する。 ・具合が悪くなった子供に対応する。（看護、家庭との連絡他） ・発作を起こした子供への対応（看護、養護教諭への連絡他）
	排泄指導	・トイレへの引率、介助 ・トイレの失敗の処理

健康・安全	健康面の配慮	・体調がいつもと違うとき、個別に対応する。 ・体調を常に観察し、必要に応じて対応にあたる。 ・気温の変化などに注意し、体温調節を補助する。 ・照明の調節など学習環境の調節をする。
	事故の防止	・サーキットトレーニングの時など要所に待機して安全に気を配る。 ・移動時の子供の掌握など、危険の回避を図る。 ・理科の実験、調理、作業など危険を伴うとき事故防止に配慮したきめの細かい指導を行う。 ・日常的な活動の中でも電気製品を使うときは感電事故などに気を配りをする。
MTのサポート	MTのアシスト	・少人数や重度のため発言が少ない時、子供役となって授業を構成する。 ・学習態度作りのための見本を示したり、MTに代わって授業の流れを止めずに注意したりする。 ・子供が困難な部分、原因をMTに伝え、授業の流れを修正する。 ・MTの発言に頷いたり、返事をして授業の流れを助けたりする。 ・子供の予想もしない発言に戸惑ったりするMTをカバーして代わりに答えたりする。 ・複数の子供からの問いかけに分担して答える。
事前事後	共通理解	・子供の実態、授業のねらい等を共通理解する。 ・指導の分担や授業の流れを確認する。 ・予想されるトラブルへの対応法を検討する。
	授業案づくり	・いろいろなアイデアを出し合う。 ・展開についていろいろな案を出し合い内容を深める。 ・指導の計画を協力して作る。
	教材準備	・協力し合って大がかりな教材を準備する。 ・分担することによって幅広い教材を準備する。
	授業後の整理	・教材等の片づけを分担する。 ・授業や子供の様子などの記録を分担する。
その他	授業の評価（教師）	・トラブルへの対応策などについて相談し合う。 ・指導の方法を学び合う。 ・授業の反省を話し合いによって客観的に行う。
	授業の評価（子供）	・観察した様子、評価等の情報を交換する。 ・子供の見方等いろいろな考えを出し合って実態把握を深める。
	学級経営の分担	・保護者への対応を分担する。 ・MTと連携をとりながら多角的に保護者へアドバイスをする。 ・生徒の悩みを聞くなど生徒指導上の仕事を分担する。 ・教師間で、悩みに対して助言、アドバイスをする。

※上記の具体的事例はアンケートを基に具体的な内容を整理したものである。

8 評価の工夫

授業を実施した際は、その都度、評価を行い、指導内容や方法を改善し、より効果的な指導を行うことが必要です。PDCAサイクルによる授業づくりを進めていくために、評価の際は、児童生徒の姿を評価するとともに、目標等の妥当性など、教師の指導についても十分に評価していくことが重要です。

1 教師が1時間の授業で行う「授業評価チェック表」

あれもこれも…と欲張らずに「この授業ではここを押さえない」というポイントを2～3点に絞り、目標が達成されていれば次の内容を提示し、数回やっても達成できない内容は、支援方法を変えたり、目標の再検討をしたりする必要があります。

1時間ごとの授業内容が、本当にその児童生徒の課題に沿っているのか、目標設定は妥当であったか、指導内容や方法、教材・教具は適切であったか、個に応じた有効な手立てであったか等、教師自身の指導に関する評価も十分に行い、授業を見直し、改善することを通して、よりよい授業づくりを目指していきましょう。

2 児童生徒が1時間の授業で行う「自己評価表」

この時間で何を学習したのか、何ができるようになったのか、次の時間には何を目標にしたらいいのか、を児童生徒が明確に把握できるような自己評価表を用意しましょう。

文字を書くのが苦手な児童生徒には、写真や図を切って貼ったり、簡単にチェックしたり、また自分の気持ちを表情カードやマークで表したりする工夫も必要です。



3 児童生徒が活動の後などに行う「他者評価・相互評価」

複数で活動をした後には、他者から良かった点や改善点等をあげて評価してもらうことで、自分では気付かなかった自分自身のよさや課題を知り、意欲の向上にもつながります。また、友だちを評価することで、友だちのよさや課題を自分の学習に生かし、よりよい取組が引き出されます。

4 継続的な評価にするために

評価は、積み重ねることが大切になります。そのためには、継続できる評価表の作成が必須です。評価をすることが負担にならないように、ポイントを絞って、簡単にチェックできるものを作成しましょう。

また、教師も児童生徒も、評価表を次の授業につなげられるように心がけましょう。教師は次の授業内容の検討材料に、児童生徒は次の授業の目標設定の材料にできるとよいでしょう。

5 評価について

○どの程度できればよいのか、可能であれば数値で示しましょう

- ・持続時間（その課題、行動が持続している時間）
- ・回答(応答)までの時間（5秒以内、2分以内…）
- ・頻度（5回中4回…）
- ・継続回数（5回以上…）
- ・割合（8割以上、90%…）
- ・距離や歩数（5m以上、10歩以上…）

○何によって評価するかを明確にしておきましょう

- ・ノート
- ・ワークシート
- ・発表
- ・作品
- ・取組の様子…

【チェックポイント!「あいまいな表現はNG」】

(例)

- ×「集中して漢字を書くことができたか」
- 「漢字練習帳に1ページ分、漢字を書くことができたか」
- ×「音読にしっかりと取り組むことができたか」
- 「3分間、声に出して本を読むことができたか」
- ×「頑張って」「きちんと」「ていねいに」「落ち着いて」
→評価する人によって基準が違うので不適切!

違う評価者でも同じ評価になるように!

児童生徒に合わせて基準を変えること→目標、評価のオーダーメイドが必要
(☞授業づくり編 2-①「実態把握、目標設定の工夫」参照)

本時の評価 「○○を理解することができたか」

このような評価基準をよく見かけますね。「理解する」とは、どのような状態をいうのでしょうか?「理解したかどうか」をどのように見取るのか、基準が曖昧となってしまいます。適切な評価規準を設定し、達成できたかどうかを把握していかなければ、次の目標設定も曖昧となってしまいます。例えば・・・

- ・「○○をワークシートに書くことができたか」
- ・「○○について、発表することができたか」
- ・「手順表を見て、最後まで一人で作成することができたか」・・・

このように、理解した結果、何をすることができればよいかを行動の用語で具体的に記述することにより、確かな評価ができ、次の目標設定に確実につながっていきます。



<教師が1時間の授業で行う「授業評価チェック表」(例)>

事項	評価の視点
実態把握	個々の障害の状態及び発達段階や特性等を的確に把握している。
	個々の経験や単元（題材）に関する興味・関心を的確に把握している。
目標設定	個々の実態を踏まえた目標を設定している。
	評価しやすい具体的な目標を設定している。
	生活の充実につながっている。
学習過程	個々の目標を達成するために適切な手立てを講じている。
	個々の実態に応じた適切な教材・教具や補助教材等を活用している。
	指導内容や方法は、個に応じた適切なものである。
	学習活動の展開（導入・展開・まとめ）や時間配分を適切に設定している。
	個々の実態に応じた適切な活動量を確保している。
	メインティーチャー、サブティーチャーの役割分担を明確にしている。
評価	本時の目標を達成している。
	個々の目標を達成している。
	個々の実態、目標、学習活動、評価は一貫性がある。

<児童生徒が1時間の授業で行う「自己評価表」(例)>

ふりかえりカード	
氏名	
<期 日> 月 日 ()	
<今日の活動(何をしましたか?)>	
1	じぶん すす かつどう 自分から進んで活動できましたか？
2	たの かつどう 楽しく活動できましたか？
3	じぶん は 自分のやくわりを きちんと果たせましたか？
4	おもしろ じょうず 新しくわかったことや上手にできたことが ありましたか？
5	ともだち きょうりょく 友達と協力して活動できましたか？
◎とてもよくできた ○まあまあできた △あまりできなかった	
<友だちのよかったところ>	
<感想・反省>	



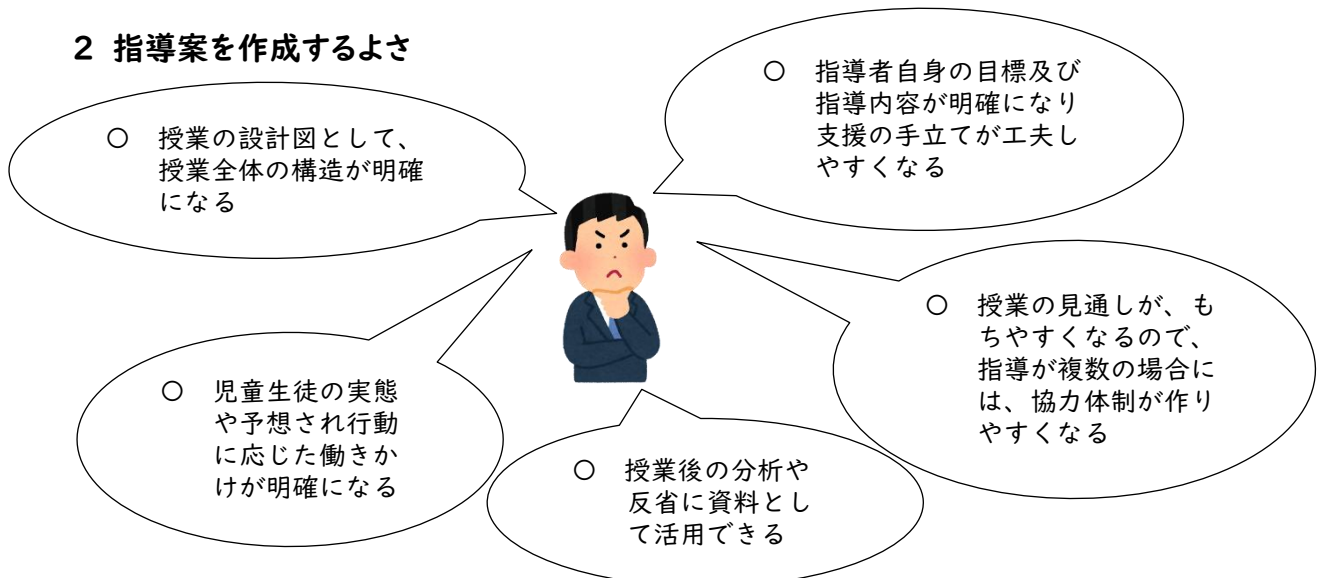
Ⅲ 指導案作成にあたって

Ⅰ 指導案とは・・・？

指導案は、教師が授業の前に立案し、一定の様式に基づいて書かれた授業のシナリオです。指導案には、研究授業や授業公開のときなどに示す詳細なものや、授業の流れを示した略式のもの（略案）があります。

P D C Aサイクルの授業づくりにおいては、計画<Plan>の段階にあたります。（21 ページ「特別支援学級等の授業づくり」参照）作成した指導案をもとに、授業を実施<Do>し、実施した授業を指導案に照らして評価<Check>し、改善<Action>していきます。指導案は、授業改善を効果的に進める上で、重要な役割を担っています。

2 指導案を作成するよさ



【指導案作成上の留意点】

- 目標設定の視点として、障害に基づく困難さだけを指摘するのではなく、児童生徒の実態に応じて、どのような手立てを講じれば、その目標を達成することができるか、という視点を持ちましょう。
- 目標達成のために必要な能力や技能等について、一人一人の実態を十分に把握しておきましょう。
- 個別の目標を設定し、学習内容の計画を立てましょう。学習活動は一つでも課題は一人一人の実態に応じて個別に用意しましょう。
- 一人一人の課題について、指導者の配慮事項や支援の手立ての計画を立てましょう。

3 指導案作成のポイント

(1) 「各教科(国語・算数等)」、「各教科等を合わせた指導」の指導案の例

〇〇障害特別支援学級(学級名) 〇〇科学習指導案

1 単元(題材)名 * * * *

○児童生徒の視点に立った表現を工夫する。
・活動がイメージしやすいような表現
・活動の意欲が高まるような表現
[例]「かぞえてみよう」・・・算数科
「漢字カルタであそぼう」・・・国語科
○教科書の章や節を単元(題材)名とする場合もある。

指導者 〇〇 〇〇

複数の時は
T1 〇〇 〇〇
T2 〇〇 〇〇

2 単元(題材)の目標

- (1) * * * * * (知識及び技能)
(2) * * * * * (思考力、判断力、表現力等)
(3) * * * * * (学びに向かう力、人間性等)

・学習指導要領をふまえ、全体の指導目標を学習集団全体としての実態と個別の実態を踏まえながら記述する。学習形態によっては、個別の目標のみの場合もある。
・目標は各教科の観点(「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」等)をふまえ記述する。

3 単元(題材)について

本学級は、

.....

.....

本単元(題材)では、

.....

.....

指導にあたっては、

.....

.....

○単元(題材)観、児童生徒観、指導観の順に記述することもあるが、特別支援学級等においては、児童生徒の実態から指導計画を立て、単元(題材)を設定していくことから、児童生徒観から書き始めることが望ましい。

【児童(生徒)観】

・人数、学習集団としての実態、児童生徒の認知特性や行動特性、単元(題材)に対する興味・関心や経験、単元(題材)の目標に関して学習内容の系統性の観点からこれまで身に付けてきた力やまだ身に付けていない力など、児童生徒の実態を記述する。

【単元(題材)観】

・学習指導要領における単元(題材)の位置づけ、単元(題材)の内容分析や価値、既習事項との関連などを記述することで、身に付けさせたい力を育成するのに適した単元(題材)であることを示す。

【指導観】

・児童(生徒)観や単元(題材)観の記述を踏まえて、どのような単元(題材)構成にするのかを概観できるよう、以下の点を中心に記述する。
ー本単元(題材)ではどのような力を育成するのか。
ーその力を育成するために、児童生徒の実態(特性や興味・関心、既習事項など)からどのような教材や学習活動を組み合わせて単元(題材)を構成するのか。
ーその力を育成するために、児童生徒の実態(特性や興味・関心、既習事項など)からどのような支援の手立てを講じるのか。

4 単元(題材)の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
* * * * *	* * * * *	* * * * *
* * * * *	* * * * *	* * * * *
本単元(題材)の目標を基に、『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料(国立教育政策研究所)を参考に作成します。		

5 指導計画と評価(〇〇時間扱い)

第1次 〇時間

第2次 〇時間

・単元(題材)で指導する内容及び時間数を示す。

・本時の授業に関わる第〇次については、具体的な計画を示し、本時の前後にどのような指導をするかが明らかになるように書く。

時	学習内容・活動	評価規準・評価方法		
		A	B	C
1	1			
	2			
2	1			
(補)	2			

・どのような内容を学習するのか、主なものを記述する。

・それぞれの時間でそれぞれの児童生徒にどのような力を身に付けさせたいかが明らかになるような評価規準を、具体的に記述する。
・単元(題材)をまとまりとして捉え、学習内容と評価規準・方法を具体的に書く。

6 本時の指導

(1) 目標

ア 全体目標

〇 することができる。

イ 個別目標

A : 〇

B : 〇

C : 〇

・集団に関わる目標を記述する。

・単元(題材)の目標との整合性を意識する。

・単元(題材)の個別目標との整合性を意識する。

・内容、方法、達成度を、誰が評価しても同じ評価ができるような具体的な行動目標で記述する。

☞ 授業づくり編Ⅱ-①「実態把握、目標設定の工夫」の「目標設定の工夫」参照

(2) 準備・資料

・全体と個別に分けて記載することが望ましい。個別の欄には、学習活動、指導上の留意点、個に応じた支援の手立てを示す。

(3) 展開

学習内容・活動	教師の指導・支援と評価 (◎評価)			
	全 体	A	B	C
1				
2				

・学習意欲が喚起できるような課題提示を行う。

・児童生徒が、本時のめあてを意識し、学習の見通しがもてるようにする。

・個に応じた支援の手立ては以下の点に留意して、記述する。
- 児童生徒のつまずきを予想し、それに対応するための支援の手立てを具体的に記述する。
- 「励ます」「言葉かけをする」といった支援のほかに、一人一人の児童生徒の実態を踏まえて、得意な面を生かし苦手な面を補えるような内容も、具体的に記述する。
- 個別的教育支援計画に記載してある合理的配慮の内容を反映させる。
- 児童生徒の実態を踏まえた称賛の仕方についても具体的に記述できるとよい。
- ティーム・ティーチングにて授業を行う場合は、教師間の役割分担についても記述する。

3 ・話し合う、考える、作業をする、調べるなど多様な活動ができるようにする。 ・児童生徒の活動時間を多くとる。 4 5 ・学習内容を整理しながら、本時の学習を振り返り、学習の成果を児童生徒が実感できるようにする。 ・次時への見通しがもてるようにするとともに、意欲が高まるようにする。		◎ ◎ ◎		◎ ◎ ◎
--	--	--	--	--

(2) 小集団による自立活動の指導案の例

〇〇障害特別支援学級（学級名）自立活動学習指導案

1 題材名

- ・児童生徒の視点に立った表現を工夫する。
 - －活動がイメージしやすいような表現
 - －活動の意欲が高まるような表現
- 【例】「なかよくなろう! 大作戦」「お話しよう」

指導者 〇〇 〇〇

複数の時は

T1 〇〇 〇〇

T2 〇〇 〇〇

2 題材について

本学級は、

.....

.....

本題材では、

.....

指導にあたっては、

.....

○題材観、児童（生徒）観、指導観の順に記述することもあるが、特別支援学級等においては児童生徒の実態から指導計画を立て、題材を設定していくことから、児童生徒観から書き始めることが望ましい。

【児童（生徒）観】

- ・人数、児童生徒の障害の状態や認知特性や行動特性、題材に対する興味・関心や経験、題材の目標に関してこれまで身に付けてきた力やまだ身に付けていない力など、児童生徒の実態を記述する。

【題材観】

- ・特別支援学校学習指導要領に示されている自立活動の内容（6区分 27 項目）と題材の関連、題材の内容分析や価値、これまで学習してきた内容との関連などを記述することで、身に付けさせたい力を育成するのに適した題材であることを示す。

【指導観】

- ・児童（生徒）観や題材観の記述を踏まえて、どのような題材構成にするのかを概観できるよう、以下の点を中心に記述する。
 - －本題材ではどのような力を育成するのか。
 - －その力を育成するために、児童生徒の実態（障害の状態や特性、興味・関心、これまでに学習した内容など）からどのような教材や学習活動を組み合わせて題材を構成するのか。
 - －その力を育成するために、児童生徒の実態（障害の状態や特性、興味・関心、これまでに学習した内容など）からどのような支援の手立てを講じるのか。
- ・小集団での学習を行う意図や有効性を明確にし、記述する。

3 児童（生徒）の実態と個別目標

	題材における実態	題材における目標
A	・題材に関する実態を、行動面（学習態度や取組の様子、認知特性や行動特性等）と学習面（学習レディネス等）の両面から記述する。 ・何がどこまでできているか、どんな方法ならできるかを記述する。	○.....【3-(4)】
B		・自立活動は、個々の障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服するために必要な項目を選定して指導する。 ・選定した自立活動の内容（6区分 27 項目）を【 】内に記述する。 ・この題材において、どのような力を身に付けさせたいかについて記述する。
C		・個別の指導計画の短期目標とのつながり（整合性）を意識して記述する。

4 指導計画と評価（〇〇時間扱い）

月	時間数	学習内容・活動	評価規準・評価方法		
			A	B	C
〇		・題材で指導する内容及び時間数を示す。 ・本時に関わる場所は、具体的な計画を示し、本時の前後にどのような指導をするかが明らかになるように記述する。		・個別の指導計画に基づき、題材における達成目標を記述する。	

10 (本時)					
11					
12					

5 本時の指導

(1) 目標

ア 全体目標

○ することができる。

イ 個別目標

A : ○ 【3-(4)】

B : ○ 【2-(2)】

C : ○

・選定した自立活動の内容(6区分 27 項目)を【 】内に記述する。

(2) 準備・資料

・本時の指導・支援は、全体と個別に分けるとその内容が明確になる。学習活動が個別化されるときには、学習活動、指導上の留意点、個に応じた支援の手立てを個別化して示す。

(3) 展開

学習内容・活動	教師の指導・支援と評価 (◎評価)			
	全 体	A	B	C
1 ・学習意欲が喚起できるような課題提示を行う。	・各学習活動における個々の課題と指導上の留意点、個に応じた支援の手立てを示す。 ・個に応じた支援の手立ては以下の点に留意して、記述する。 －児童生徒のつまずきを予想し、それに対応するための支援の手立てを具体的に記述する。 －「励ます」「言葉かけをする」といった支援のほかに、一人一人の児童生徒の実態を踏まえて、得意な面を生かし苦手な面を補えるような内容も、具体的に記述する。 －個別的教育支援計画に記載してある合理的配慮の内容を反映させる。 －児童生徒の実態を踏まえた称賛の仕方についても具体的に記述できるとよい。 －チーム・ティーチングにて授業を行う場合は、教師間の役割分担についても記述する。			
2 ・児童生徒が、本時のめあてを意識し、学習の見通しがもてるようにする。				
3 ・話し合う、考える、作業をする、調べるなど多様な活動ができるようにする。 ・児童生徒の活動時間を多くとる。	・教材・教具などは写真や絵図で示すことも考えられる。 ◎ ◎ ◎ ・どのような場面で、どのような方法で、どのような観点で評価するかが分かるよう、具体的な評価規準を記述する。 ・本時の目標に対する評価となるように、整合性を意識する。 ◎ ◎ ◎			
	・学習の方法、手順に基づき、主体的に学習に取り組むことができるようにする。			

		・学習の方法、手順に基づき、主体的に学習に取り組むことができるようにする。			
4					
5	・学習内容を整理しながら、本時の学習を振り返り、学習の成果を児童生徒が実感できるようにする。 ・次時への見通しがもてるようにするとともに、意欲が高まるようにする。				

授業実践事例編

授業実践事例（授業づくりの8つの視点）

番号	学級等	教科・領域等	単元（題材）名	授業の視点	ページ
事例 1	小・知	算数	重さを調べよう	① ⑤	72
事例 2	小・知	生活単元学習	転校した友だちを元気づけよう	② ⑧	76
事例 3	小・自	自立活動	いろいろな顔	③ ⑥	80
事例 4	小・自	自立活動	ペットボトルボウリングをしよう	① ⑤	84
事例 5	小・知	算数	あまりのあるわり算	④ ⑥	88
事例 6	小・言	国語	漢字の広場	⑤ ⑧	92
事例 7	小・言	自立活動	ことば遊びをしよう	⑥ ⑧	96
事例 8	小・言	国語	かるたのひみつを読もう	② ③ ⑥	100
事例 9	中・知	作業学習	オルゴールボックスを作ろう	① ④	104
事例 10	特・高	自立活動	上手に聞こう	② ⑦	108
事例 11	特・高	総合的な学習の時間	和（日本文化）を味わおう	③ ③	112
事例 12	特・中	数学	ボウリングをしよう	⑦ ⑦	116

＜学級等＞ 小・知 ： 小学校知的障害特別支援学級
 小・自 ： 小学校自閉症・情緒障害特別支援学級
 小・言 ： 小学校言語障害特別支援学級
 中・知 ： 中学校知的障害特別支援学級
 特・中 ： 特別支援学校中学部
 特・高 ： 特別支援学校高等部

＜授業づくりの8つの視点＞

- | | |
|---------------------|-------------------|
| ① 実態把握、目標設定の工夫 | ② 場の工夫 |
| ② 導入・展開・まとめの工夫、単元計画 | ④ 発問・応答・称賛などの言葉かけ |
| ⑤ 特性に応じた支援 | ⑥ 教材・教具の工夫 |
| ⑦ ティーム・ティーチング | ⑧ 評価の工夫 |

授業実践事例の見方について



授業づくりの8つの視点をもとにして、様々な工夫やアイデアを凝らした授業の実践事例を紹介しています。1つの事例は、4ページ構成となっており、同様の形式でまとめているため、分かりやすく参考になると思います。実践例の詳細は、次のとおりです。

実践例1 算数「重さを調べよう」

小学校知的障害特別支援学級

1 単元名 重さを調べよう

<児童の実態> 男子2人(小3:2人)

- ・既習の加減算はできる。長さをリットルで表したりする等、単位を混同してしまう児童がいる。
- ・細かい目盛りを読むことが苦手な児童がいる。
- ・視覚的な手がかりによって注意を向けやすくなったり、理解が促進されたりする。

2 単元の目標

- 身のまわりの具体物の重さを、はかりを用いて測定することができる。【知識及び技能】
- 身のまわりの具体物の重さやその関係に着目し、目的に応じて量の関係を表現することができる。【思考力、判断力、表現力等】
- 算数で学んだことのよさや楽しさを感じながら学習や生活に活用しようとする。【学びに向かう力、人間性等】

3 本時の指導

(1) 目標

- 一の位が0の、3位数-2位数や3位数+2位数の計算を間違いなく正確にすることができる。(知識)

(2) 展開

学習の内容及び活動	児童生徒への手立て<全体、個別>
1 本時の課題を知る。	・細かい目盛りを読むことが苦手な児童が、自信をもって学習に取り組めるようにするために、本時の学習ではデジタルのはかりを使用する。
② そのままはかりにのせることがむずかしいものの重さをもとめる	・児童の様子を見て、必要ならば、教師が手でかりがつかめるようにする。
2 容器の中の小豆だけの重さを計算で求める。(小豆だけの重さ+空の容器の重さ-容器だけの重さ)	・お楽しみ会で作る「ほろほろクッキー」を取り扱う物として、その材料を用いること欲を高める。
3 小麦粉100gと砂糖30gを測り取る方法を考え、発表する。(はかりの目盛りが、容器の重さ+100gになるまで、小麦粉を入れる)	・児童の様子を見て、必要ならば、小豆の手順を再確認したり、教師が図を使いなことで、児童が考えの手がかりがつかめ
4 小麦粉100gと砂糖30gを、実際にはかりを使って測り取る。	・自己評価は、ノートに書いた本時の課題②等を使って記入するよう指示しておく
5 本時の学習を自己評価する。	・自己評価が低かった時は、その理由を問その原因を探り、次時以降の学習に生か

4 評価

- 一の位が0の、3位数-2位数や3位数+2位数の計算を間違いなく正確にすることができる。

1 ページ

事例番号、教科・領域名、単元(題材)名、校種・障害等が分かるようなタイトルにしています。

指導略案を示しました。児童生徒の実態に基づき、どのような授業を実践したのかが分かりやすくまとまっています。目標、評価、支援の手立てが具体的に記されていますので参考にしてください。

①実態把握、目標設定の工夫

個別の指導計画に基づく本時の目標の設定

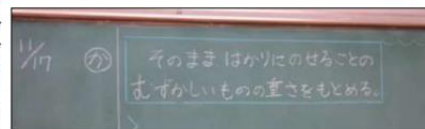
個別の指導計画の指導目標に基づいて、本時の目標を設定した。

個別の指導計画の短期目標(抜粋)	→	本時の目標
○学習した四則演算の問題について、9割正答できる。		○一の位が0の、3位数-2位数や3位数+2位数の計算を間違いなく正確にすることができる。(知識)

①実態把握、目標設定の工夫

児童が自己評価できるような、児童向けの目標の提示

授業の最初に、「授業の終わりにどうなっていれば目標が達成できたといえるのか」を児童自身が判断できるような具体的な児童向けの目標(右写真の②(課題の意))を提示した。また授業の最後には、目標が達成できたかを自己評価する時間も設定した。



⑤特性に応じた支援

得意なところを生かし、苦手なところを補う工夫



この授業を受けている2人とも、視覚的な手がかりによって学習がスムーズに進む児童である。そのため、課題把握の際、空の容器をはかりに載せ、容器だけの重さを確認し、次に、その容器に小豆を入れてみせながら、小豆だけの重さを測ることが課題であることを伝えた。このように、実演したり、図で説明したりといった、視覚的な手がかりを多用することで、課題把握がスムーズに進んだ。



細かい目盛りを読むことが苦手な児童のために、この実践では、上皿ばかりではなく、デジタルのはかりを使用した。これにより、児童が本時の学習に対して苦手意識をもつことなく、積極的に取り組むことができた。

2 ページ

授業の8つの視点の中から、この授業で特に力を入れた点、工夫した点等について、活動の様子や板書、教材等の写真を紹介しながら、説明しています。この授業のウリともいえます。様々なアイデアがとても参考になります。丸数字は、便宜上つけた8つの視点の番号となっています。

授業の視点シート

授業の視点	工夫したことや配慮したこと
① 実態把握 目標設定の工夫	① 実態把握、目標設定の工夫 ◎個別の指導計画に基づく本時の目標の設定 個別の指導計画の目標をもとに、本時の目標を設定した。毎時間の授業の目標が、個別の指導計画と関連したものになってこそ、一貫した指導が展開できるだろうと考えた。
② 場の工夫	◎児童が自己評価できるような、児童向けの本時の目標の提示 特別支援学級で学ぶ児童生徒だからこそ、1時間の授業の目標を児童生徒が理解できる言葉で教師が明示して、児童生徒が目的意識をもって授業に臨めるようにしたい。目標は、授業が終わったときに、達成できたかを児童生徒自身が評価できるよう、できるだけ具体的なものにしよう心がけている。
③ 導入・展開・まとめの工夫、単元計画	⑤ 特性に応じた支援 普段の生活や学習の様子を観察したり、知能検査等を活用したりしながら、児童の認知面で実態を把握するよう心がけた。その結果をもとに、児童が自信をもって授業に臨めるよう、得意なことを生かし苦手なことを補う支援を考えた。
④ 発問・応答・賞賛などの言葉かけの工夫	
⑤ 特性に応じた支援	<得意なことを生かす支援> この事例の児童は2人とも、知能検査によって、視覚的な手がかりを活用した学習が効果的であると思われる。そこで、実演して見せる、図や絵を使って説明する、目標や課題を口頭で、といった視覚的な手助けを進めるようにしました。
⑥ 教材・教具の工夫	<苦手なことを補う支援> 一人の児童は、視力に課題があり、文字が小さくても重さが測れないという状況でした。本時のねらいは、加減算の学習で、上皿はかりを日常生活ではデジタルの計りが多いという現状も考慮
⑦ ティーム・ティーチング	
⑧ 評価の工夫	

左側は、授業の8つの視点から、この授業でのウリとするもの(2ページで紹介した視点)を水色で示しました。

右側には、取り上げた視点について、どんな工夫をしたのか、それはどうしてなのか等、さらに解説を加えました。より「なっとく」していただけたと思います。



ワンポイントアドバイス!

せっかくつくった個別の指導計画だから…、授業に生かそう!

個別の指導計画をつくったあとは、個人情報だから学校のカギ付き書庫で大切に保管しておしまい、というのではもったいない!せっかくつくった個別の指導計画は、日々の授業に積極的に活用しましょう。

活用する方法はいくつかあると思います。その一つが、個別の指導計画に書いた目標を意識しながら、毎時間の授業の目標を設定することです。

例えば、この実践では、

個別の指導計画の目標(抜粋)	本時の目標
○学習した四則演算の問題について、9割正答できる。	→ ○一の位が0の、3位数-2位数や3位数+2位数の計算を間違わずに正確にすることができる。 (知・技)

というつながりを意識して、目標を設定しました。

4ページ

このページは、自由コーナーとしました。授業の8つの視点に限らずに、この授業をとおして、伝えたいことや紹介したいこと等を自由に示しました。授業づくりのコツ、ワークシートの紹介や教材の作成方法など、参考になる情報が盛りだくさんです。

国語や算数で学習したことを、生活場面で生かそう!

通常の学級の授業ならば、問題文を読んで、解き方を友達に説明して、答えを求めたら課題達成となることが多いです。でも、この授業では、学習したことを生活場面で生かせるよう、生活単元学習の内容と結びつけた活動を取り入れてみました。

学期末のお楽しみ会では「ほろほろクッキー」を作ること計画していました。そこで、この授業では、レシピを見ながら材料を測り取る練習をしながら、重さの加減算の学習を進めました。

そして、この授業の数日後に行われたお楽しみ会では、子どもたちは、この授業で学んだことを生かして、材料を正確に測り取ることができました(一緒にクッキーを作った下級生に、材料の測り取り方を得意げに説明している姿が印象的でした)。

このように、国語や算数で学んだことが、生活場面で生かされるような学習を取り入れられることは、特別支援学級ならではの面白さであり、醍醐味だと感じています。



事例で紹介した様々なアイデアや工夫を参考にしてみましょう。児童生徒の実態に応じて、アレンジしていくことも大切です。



実践例Ⅰ 算数「重さを調べよう」

小学校知的障害特別支援学級

Ⅰ 単元名 重さを調べよう

<児童の実態> 男子2人(小3:2人)

- ・既習の加減算はできる。長さをリットルで表したりする等、単位を混同してしまう児童がいる。
- ・細かい目盛りを読むことが苦手な児童がいる。
- ・視覚的な手がかりによって注意を向けやすくなったり、理解が促進されたりする。

2 単元目標

- 身のまわりの具体物の重さを、はかりを用いて測定することができる。【知識及び技能】
- 身のまわりの具体物の重さやその関係に着目し、目的に応じて量の関係を表現することができる。【思考力、判断力、表現力等】
- 算数で学んだことのよさや楽しさを感じながら学習や生活に活用しようとする。【学びに向かう力、人間性等】

3 本時の指導

(1) 目標

- 一の位が0の、3位数-2位数や3位数+2位数の計算を間違いなく正確にすることができる。(知・技)

(2) 展開

学習の内容及び活動	児童生徒への手立て<全体、個別>
1 本時の課題を知る。	・細かい目盛りを読むことが苦手な児童が、自信をもって学習に取り組めるようにするために、本時の学習ではデジタルのはかりを使用する。 ・児童の様子を見て、必要ならば、教師が図を使いながら説明することで、児童が小豆だけの重さを求めるための考え方の手がかりがつかめるようにする。 ・お楽しみ会で作る「ほろほろクッキー」のレシピを見せ、測り取る物として、その材料を用いることで、学習に対する意欲を高める。 ・児童の様子を見て、必要ならば、小豆の重さを求めたときの手順を再確認したり、教師が図を使いながら説明したりすることで、児童が考えの手がかりがつかめるよう支援する。 ・自己評価は、ノートに書いた本時の課題の右側に、△、○、◎等を使って記入するよう指示しておく。 ・自己評価が低かった時は、その理由を児童に尋ねることで、その原因を探り、次時以降の学習に生かす。
④ そのままだかりにのせることが むずかしいものの重さをもとめる	
2 容器の中の小豆だけの重さを計算で 求める。(小豆だけの重さ=全体の重さ-容器だけの重さ)	
3 小麦粉100gと砂糖30gを測り取 る方法を考え、発表する。 (はかりの目盛りが、容器の重さ+100gになるまで、小麦粉を入れる)	
4 小麦粉100gと砂糖30gを、実際 にはかりを使って測り取る。	
5 本時の学習を自己評価する。	

4 評価

- 一の位が0の、3位数-2位数や3位数+2位数の計算を間違いなく正確にすることができたか。(観察)

①実態把握、目標設定の工夫

個別の指導計画に基づく本時の目標の設定

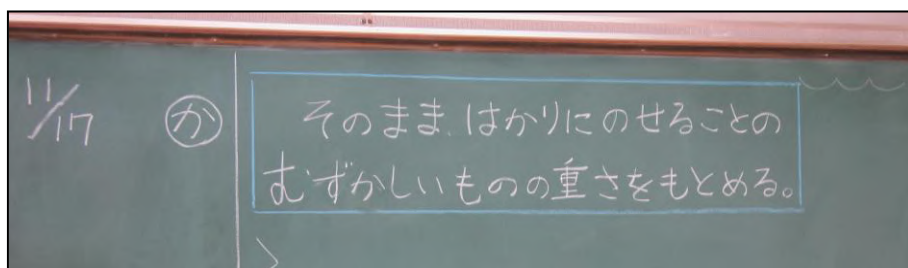
個別の指導計画の指導目標に基づいて、本時の目標を設定した。

個別の指導計画の短期目標（抜粋）		本時の目標
○学習した四則演算の問題について、9割正答できる。	→	○一の位が0の、3位数－2位数や3位数＋2位数の計算を間違いなく正確にすることができる。（知・技）

①実態把握、目標設定の工夫

児童が自己評価できるような、児童向けの目標の提示

授業の最初に、「授業の終わりにどうなっていれば目標が達成できたといえるのか」を児童自身が判断できるような具体的な児童向けの目標（右写真の㊦（課題の意））を提示した。また授業の最後には、目標が達成できたかを自己評価する時間も設定した。



⑤特性に応じた支援

得意なところを生かし、苦手なところを補う工夫



この授業を受けている2人とも、視覚的な手がかりによって学習がスムーズに進む児童である。

そのため、課題把握の際、空の容器をはかりに載せ、容器だけの重さを確認し、次に、その容器に小豆を入れてみせながら、小豆だけの重さを測ることが課題であることを伝えた。このように、実演したり、図で説明したりといった、視覚的な手がかりを多用することで、課題把握がスムーズに進んだ。



細かい目盛りを読むことが苦手な児童のために、この実践では、上皿はかりではなく、デジタルのはかりを使用した。

これにより、児童が本時の学習に対して苦手意識をもつことなく、積極的に取り組むことができた。

授業の視点シート

授業の視点	工夫したことや配慮したこと
① 実態把握 目標設定の工夫	① 実態把握、目標設定の工夫 ◎個別の指導計画に基づく本時の目標の設定 個別の指導計画の目標をもとに、本時の目標を設定した。毎時間の授業の目標が、個別の指導計画と関連したものになってこそ、一貫した指導が展開できるだろうと考えた。 ◎児童が自己評価できるような、児童向けの本時の目標の提示 特別支援学級で学ぶ児童生徒だからこそ、1時間の授業の目標を児童生徒が理解できる言葉で教師が明示して、児童生徒が目的意識をもって授業に臨めるようにしたい。目標は、授業が終わったときに、達成できたかを児童生徒自身が評価できるよう、できるだけ具体的なものにするよう心がけている。 ⑤ 特性に応じた支援 普段の生活や学習の様子を観察したり、知能検査等を活用したりしながら、児童の認知面で実態を把握するよう心がけた。その結果をもとに、児童が自信をもって授業に臨めるよう、得意なことを生かし苦手なことを補う支援を考えた。 <得意なことを生かす支援> この事例の児童は2人とも、知能検査によって、視覚的な手がかりを活用した学習が効果的であると思われました。そこで、実演してみせる、図や絵を使って説明する、目標や課題を口頭だけでなく文字で黒板に明示する、といった視覚的な手がかりを効果的に用いて授業を進めるようにしました。 <苦手なことを補う支援> 一人の児童は、視力が正常でも、細かい目盛りを読むことに困難さがありました。そこで、細かい目盛りを読まなくても重さが測れるように、デジタルのはかりを使用しました。 本時のねらいは、加法減法を用いて重さの計算をすることで、上皿はかりを読むことではありませんでした。日常生活ではデジタルのはかりを使うほうが圧倒的に多いという現状も考慮しました。
② 場の工夫	
③ 導入・展開・まとめの工夫、単元計画	
④ 発問・応答・称賛などの言葉かけの工夫	
⑤ 特性に応じた支援	
⑥ 教材・教具の工夫	
⑦ ティーム・ティーチング	
⑧ 評価の工夫	



ワンポイントアドバイス!

せっかくつくった個別の指導計画だから…、授業に生かそう!

個別の指導計画を作ったあとは、個人情報だから学校のカギ付き書庫で大切に保管しておしまい、というのではもったいない!せっかく作った個別の指導計画は、日々の授業に積極的に活用しましょう。

活用する方法はいくつかあると思います。その一つが、個別の指導計画に書いた目標を意識しながら、毎時間の授業の目標を設定することです。

例えば、この実践では、

個別の指導計画の目標（抜粋）		本時の目標
○学習した四則演算の問題について、9割正答できる。	→	○一の位が0の、3位数－2位数や3位数＋2位数の計算を間違いなく正確に行うことができる。 (知・技)

というつながりを意識して、目標を設定しました。

国語や算数で学習したことを、生活場面で生かそう!

通常の学級の授業ならば、問題文を読んで、解き方を友達に説明して、答えを求めたら課題達成となることが多いです。でも、この授業では、学習したことを生活場面で生かせるよう、生活単元学習の内容と結びつけた活動を取り入れてみました。

学期末のお楽しみ会では「ほろほろクッキー」を作ること計画していました。そこで、この授業では、レシピを見ながら材料を測り取る練習をしながら、重さの加減算の学習を進めました。

そして、この授業の数日後に行われたお楽しみ会では、子供たちは、この授業で学んだことを生かして、材料を正確に測り取ることができました（一緒にクッキーを作った下級生に、材料の測り取り方を得意げに説明している姿が印象的でした）。

このように、国語や算数で学んだことが、生活場面で生かされるような学習を取り入れられることは、特別支援学級ならではの面白さであり、醍醐味だと感じています。



実践例2 生活単元学習「転校した友だちを元気づけよう」

小学校知的障害特別支援学級

1 単元名 転校した友だちを元気づけよう

＜児童の実態＞ 男子4人(小2:1人 小3:2人) 女子1人(小2:1人)

- ・どの児童も、様々な学習活動に意欲的に取り組むことができる。
- ・日本語の読み書きが苦手な児童が2人いる。
- ・絵を描くことに苦手意識をもっている児童が2人いる。

2 単元の目標

○身の回りの社会の仕組みを知り、書いた手紙がどのように友達に届くのか分かる。

【知識及び技能】

○絵本作りの構想を通して、転校した友だちを元気づけたいという気持ちを表現することができる。

【思考力、判断力、表現力等】

○言葉で伝え合うよさを感じるとともに、思いや考えをもちながら、言葉をよりよく使おうとしている。

【学びに向かう力、人間性等】

3 本時の指導

(1) 目標

○転校した友だちも参加できるお城の絵について考えながら描くことができる。(思・判・表)

(2) 展開

学習の内容及び活動	児童生徒への手立て＜全体、個別＞
1 自分たちががつくっている「100階建てのお城」の絵本の出来上がったところまでの読み聞かせを聞く。	(前時までに、100階建てのお城の絵本の導入部分を、手分けして完成させてある。本時は、100階分の部屋を児童で手分けして描いていく活動がメインである。)
2 単元計画表を見ながら、本時の学習内容を知る。 100かいだてののしろをかこう	・授業を通して、転校した友だちのことを気にするような発言やつぶやきがあった時は、そのことを称賛することで、転校した友だちを元気づけるための活動であることを周囲の児童にも意識させたい。
3 活動のポイントを知る。 ・転校した友だちがよるこぶようなお城をかこう。 ・自分と転校した友だちをどう場させよう。 ・かいだんをつけよう。 ・書ける人は文しようも書こう。	・絵を描くことへの自信の無さから、なかなか活動に取りかかれない児童がいた場合には、絵本の絵や、友達の絵、友達の意見を参考にしてよいことを伝えることで、安心して活動に取り組めるようにする。
4 お城を描く。文章を書く。	・大きめのお城の枠や罫線の入ったお城の枠を用意しておき、不器用な児童も安心して活動に取り組めるようにする。
5 描いたところまでのお城を、みんなで見合う。	・転校した友だちに送るための本を描いていることや、転校した友だちがもらってうれしい気持ちになるような絵を描くことが大切であることを繰り返し伝えることで、転校した友だちを元気づけるという当初の目的を意識させながら活動に取り組ませたい。

4 評価

○転校した友だちも参加できるお城の絵について考えながら描くことができる。(思・判・表)

③導入・展開・まとめの工夫

単元計画の工夫

児童に提示した単元計画表

さんを えかお にしようプロジェクト
～『100かいだてののしる』をかいて おくろう～

すること
① ストーリーを かんがえよう。
② さんの きているふくを かんがえよう。
③ 「はじまり」と「おわり」をかこう。
④ おしるを かこう。
⑤ 2ねん2くみに たのむ れんしゅうを しよう。
⑥ 2ねん2くみの ともだちと いっしょに おしるをかこう。
⑦ みんなが かいた おしるを まとめて、ほんにしよう。
⑧ さんに てがみを かこう。
⑨ えほんを つつんで ゆうびんきよくに だしにいこう。

図工科の要素を
盛り込んだ活動

交流学級を
巻き込んだ活動

国語の要素を
盛り込んだ活動

生活科の要素を
盛り込んだ活動

児童による
自己評価
(次項参照)

単元は、学習内容の
有機的なひとまとまりであり、指導計画
の上では、単元展開
において順序性があ
ります。

計画(導入)→準備・
実践(展開)→反省
(まとめ)という一
連の展開であり、こ
の順序をくずすこと
はできません。



⑧評価の工夫

毎時間でき、短時間ですむ自己評価の工夫

この授業に限らず、すべての授業で、目標を提示し、授業の最後に目標が達成できたかを、◎、△等で自己評価する時間を設定した。

また、自己評価が△だった時などには、評価理由を児童生徒から聞き取ることで、学習のどこに困難さを感じていたのかを把握する手がかりとし、次時以降の目標設定や支援の手立てに生かしている。

右のノートは算数の授業で実施した自己評価の様子。青で囲んである部分が目標で、その隣の赤丸が児童の自己評価。

① 1000gの重さのものを5つを1kgにする。

もの	重さ	合計
1kg	1000g	1000g
500g	500g	500g
250g	250g	250g
125g	125g	125g
62.5g	62.5g	62.5g

② デジタルばかりをつかって、5つのものの重さを量る。

もの	重さ	合計
100g	100g	100g
200g	200g	200g
300g	300g	300g
400g	400g	400g
500g	500g	500g

③ いれものの中に入ったあすきだりたのさをもめよう

もの	重さ	合計
150g	150g	150g
50g	50g	50g
100g	100g	100g

算数のノートの例

授業の視点シート

授業の視点	工夫したことや配慮したこと
① 実態把握 目標設定の工夫	③ 導入・展開・まとめの工夫、単元計画 ・交流学級も巻き込んだ単元計画を立てた。具体的には、転校した児童が学んでいた交流学級の児童にも、100階建てのお城の一部を分担して描いてもらうようにした。また、100階建てのお城の描き方を、特別支援学級の児童が交流学級の友だちに説明する時間を設定することで、特別支援学級の児童が交流学級の友だちの前で活躍できるようにした。 ・教科学習の要素を盛り込んで単元計画を立てた。 ☆読み聞かせ、作文、手紙を書く・・・国語 ☆お城の絵を描く・・・・・・・・・・図工 ☆郵便局に出しに行く・・・・・・・・生活科
② 場の工夫	
③ 導入・展開・まとめの工夫、単元計画	
④ 発問・応答・称賛などの言葉かけの工夫	
⑤ 特性に応じた支援	⑧ 評価の工夫 ・授業の最後に、児童自身が本時の課題を達成できたかを自己評価する時間を設けた。児童は、本時の学習を振り返り、△や○、◎、花丸等で、評価するようにした。 児童が、よくない自己評価をした時や、教師の見とりと明らかに異なる評価をした時は、その評価をつけた理由を児童自身から聴きとり、次時以降の目標設定や支援の手立てに生かすようにしています。児童自身の言葉は、授業を改善していく上でとても参考になると実感しています。また、児童の言葉をきっかけにしながら、「次はこういう工夫をしてみよう」という相談も児童と一緒にできるので、たとえ、よくない自己評価をした時にでも、前向きな気持ちで授業を終えることができます。 また、授業の最後に本時の学習を振り返り、◎や花丸を自分でつける活動そのものが、学習に対する自信を深める手だてになるのではないかと考えました。終わりよければすべてよし、ではないですが、授業の最後に肯定的な活動をもってすることで、児童は満足感や達成感をもちながら授業を終えることができているように感じています。 自己評価は毎授業で必ず行うようにしているので、短時間で簡単にできるよう工夫しています。
⑥ 教材・教具の工夫	
⑦ ティーム・ティーチング	
⑧ 評価の工夫	



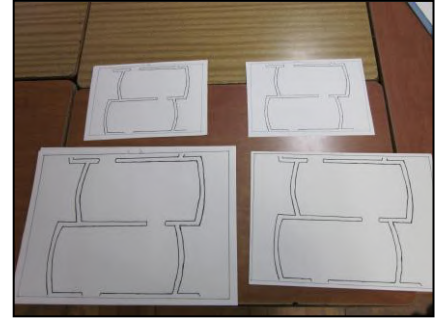
絵を描くことが苦手な子のために…

絵を描く用紙の工夫

不器用で指定された大きさの枠や紙の中に絵を収められない、ものの位置関係がうまく把握できずに、バランスのとれた絵が描けない、そんな原因から、絵を描くことに苦手意識をもってしまっている子がいます。

この授業では、そうした子たちでも安心して絵を描けるよう、色々な大きさの用紙や、マス目入りの用紙（コピー用紙）を用意しました。そして、各自が描きやすい用紙を選択し、その用紙にお城の絵を描きました。

特にコピー用紙は、「薄いマス目の線が手がかりになるので、思い通りの絵が描きやすい」と感想を言っていた子もいました。



「参考にしてもいいですよ」という言葉かけ

この授業では、絵本や友だちの描いた絵、友だちの意見など、参考にできるものはなんでも参考にしていよいよ、伝えました。

何を描いたらいいのか分からないから絵が描けない、という子にとっては、絵を描く手がかりがあるというだけで、安心感が生まれてくるようです。

この授業でも、絵を描くことの苦手な2人が、一冊の絵本を一緒に見て、いろいろと相談をしながら楽しそうにお城を描き進めていました。

この時間の活動では、「絵の中に必ず『自分』を書き入れる」という条件をつけたので、どんな絵を描いても、それはその子独自のオリジナルの絵になります。

時には子供たちと一緒に、子供たちと同じ活動に取り組んでみましょう！

100階建てのお城を分担して描く活動には、先生である私も、子供たちと一緒に取り組みました。

私は絵を描くことが苦手なのですが、「先生」が悩みながら描いては消し描いては消しをしてお城を描いている姿は、「先生でさえあんなに苦労しているんだから…」と、逆に子供たちに安心感を与えたようです。普段なかなか思い通りの絵を描けずに「だめだ…」「できない!」とつぶやいている子供たちも、この日はお城を描く活動に楽しんで取り組んでいました。



実践例3 自立活動「いろいろな顔」

小学校自閉症・情緒障害特別支援学級

1 題材名 「いろいろな顔」(ソーシャルスキルトレーニング)

＜児童の実態＞ 男子1人(小5:1人)女子1人(小2:1人)

- ・手指の巧緻性、対人関係、言語発達、認知面、コミュニケーション能力などの面で発達に遅れがあったり、偏りがあつたりする児童で個人差も大きい。
- ・課題に対して見通しが持てると離席しないで学習に取り組むことができるようになってきているが、興味関心がもてないと活動を持続することが難しい。

2 題材の目標

- 小集団活動を通して、友だちとの関わりをもち、楽しく活動することができる。〈3-(3)(4)、6-(4)〉
- 絵カードを通していろいろな感情を表す表情があることに気付くことができる。〈3-(2)〉

3 本時の指導

- (1) 目標 3つの感情に合った表情絵カードを選ぶことができる。〈3-(2)〉
- (2) 展開

学習の内容及び活動	児童生徒への手立て＜全体、個別◎＞
1 本時の学習内容を知る。 ・読み聞かせ ・この顔どんな顔 ・ゲーム 2 学習活動をする。 (1) 読み聞かせを聞く。 (2) この顔どんな顔をする。 ○感情に合った表情絵カードを見つける。(うれしい・かなしい・怒っているこまっている) ○表情絵カードを作ってゲームをする。カードを作る。 (3) ゲームをする。 ○神経衰弱の遊び方とルールを確認する。 3 学習の振り返りをする。	・目標と学習内容を知らせ、見通しをもって取り組めるようにする。 ・学習内容について、目安を提示し、安定した気持ちで授業に臨めるようにする。 ・児童の表情や何気ない言葉を細かく見取り、それぞれの気づきを共感できるよう配慮する。 ◎マッチングができたなら、十分に称賛する。 ◎自分の言葉でマッチングの説明ができたときには、称賛し意欲を高める。 ・学習した絵カード以外のカードに気付くように身ぶりや視線で伝える。 ◎カード作りで道具の使い方がうまくできない場合には、介助しながら作成できるようにする。 ・やり方とルール説明は、ゆっくりと分かりやすい言葉で具体例を挙げながら説明する。 ・自分の思い通りにいかない場合があることや、気持ちを切り替えることにより楽しく活動できることに気付かせる。

4 評価

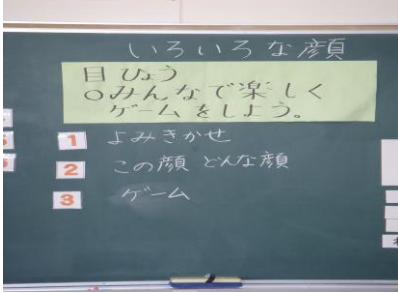
- 「うれしい・かなしい・怒っている」の感情を表情絵カードから選ぶことができたか。〈3-(2)〉(観察)

③導入・展開・まとめの工夫、単元計画

見通しをもって授業に臨めるように

自立活動（小集団活動）の場合、導入（学習の目標提示と確認、読み聞かせ、絵かき歌）→展開（メイン活動）→まとめ（振り返り、反省）とパターンを決めて進めている。パターン化することによって、児童一人一人が見通しをもって授業に臨むことができるようになってくる。

「いろいろな顔」の場合

		
① 導入 学習内容の確認 目標の確認	② 読み聞かせ 授業内容に関連した絵本を選択	③ 展開→まとめ メインとなる活動（マッチングと神経衰弱）

⑥教材・教具の工夫

具体的な思考・理解を促すために

○読み聞かせの絵本の選択・・・メインとなる表情理解と関連した内容を選ぶ。今回は「しろねこしろちゃん」（福音館・こどものとも年少版）幼稚園や保育園向けの絵本を選択した。福音館の「こどものとも」は内容がシンプルでわかりやすく、話も適度な長さで読む側も聞く側も飽きない絵本のシリーズである。

○表情絵カード・・・4枚の表情絵カード（うれしいとき、かなしいとき、おこっているとき、こまっているとき）の用意。感情表現の言葉カードを複数並べ、絵カードと言葉カードのマッチングをする。1枚の表情絵カードに対し、言葉カードを複数用意することによって、表情のバリエーションを増やし、児童がそれぞれ選択できるように配慮した。

○カードゲーム・・・マッチングで使用した表情絵カードに加え、種類を増やして使用した。児童が制作する作業活動を取り入れ、自分たちが作ったカードを使用することで活動への意欲付けとなるようにした。

今回使用した「日常生活絵カード」は、本校の特別支援学級に在籍する児童の保護者が、学校生活がより快適に過ごせるようにと作った絵カードです。絵カードを効果的に活用しましょう。また、Webページ上で公開されているものや市販されているものもありますので、探してみましょう。



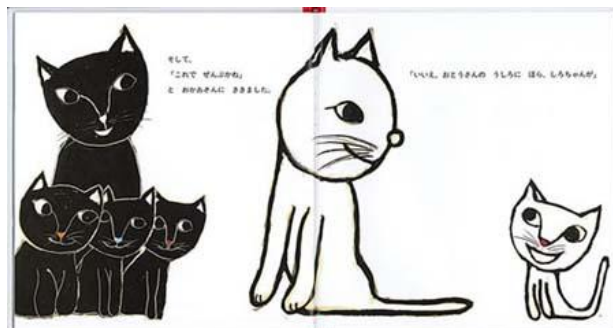
授業の視点シート

授業の視点	工夫したことや配慮したこと
① 実態把握 目標設定の工夫	③ 導入・展開・まとめの工夫、単元計画 ・導入の工夫・・・授業の流れは毎時間提示し、児童一人一人が見通しをもって取り組むことができるように、意識づけている。 ・展開の工夫・・・「絵本の読み聞かせ」はメインとなる活動に関連した内容を選ぶことによって導入としての工夫をした。「この顔どんな顔」へ活動が変わるときも絵本に登場した「しろちゃん」の表情を示すことによって流れをつくる。 「この顔どんな顔」では、表情絵カードを提示することで、言語化できなくても模倣することができる。 ・まとめの工夫・・・授業の流れ（板書）を振り返ることによって子供たちががんばったことを言語化したり、教師が称賛したりすることで次時の学習につなげる。
② 場の工夫	
③ 導入・展開・まとめの工夫、単元計画	
④ 発問・応答・称賛などの言葉かけの工夫	
⑤ 特性に応じた支援	
⑥ 教材・教具の工夫	⑥ 教材・教具の工夫 ・読み聞かせに使用する絵本は、授業に関連した内容のものを選んだ。この授業のねらいのひとつは、「表情絵カードを通して感情を理解すること」であり、絵本「しろねこしろちゃん」は、うれしい感情やかなしい感情がわかりやすい内容であり、挿し絵の表情もはっきりとわかりやすかったので選択した。 ・「この顔どんな顔」では、普段から使用している身近な絵カードを利用することで、活動にスムーズに入れるようにした。 ・ことばカードはパソコンで制作し、ラミネート加工を施した。裏面にはマグネットシートを貼り、黒板に掲示できるようにした。今回は「うれしい」「かなしい」「おこっている」等10枚のカードを用意した。
⑦ ティーム・ティーチング	
⑧ 評価の工夫	



今回の授業で 使ったものを紹介します！

導入の読み聞かせて使用した絵本です。



しろねこしろちゃん

楽しく学ぶ日常生活絵カードです。



トイレに行きたい



目を合わせる

160枚のカードから選んで使用できます。

ゲームで使用した神経衰弱のカードです。



楽しく学ぶ日常生活絵カードの裏に色工作用紙を貼って作りました。

実践例4 自立活動「ペットボトルボウリングをしよう」

小学校自閉症・情緒障害特別支援学級

1 題材名 「ペットボトルボウリングをしよう」(ソーシャルスキルトレーニング)

<児童の実態>男子3人(小5:3人)

- ・特性はそれぞれ異なるが、共通する課題として、不注意があげられる。
- ・指示や話を聞くことが難しく、ルールを理解する際に影響する。
- ・自分の考えをうまく伝えられないことがある。

2 題材の目標

- 小集団活動を通して、友だちとの関わりをもち、楽しく活動することができる。〈2(3)、6-(5)〉
- ルールや役割を理解することができる。〈3-(4)〉

3 本時の指導

- (1) 目標 ルールを守って、楽しくゲームに参加することができる。〈3-(4)〉
- (2) 展開

学習の内容及び活動	児童生徒への手だて<全体、個別◎>
1 本時の学習内容を知る。 ① 読み聞かせ ② 絵かき歌 ③ ペットボトルボウリング ④ 反省 2 学習活動をする。 (1) 読み聞かせを聞く。 (2) 絵かき歌をする。 ・黒板に注目し、描く順番に気をつけて描く。 (3) ペットボトルボウリングをする。 ・ルールを確認する。 ・順番を決める。 ・ゲームの内容を知る。 ・ゲームをする。 ・結果発表。 ・片付けをする。 3 学習の振り返りをする。	・学習内容を知らせることにより、見通しをもって学習に参加できるようにする。 ・言葉だけでは理解が十分でないと予想されるので学習予定を板書しながら説明する。  ・絵本に注目できるように、椅子を移動してもよいことを伝える。 ◎児童C：聞く態度がよい時には称賛する。 ・黒板に注目できるようにお手本を見せることで、見通しをもつことができるようにする。 ◎児童B：絵を描く際には介助員が説明する。 ◎児童C：絵を描く際には介助員が下書きをする。 ・ルールを声に出して読むよう声をかけ、確認できるようにする。 ・順番を決めるときにはどんな決め方をするのか、話し合いができるように支援する。 ◎児童A：中心になって話し合いが進むように声をかける。 ・みんなで協力して準備ができるように助言する。 ・スタートラインに気をつけてゲームができるように、一人一人に声をかける。 ・表をもとに結果発表をして、全員がんばったことを伝える。

4 評価

- ルールを守って、楽しくゲームに参加することができたか。〈3-(4)〉(観察)

①実態把握、目標設定の工夫

具体的な指導内容シートの活用

- 具体的な指導内容シートは「特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編」をもとに使いやすいようにアレンジした。個別の指導計画を立てるときに、同時に作成する。
- 実態把握→指導目標→指導目標を達成させるために必要な項目（自立活動は6区分27項目）の選定→具体的な指導内容の設定
- 今回の指導案には小集団全体の実態を記載したが、⑤の特性に応じた支援とあわせて個別の実態を下記にまとめた。

実態把握には、日頃からの観察や児童との関わりの中で何気ないところで気付くこともあります。些細なことでも、記録が大切です。

また、心理検査等のデータからの読み取りもできるようになることを勧めます。検査に詳しい先生や特別支援教育専門員の先生に相談してみましょう。



⑤特性に応じた支援

意欲的に取り組むことができ、自分の役割を意識して授業に臨める工夫

- 特性に応じた支援は、児童の実態把握を捉えることが基本となる。それをもとに目標を設定し、特性に応じた支援の手立てを設定する。

	A	B	C
実態と項目の選定	自閉スペクトラム症 理解力・判断力が高いが、こだわりが強い。自分の予想を超える事態に対しての耐性が弱い。共感的な態度や言葉かけによる支援によって不安を回避している。 3 人間関係の形成 (4) 集団への参加の基礎に関すること	発達性協調運動障害 自閉的傾向、身体機能に著しい遅れが見られ、動作性能力に落ち込みがみられる。聴覚的・言語的手がかりが有効。 6 コミュニケーション (5) 状況に応じたコミュニケーション	知的障害を伴う自閉症 社会生活年齢は3歳程度の発達。物の名称は理解しているが、状況把握や指示理解は困難。小集団活動でも介助が必要。 2 心理的な安定 (3) 障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること
目標・手立て	○小集団の中で、リーダー的な役割を意識しながら参加することができる。 ◎事前学習からリーダーとして意識し、ルールを決めるときや確認するとき率先して活躍するように言葉をかける。	○理解しやすいルール遊びの中で、きまりを守ってゲームに参加できる。 ◎点数を計算するときの計算係として役割をもつことによって自信をつけ、場に応じた会話ができるようにする。	○小集団の中で、気持ちを安定させて楽しく参加することができる。 ◎ピンを倒したときに称賛し、みんなから認められることで満足できるようにする。

授業の視点シート

授業の視点	工夫したことや配慮したこと
① 実態把握 目標設定の工夫	① 実態把握、目標設定の工夫 ・「特別支援学校学習指導要領解説・自立活動編」をもとに個別の指導計画と合わせて検討する。 (シートの作成：次ページ参照) ・手順としては、【実態把握→指導目標の設定→自立活動の内容項目の選定→具体的な指導内容の設定】 ・選定された項目が明確になると個別の目標や指導内容が設定しやすくなる。 ・課題としては、小集団活動のときに実態に差がある場合の指導内容・課題の設定。引き継ぎや個別の指導計画、これまでの関わりから実態把握をし、小集団にあった課題設定をおこなう。 ⑤ 特性に応じた支援 ・一人一人の「よいところを伸ばす」視点で特性を捉えた。 児童A：事前学習から「役割」を意識できるように計画した。この学習ではリーダーとして参加できるように具体的な活動内容を伝えることにより活躍することができた。 児童B：運動面や視覚的情報の理解に苦手さがあるが、聴覚的に優位な面が多い。この学習ではボウリングで倒れたピンの計算をこちらが読み上げ、児童Bが暗算する場面を設けることにより、活躍する場が得られた。 児童C：状況把握や活動内容の理解に時間がかかるので、事前学習から見通しをもてるようにパターン化した学習の流れを展開した。活動の中で拍手や「すごいね」など本人が認められることがわかり安定して学習に参加できた。
② 場の工夫	
③ 導入・展開・まとめ の工夫、単元計画	
④ 発問・応答・称賛などの 言葉かけの工夫	
⑤ 特性に応じた支援	
⑥ 教材・教具の工夫	
⑦ ティーム・ティーチ ング	
⑧ 評価の工夫	

具体的な指導内容シート(記入例)

学年 氏名 小学5年生 A

障 害 名 自閉スペクトラム症

実 態 把 握

障害の状態、発達や経験の程度、興味・関心、生活や学習環境などについて情報収集
・収集した情報を障害による学習上又は生活上の困難の視点から整理

- こだわりが強い
- 自分の予想外の事柄には不安定になり、取り組めないことがある
- 状況を把握するまでに時間がかかる

指 導 目 標

- 場や相手の状況に応じて、主体的なコミュニケーションを展開できる。〈6-(5)〉
- 小集団活動の中で自分の役割を理解して参加することができる。〈3-(4)〉

指導目標を達成させるために必要な項目の選定

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
	「情緒の安定に関すること」 「状況の理解と変化への対応に関すること」	「他者の意図や感情の理解に関すること」 「自己の理解と行動の調整に関すること」 「集団への参加の基礎に関すること」	「感覚や認知の特性への対応に関すること」	「作業に必要な動作の円滑な遂行に関すること」	「状況に応じたコミュニケーションに関すること」

具体的な指導内容の設定

「こんなときどうする」 (SST 絵カード) ・いろいろな状況に対応できるようにするために具体的な事例を挙げていき、社会的場面での具体的な行動や対処法を考えることができる。 「本の読み聞かせ」 ・見る、聞く、話すの基本的なスキルを絵本を通して身に着ける。 ・集中して聞く体験をする。	「ゲームをしよう」 ・ゲームのルールを理解する。 ・安心できるグループ作り。 ・リーダー的な役割を発揮できる場を設定し、成功体験を積み重ねることによって、自己肯定感を高める。 ・気持ちや行動の統制力をつける機会を意図的に設定する。 ・グループでの話し合いの中で自分の意見が反映する経験をする。	「校外学習に行こう」 ・公共の場でのマナーを理解し、生活に役立てる。 ・自分で計画することで、準備物や学習の流れに見通しを持たせる。 「調理実習をしよう」 ・共同作業を通して協力、分担をすることができる工夫。 ・調理道具の使い方がわかる。
---	---	--

実践例5 算数「あまりのあるわり算」 小学校知的障害特別支援学級

1 単元名 あまりのあるわり算

＜児童の実態＞ 男子1人(小3)

- ・学習面では、読むことや書くこと、暗記することなどにかなり抵抗がある。
- ・算数の学習では、計算問題、文章問題ともに苦手意識が強く、集中して取り組むことが難しい。
- ・人との関わりでは、相手の表情を読むことや、距離の取り方や思いの受け止め方が苦手なため、思いついたことをすぐに言動に表してしまい、トラブルにつながることが多い。

2 単元の目標

- 除法が用いられる場面を式に表したり、計算の仕方を理解したりすることができる。【知識及び技能】
- 数量の関係に着目し、計算の意味を考えたり工夫して計算したりすることができる。
【思考力、判断力、表現力等】
- 数量に進んで関わり、数理的な処理のよさに気付き生活や学習に活用しようとする。
【学びに向かう力、人間性等】

3 本時の指導

(1) 目標

- 乗法九九を一回適用する除法（包含除）「 $20 \div 3$ 」を計算することができる。（知・技）

(2) 展開

学習の内容及び活動	児童への手立て＜個別＞
1 始めのあいさつをする。	・教師も一緒に声を出して、始まりを意識できるようにする。
2 今日の学習の予定を知る。	・本時の学習予定を確認し、見通しと安心感を持たせる。
3 本時の学習課題を知る。	・課題文の数字やキーワードにアンダーラインを引くことで、立式の手がかりとなるようにする。
チョコレートが20こあります。 一人に3こずつ分けると何人に分けられるでしょう。	・前時の学習（ $18 \div 3$ ）を振り返り、比べることで、違いについて気付くようにする。
4 具体物を使って分ける。	・実際にペットボトルキャップを操作することで、あまりが出てしまうことに気付くようにする。
5 自分の考えを、提示シートに書き、発表する。	・「2こあまる」ことが計算上の問題点になり計算できないときには、イラストプリントを渡して答えを導き出させる。
6 $20 \div 3$ の計算の方法について話し合う。 図で確認し、式と答えをノートに書く。	・やり方（具体物・図・式など）を提示シートに自由に書かせて自分の考えを発表しやすいようにする。
7 わり算クイズをして学習したことを確認する。	・発表することに苦手意識を持っているので、発表お助けシートを活用して、自信をもって発表できるよう配慮する。
8 終わりのあいさつをする。	・図とわり算で立式したやり方を示すことで、発表した考えと比べやすいようにする。
	・「あまり」や「わりきれない」、「わりきれる」の用語を教え、意味を確認する。
	・「 $20 \div 3$ 」と答えの「6」は「＝」でつなげられないため、「あまり2」をつければ「＝」でつなげることを具体物で確認することで理解を促すようにする。
	・本時の取り組みを認め、次時への意欲を高める。

4 評価

- 乗法九九を一回適用する除法（包含除）「 $20 \div 3$ 」を計算することができたか。（発表・ノート）

④発問・応答・称賛などの言葉かけの工夫

意欲的な取り組みを引き出す、活動に自ら戻れる言葉かけの工夫

前半は、操作活動などにより、比較的スムーズな取り組みを見せていたが、後半は、教師の問いかけもむなしく、児童は、活動に飽きてしまったり、興味のあるものを見つけ離席をしたり・・・と、予定通りに進まなくなってしまった。

そんなときは、まず、視線を児童や見ている物の高さに合わせて、「今、児童は何をどうしたいのか」を感じとる。次に「そう、〇〇なの。」と児童の思いを言葉で返してあげて、可能であれば、「それじゃ、〇〇の続きができたなら、ちょっとだけやろうか。」と、禁止用語は使わずに、優先順位をつけて、語りかけるようにした。時間はかかったが、本時もAは活動に戻り授業を終えることができた。

☆ 禁止用語を使わないで、肯定的に伝えよう。

「だめ！」は、注意しているだけで、児童にとってどういう行動をとったらよいかが伝わらないのです。大切なのは、注意より指示。

「こうするといいよ。」「〇〇をやってごらん。」「〇〇さん、もうすぐ〇〇ができあがるよ。」など。



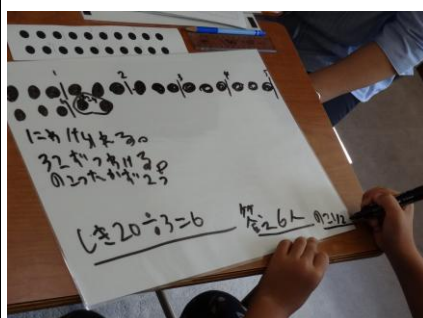
⑥教材・教具の工夫

具体的思考や集中した取り組みを促す教材・教具の工夫

通常の学級において、自分の思いを伝えることが苦手な児童であるので、言語障害特別支援学級において、本児との丁寧なやり取りを通して、自信を持って発表することを経験させたいと考えている。また、児童にとって算数は、「やらされている感じ」が強いので、それを「やってみたい感じ」にする活動に転換していきたいと考えた。

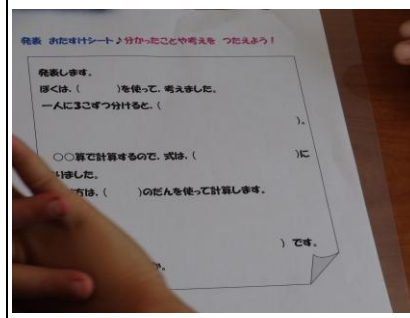


チョコレート箱に並べたペットボトルキャップを操作している様子。3つずつに分ける活動を通して、わり算につなげたいと考えた。



イラストプリントを活用して、提示用シートに記入した。

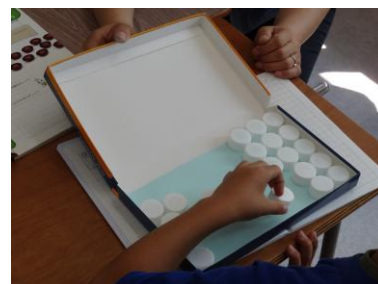
チョコレートがきちんと並んでいるイメージが、提示シートに表すときにも活かされていたと思われる。



発表お助けシートで、発表の準備を行った。穴埋め式にしておき、記入部分はできるだけ少なくしておくことで、取り組みやすいようにした。

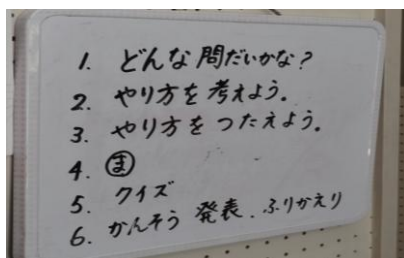
授業の視点シート

授業の視点	工夫したことや配慮したこと
① 実態把握 目標設定の工夫	④ 活動への意欲を引き出す、また集中できない場面で活動に自ら戻るような言葉かけの工夫 中盤から後半にかけて、飽きてしまい集中できず離席をしてしまうような児童に対しては、目先のいたずらや離席に振り回されずに、禁止ではない温かい言葉や先を見通した言葉をかけることが有効である。児童は自ら気持ちを調節して活動に戻ることができるようになる。 教師が本人の特性や性格などを的確に把握し、本時のねらいと何をどこまでさせたいのかを、きちんとおさえておくことが大切である。
② 場の工夫	
③ 導入・展開・まとめの工夫、単元計画	⑥ 教材・教具の工夫 ・チョコレート箱に入れたペットボトルキャップ チョコレートの課題文を提示した後、分ける場面をイメージするために、お土産の菓子箱の中に、ペットボトルのキャップをチョコレートに見立てて使用することにした。キャップは、飲み物のマークや文字のない物を選んだ。数のブロックやおはじきも使うことができるが、マグネットがついていると、くっつくほうに注意がそれてしまうおそれもあるので配慮が必要である。
④ 発問・応答・称賛などの言葉かけの工夫	
⑤ 特性に応じた支援	・イラストプリント、提示用シート イラストプリントは、黒丸を記入し、半具体物に置き換えて考えさせるために準備した。きちんと並んだ黒丸に区切りの線をつけて、自分なりに考えをまとめていこうとする児童の様子から、効果的な視覚的刺激になったと思われる。
⑥ 教材・教具の工夫	
⑦ ティーム・ティーチング	・発表お助けシート 交流学級では、発表したくても、恥ずかしさや照れなどで、最後までやり遂げることができないAであるので、個別指導の場面で発表をして自信をもたせたいと考えた。そこで、発表の流れを簡単に文章化して、与えてみることにした。 発表はじまりの合図 → やり方 → 答え の順で。
⑧ 評価の工夫	



今回の授業で 使ったものを紹介します！

学習のはじめに、本時の流れをホワイトボードで確認しています。



児童に、学習の流れを伝えておくと、どこまでがんばればよいかが分かり、見通しを持って安心して学習に取り組めます。

※4の③は、「まとめる活動」を省略したものです。

発表お助けシートです。

発表 お助けシート ♪ 分かったことや考えを 伝えよう

発表します。

ぼくは、()を使って、考えました。

一人に3個ずつ分けると、()。

〇〇算で計算するので、式は()になりました。

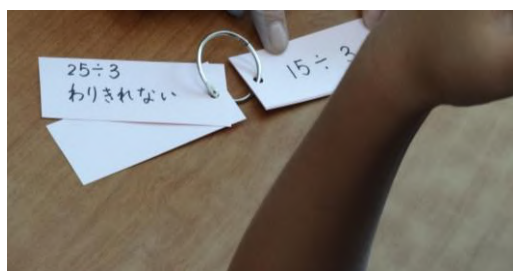
やり方は、()の段を使って計算します。

答えは、()です。

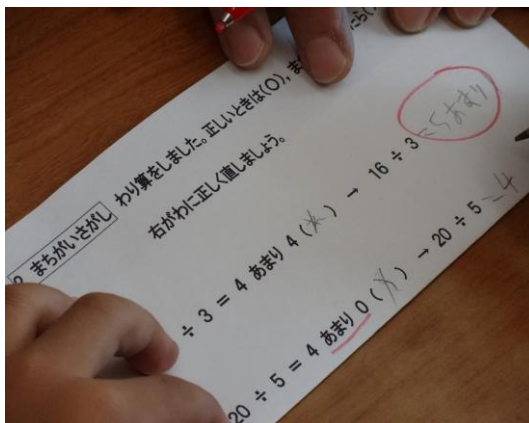
みなさんどうですか。

学習の定着のための
わり算クイズです。

☆ わりきれますかクイズ



☆ まちがいさがしクイズ



実践例6 国語「漢字の広場」

小学校言語障害特別支援学級

1 題材名 漢字の広場 二年生で習った漢字⑥

<児童の実態> 男子1人(小3)

- ・優しく素直で、熱心に学習に取り組む児童である。
- ・構音障害(ラ行・ダ行が混同し、曖昧になりがち)がある。
- ・新出漢字に興味をもって、繰り返し練習に取り組んでいる。

2 題材の目標

- 場面や人物の様子を、提示された漢字を使って説明することができる。【知識及び技能】(1)ウ
- 作った短文を声の強弱や速さに気をつけながら発表することができる。【思考力、判断力、表現力等】A(1)ウ
- 言葉のもつよさに気付くとともに、思いや考えを伝え合おうとする。【学びに向かう力、人間性等】

3 本時の指導

(1) 目標

- 提示された漢字を使って、心の中で思ったことを入れた短文を作ることができる。(知・技)

(2) 展開

学習の内容及び活動	児童への手立て<個別>
1 はじめのあいさつをする。 本時の学習内容を知る。 2 発音練習をする。 はひふへほ体操 はっきり言葉 3 本時のめあてを知る。 示された漢字と会話や心の中で思ったことを入れて、日記をつけるように書いてみましょう。	・昨日のことや休み時間にしたことを自由に話し合い、リラックスした楽しい雰囲気の中で学習に入る。 ・構音点の移動がある無意味言葉を発音させることで、苦手音の練習となるようにする。 ・手でリズムを示すことで、ゆっくり発音できるようにする。 ・課題文を声に出して読ませ、本時の学習への意欲を高める。 ・絵を提示することで、どんな学習をしているかを想像しやすいようにする。 ・場面ごとに視点を定めながら、示された絵や漢字を使って説明できるように促したい。
4 絵を見て場面や人物の様子を想像し、日記を書く。 (1) どのようなことをしているか。 (2) 例文で練習する。 (3) 日記を書く。 5 書いた日記を読み返し、チェック表で点検して、よりよい表現に直す。 6 できあがった日記を発表する。	・キーワードカードを示すことで、「いつ」「だれが」「何をしているか」を確認できるようにする。 ・吹き出しカードを使うことで、会話や思ったことの想像が膨らむようにする。
7 本時の学習を振り返るとともに、次時の学習について知る。 8 終わりのあいさつをする。	・会話文の「」は改行、思ったことの「」は改行しないことをおさえる。読点は、読みやすいように文の切れ目に打ち、句点の付け忘れに注意することを確認する。 ・文の始まりや「」の部分ゆっくり読むことができるように言葉かけをしたり、手で合図をしたりする。 ・本時の活動を振り返り、気をつけたところや工夫したところを認め称賛し、次時への期待と意欲をもたせる。

4 評価

- 提示された漢字を使って、心の中で思ったことを入れた短文を作ることができたか。(ワークシート)

⑥教材・教具の工夫

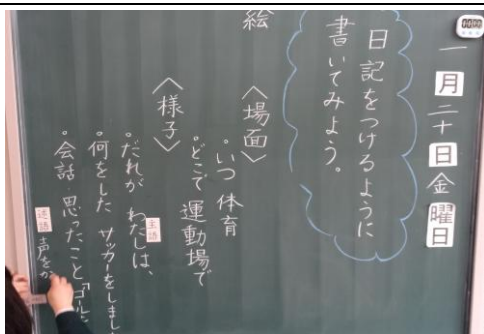
具体的思考、活動のイメージ化、意欲的な取り組みを促す教材・教具の工夫



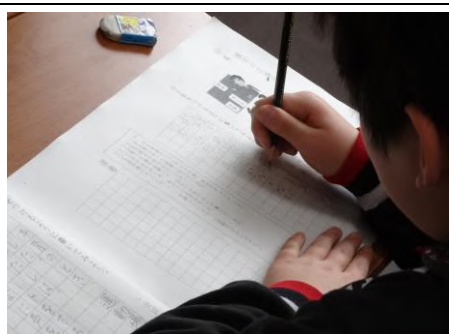
教科書には、いくつもの場面が描かれているので、焦点化するために場面ごとに切り離した。



青の吹き出しカードには「思ったこと」、ピンクの吹き出しカードには「会話」を想像して記入するようにした。



「いつ」「だれが」「何を」「何を」「何を」を、はっきりさせて書くために、主語・述語・句点・読点などのキーワードカードを使って意識づけた。



下書き・チェック表・清書を一枚にまとめたワークシートに向かって、算数の学習場面の日記を書くBの様子。

⑧評価の工夫

次のステップにつなげる自己評価の工夫



作文点検チェック表

下書きした後、自己評価できるように、チェックする活動を清書の前に取り入れた。（ワークシートの中央部）

この活動を丁寧に行うことが、表現する力や相手に伝える力をつけることにつながっていくと考える。

◎日記をつけるように書いてみよう。

・何を思ったこと
・何を思ったこと
・何を思ったこと

☆文を見直して、字を直す。

1 □ 文を見直して、字を直す。

2 □ 文を見直して、字を直す。

3 □ 文を見直して、字を直す。

4 □ 文を見直して、字を直す。

5 □ 文を見直して、字を直す。

6 □ 文を見直して、字を直す。

7 □ 文を見直して、字を直す。

8 □ 文を見直して、字を直す。

9 □ 文を見直して、字を直す。

10 □ 文を見直して、字を直す。

11 □ 文を見直して、字を直す。

12 □ 文を見直して、字を直す。

13 □ 文を見直して、字を直す。

14 □ 文を見直して、字を直す。

15 □ 文を見直して、字を直す。

16 □ 文を見直して、字を直す。

17 □ 文を見直して、字を直す。

18 □ 文を見直して、字を直す。

19 □ 文を見直して、字を直す。

20 □ 文を見直して、字を直す。

21 □ 文を見直して、字を直す。

22 □ 文を見直して、字を直す。

23 □ 文を見直して、字を直す。

24 □ 文を見直して、字を直す。

25 □ 文を見直して、字を直す。

26 □ 文を見直して、字を直す。

27 □ 文を見直して、字を直す。

28 □ 文を見直して、字を直す。

29 □ 文を見直して、字を直す。

30 □ 文を見直して、字を直す。

31 □ 文を見直して、字を直す。

32 □ 文を見直して、字を直す。

33 □ 文を見直して、字を直す。

34 □ 文を見直して、字を直す。

35 □ 文を見直して、字を直す。

36 □ 文を見直して、字を直す。

37 □ 文を見直して、字を直す。

38 □ 文を見直して、字を直す。

39 □ 文を見直して、字を直す。

40 □ 文を見直して、字を直す。

41 □ 文を見直して、字を直す。

42 □ 文を見直して、字を直す。

43 □ 文を見直して、字を直す。

44 □ 文を見直して、字を直す。

45 □ 文を見直して、字を直す。

46 □ 文を見直して、字を直す。

47 □ 文を見直して、字を直す。

48 □ 文を見直して、字を直す。

49 □ 文を見直して、字を直す。

50 □ 文を見直して、字を直す。

51 □ 文を見直して、字を直す。

52 □ 文を見直して、字を直す。

53 □ 文を見直して、字を直す。

54 □ 文を見直して、字を直す。

55 □ 文を見直して、字を直す。

56 □ 文を見直して、字を直す。

57 □ 文を見直して、字を直す。

58 □ 文を見直して、字を直す。

59 □ 文を見直して、字を直す。

60 □ 文を見直して、字を直す。

61 □ 文を見直して、字を直す。

62 □ 文を見直して、字を直す。

63 □ 文を見直して、字を直す。

64 □ 文を見直して、字を直す。

65 □ 文を見直して、字を直す。

66 □ 文を見直して、字を直す。

67 □ 文を見直して、字を直す。

68 □ 文を見直して、字を直す。

69 □ 文を見直して、字を直す。

70 □ 文を見直して、字を直す。

71 □ 文を見直して、字を直す。

72 □ 文を見直して、字を直す。

73 □ 文を見直して、字を直す。

74 □ 文を見直して、字を直す。

75 □ 文を見直して、字を直す。

76 □ 文を見直して、字を直す。

77 □ 文を見直して、字を直す。

78 □ 文を見直して、字を直す。

79 □ 文を見直して、字を直す。

80 □ 文を見直して、字を直す。

81 □ 文を見直して、字を直す。

82 □ 文を見直して、字を直す。

83 □ 文を見直して、字を直す。

84 □ 文を見直して、字を直す。

85 □ 文を見直して、字を直す。

86 □ 文を見直して、字を直す。

87 □ 文を見直して、字を直す。

88 □ 文を見直して、字を直す。

89 □ 文を見直して、字を直す。

90 □ 文を見直して、字を直す。

91 □ 文を見直して、字を直す。

92 □ 文を見直して、字を直す。

93 □ 文を見直して、字を直す。

94 □ 文を見直して、字を直す。

95 □ 文を見直して、字を直す。

96 □ 文を見直して、字を直す。

97 □ 文を見直して、字を直す。

98 □ 文を見直して、字を直す。

99 □ 文を見直して、字を直す。

100 □ 文を見直して、字を直す。

授業の視点シート

授業の視点	工夫したことや配慮したこと
① 実態把握 目標設定の工夫	⑥ 教材・教具の工夫 ○教科書の場合絵を切り離して提示 教科書には、いくつもの場面と関連のある漢字が表現されているので、絵を切り離して手に取りながら場面の様子を想像し、短文を考えることができるようにした。 ○吹き出しカード 提示された絵に、吹き出しを添えると、場面や人物の様子について、さらに想像を膨らませることができるであろうと考えた。児童は、思ったこと（青枠）と会話（ピンク枠）の吹き出しカードを操作させながら、考えることができた。 ○キーワードカード 「いつ」「だれが」「何をしているか」を、はっきりさせて書くために、主語・述語・句点・読点などキーワードカードを使って意識づけた。 ○日記用ワークシート 場面絵を入れて様子を捉えやすくし、下書き、チェック、清書の順で、取り組めるようにした。
② 場の工夫	
③ 導入・展開・まとめの工夫、単元計画	
④ 発問・応答・称賛などの言葉かけの工夫	
⑤ 特性に応じた支援	
⑥ 教材・教具の工夫	⑧ 評価の工夫 ○作文点検チェック表で、中間に自己評価 書いた作文を推敲するために、日記用ワークシートの中央にチェック項目を入れて確認できるようにした。 内容 ① 主語にあった述語になっているか。 ② 句読点の位置は正しいか。 ③ 習った漢字を使って、正しいかなづかいで書いているか。 ④ 文字のまちがいや、ぬけている字はないか。 ⑤ 会話や思ったことは、「 」を使っているか。 児童が一つ一つ確認を行い、下書きを見直した。 チェックしながら、下書きがよりよい文章になっていくのを実感している様子であった。
⑦ ティーム・ティーチング	
⑧ 評価の工夫	

実践例7 自立活動「ことば遊びをしよう」

小学校言語障害特別支援学級

1 題材名 ことば遊びをしよう

＜児童の実態＞ 男子1人（小1）

- ・本児は、構音器官や聴力に異常はないが、口や舌の動きが硬く、緊張が強いために、発音が不明瞭になってしまう。（サ行音がタ行音に置き換わっている。例 サカナ→タカナ）
- ・素直で明るく、ことば遊びや発音練習、音読などに意欲的に取り組んでいる。

2 題材の目標

- 口唇や舌を使った遊びを通して、発声・発語器官の運動機能を高めることができる。〈5-(5)〉
- 「ス」を正しく発音することができる。〈6-(2)〉

3 本時の指導

(1) 目標

- ことば遊びを通して、「ス」の構音に慣れ、10回中5回以上、正しい音で発音することができる。

(2) 展開

〈6-(2)〉

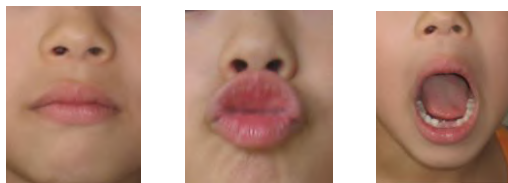
学習の内容及び活動	児童への手立て＜個別＞
1 はじめのあいさつをする。 (1)あいさつをし、月日、曜日、天気を確認する。 (2)自由会話をする。 (3)本時の学習について知る。 「す」のことばあそびをしよう。	・笑顔でアイコンタクトをとり、気持ちのよいあいさつでスタートできるようにする。 ・カレンダーを見ながら、声を出して確認させたい。 ・自由に会話を楽しむことで、リラックスした楽しい雰囲気をつくるようにする。 ・本時の学習の見通しをもたせ、意欲を持続させるために、活動内容を黒板に掲示する。
2 口と舌の体操をする。 (1)舌の出し入れ、平らにする。 (2)舌の上下左右・唇周り一周 (3)ロじゃんけん	・鏡を使って、舌の形を確かめられるようにする。 ・卵ボーロを使い、落とさないように舌を平らにしたり、出し入れしたりできるようにする。 ・口の形でじゃんけんを楽しみ、口唇や舌の緊張をほぐすようにする。
3 「ス」の構音練習をする。 (1)ストロー吹き (2)ストロー吹き遊び ティッシュボール転がしゲーム	・風の音をイメージできるよう、教師が「スー」と音を出す見本を示す。 ・ティッシュボールをストローで吹いて転がすゲームをして、呼気の調節を意識できるように促す。 ・「風の音」という言葉で「ス」の出し方を意識できるようにしていく。
4 ことば遊びをする。 「ス」の発音ビンゴゲームをする。	・「ス」の音を含むビンゴゲームを行い、楽しみながら「ス」の音を数多く言ったり聞いたりできるようにする。 ・ゲームの中では、発音の誤りを指摘せずに、「ス」の音を意識できるように教師が正しい発音で話すようにする。
5 チャレンジカードを使って振り返りをし、終わりのあいさつをする。	・本時の活動を振り返り、良くてきたところを称賛し、次時への期待と意欲をもたせる。

4 評価

- ことば遊びの中で、半数以上、正しく「ス」を発音することができたか。〈6-(2)〉（観察）

⑥教材・教具の工夫

構音器官の機能向上をめざし、楽しく進んで取り組める教材・教具の工夫



グー チョキ パー

【くちゅんけん】

口の形でグー・チョコキ・パーを作って、勝負をする。楽しみながら、口の周りの筋肉の緊張をほぐす。中央のブロックは、勝者のポイントに使い、積み重ねていく。うちは、口を隠すのに使う。



【ストロー吹遊び】

ティッシュボール転がしゲームである。

ティッシュを縦にほぼ4等分したものを両手で丸め、ストローで吹いて転がして遊ぶ。本時は、風の音「スー」でストローを吹いて転がし、得点を競った。



【「ス」の発音ビンゴゲーム】

「ス」を含むことばのビンゴである。カードを引いて発音させたり、教師の正しい音を聞かせたりする。できたところにキャップを置いていく。

1ビンゴで終わらずに、2ビンゴ、3ビンゴと進めていき、適当なところで終わりとする。

⑧評価の工夫

児童のがんばりを自信につなげる評価カードの工夫

～ ことばの教室～			小学校		名前		
チャレンジカード			年 組				
月日	曜	時間	学習したこと	ふりかえり	先生から	お家の方から	担任印
7/3	か	1	1 おくちのたいそう 2 くちゅんけん 3 すとろうあそび 4 はっおんびんご・ふりかえり		④のはっおんれんしゅをがんばりました。がんばったことをほめようしました。	はっおんれんしゅをがんばりました。がんばったことをほめようしました。	

ことばの教室で使用している振り返りカードです。学習内容、児童の自己評価(◎○△)、がんばりシール、教師からの称賛や励ましなどを記し、交流学級担任や保護者に伝え、連絡を取り合っています。

◎：やり方がわかって楽しく取り組めた。
 ○：ふつう・だいたいできた。
 △：もっとがんばろう

授業の視点シート

授業の視点	工夫したことや配慮したこと
① 実態把握 目標設定の工夫	⑥ 教材・教具の工夫 ○ロじゃんけん遊び 「最初はグー、じゃんけんポン」の合図で、うちわで隠しておいた口を見せ、勝負を行う。（グーとパーは、比較的簡単であるが、チョキのように口をすぼめることが難しい児童も多い。）短時間で、楽しい雰囲気作りができるのでとても効果的である。 ○ストロー吹き遊び「ティッシュボール転がしゲーム」 ティッシュボールをストローで吹いて転がすゲームである。強すぎると得点できないので、呼吸の調節に役立つ。 ティッシュは2枚重ねになっていることが多いので、児童に1枚ずつにはがさせて、児童と教師で使用する。縦にほぼ4等分したものを両手で丸めて、ティッシュボールの完成となる。（手先の巧緻性を高めるのにも最適） 児童対教師で行ったり、個人記録の更新を目指したりして、楽しく取り組むことができる。 ○「ス」の発音ビンゴゲーム 「ス」の正しい発音を聞き、練習と定着をはかることができる活動と考え取り組んでいる。 縦・横・斜め、どれかに5個そろったら「ビンゴ!」、5個の単語を言って、1ビンゴ達成となる。 基本的な発音を身に付けるとともに、教師との会話ややりとりのおもしろさも体験できるゲームである。 ⑧ 評価の工夫 ○振り返りカード（チャレンジカード） ことばの教室での学習内容と児童の自己評価、教師からの称賛や励ましなどを記入し、がんばりシールを貼って、交流学級担任や保護者と連絡を取り合っている。児童のがんばりをみんなに認めてもらい、自信をもたせることがねらいである。 交流学級担任、保護者、ことばの教室担当教師の3者でやりとりすることによって、児童の様子を知る手がかりにもなる。 また、それぞれの場において、環境づくりや指導の結果の習熟・適用について協働して行うことにもつながる。
② 場の工夫	
③ 導入・展開・まとめの工夫、単元計画	
④ 発問・応答・称賛などの言葉かけの工夫	
⑤ 特性に応じた支援	
⑥ 教材・教具の工夫	
⑦ ティーム・ティーチング	
⑧ 評価の工夫	

ことばの教室では、次のような教具を使っています！

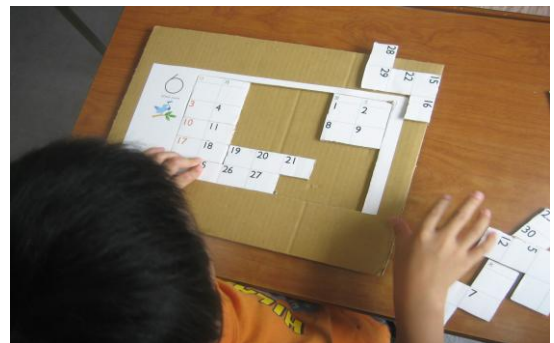


お口の体操

口を開いたり閉じたり、舌を上下左右に動かしたり、舌を平らにしたり・
・・・鏡を見ながら行います。

カレンダーパズル

使い終わったカレンダーは、ボール紙に貼り付けて、いろいろなパーツに切り抜いて、パズル遊びとして利用します。タイムを計ったり、日付の読み方を学習したり、使い方はいろいろです。



風の音「ス」から、「ソ」を導き出すときに使っているカードです。



表

裏(逆さまに記入)

風の音「スー」は、ストローの端を薄くつぶして、舌と上の歯の間に挟み、口を尖らせて、正中から息を吐き出しながら作ります。

① T「風の音『スー』とのばした後に『オ』を言ってみよう。」C「スーオ」



くるりとひっくり返して

② T「今度は『ス』と『オ』の間をもっと短くして言ってみよう。」C「スオ」

※「スオ」をもっとくっつけて、「ソ」の音を導き出します。

実践例8 国語「かるたのひみつを読もう」

小学校言語障害特別支援学級

1 単元名 かるたのひみつを読もう

＜児童の実態＞ 男子1人（小3）

- ・語中の子音を省略してしまうため、発音が不明瞭になってしまう。
- ・大勢の人や慣れない人の前だと緊張してしまい言葉を発しなくなってしまう。
- ・教科書の漢字に仮名をつけることで、音読も嫌がらず取り組めるようになってきた。

2 単元の目標

- 「かるた」を調べる活動を通して、ことわざについて知ることができる。 【知識及び技能】(3)イ
- 正しい発音を意識して、読むことができる。 【思考力、判断力、表現力等】A(1)ウ
- 言葉のもつよさに気付くとともに、思いや考えを伝え合おうとする。 【学びに向かう力、人間性等】

3 本時の指導

(1) 目標

- 正しい発音を意識して、声に出して読むことができる。 (思・判・表)

(2) 展開

学習の内容及び活動	児童への手立て
1 始めのあいさつをする。	・元気よくあいさつをしたり、簡単な会話をしたりして教師とのコミュニケーションを図る。
2 本時の学習について確かめる。 かるたのひみつを読もう ①漢字 ②音読 ③ノート ④かるた	・学習内容を確認し、見通しをもって課題に取り組めるようにする。 ・ホワイトボードに学習の流れを提示し、課題が終わったらチェックできるようにする。
3 漢字の練習をする。	・本時の漢字を「はてなボックス」で読みの学習をする。実態に合わせて、カードの枚数を調整する。
4 教科書の「かるた」を音読する。 ・第二段落を読む。	・読時の緊張が強い場合や集中力に欠けるときは、一人読みではなく教師との交代読みなど音読の方法を変えるようにする。
5 いろはかるたについて、内容を理解する。	・ことわざについて関心をもたせるために、他のことわざを例示したり、本児が知っていることわざを発表させたりする。
6 ことわざかるたをする。 ・かるた遊び ・ことわざクイズ ・ことわざかるたの中から穴埋めクイズをする。	・本児の緊張が少ないときには、参観者にも活動に参加してもらい、たくさんの先生方とコミュニケーションがとれるようにする。 ・穴埋めに形式にして答えやすくする。 ・発音しにくいことわざは、スリットを活用し、文字に注目させ、繰り返し練習する。
7 本時のまとめをする。 ・学習を振り返る。 ・次時の学習内容を知らせ、意欲をもつことができるようにする。	・学習を振り返り、本児のがんばりを称賛し、次時への意欲につなげる。

4 評価

- 正しい発音を意識して、声に出して読むことができたか。 (観察)

②場の工夫

安心して学習できる環境

- ・子供が安心して学習できるように人的・物的に環境を整える。
- ・学習に集中できるように刺激を少なくする。
- ・学習内容によって、活動の場所を変化させる。
- ・気持ちが切り替わり、集中が持続できる場の設定。

③導入・展開・まとめの工夫、単元計画

見通しをもって学習に参加できる工夫

- ・見通しをもって学習に取り組めるように、始めに学習の流れを知らせる。

短く分かりやすいフレーズで



- ・授業をモジュール化して、達成感を味わえるようにする。
「聞く」「話す」「書く」など活動にめりはりをつけるようにする。
集中できる時間を考えて、授業を展開する。



活動の終わりが予想できると安心



⑥教材・教具の工夫

分かる・できる楽しめる教材・教具の工夫



「はてなボックス」

自分の読んだ漢字をすぐ確認できる。実態に合わせて、カードの枚数や難易度を調整する。繰り返し行うことで、読みの定着につながる。

「スリットつきカード」

読む行だけが見えるカバースシート「スリットつきカード」を活用することで、読んでいる行に注目して集中して読むことができる。

「ことわざかるた」

遊び感覚で学習できる。回数を重ねることで、ことわざや語彙を楽しく習得できる。

授業の視点シート

授業の視点	工夫したことや配慮したこと
① 実態把握 目標設定の工夫	② 場の工夫 ・大勢の人や慣れない人の前だと緊張してしまい言葉を発しなくなってしまうため、安心して学習できる環境を整える。(観察室から参観する) ・児童の状況に応じて、関わりのある先生に意図的に活動に参加してもらうことで、活動がより活発に行われる。 ・漢字は、漢字カードを置きやすいようにテーブルを使い、音読は、集中しやすいように学習机で、かるたは、体を動かしやすいように床で行うなど、学習の場を工夫した。少し環境を変えることで、新たな気分で集中して取り組むことができる。 ④ 導入・展開・まとめの工夫、単元計画 ・学習の流れを①漢字②音読③ノート④かるたと短く分かりやすくホワイトボードに提示し、見通しをもち学習に参加できるようにし、達成感を味わえるように配慮し、次の課題への意欲が高まり、集中力が持続できるようにする。 ・音読時の緊張が強い場合や集中力に欠けるときは、一人読みではなく教師との交代読みなど、音読の方法を変えるようにする。 【音読の種類と効果】 追い読み・・・単元のはじめなど正確に読ませたい場合に効果がある。 一斉読み・・・全員に読む機会を保障できる。 一人読み・・・自分のペースで読むことができる。 交代読み・・・教師との読みでは、テンポをつかみテンポよく読める。 役割読み・・・読解に役立つ。 対話読み・・・相手の読みを聞くことができる。自分の間違いを直すことができる。 ⑥ 教材・教具の工夫 ・「はてなボックス」を使って漢字の読みの学習をする。自分の読んだ漢字をすぐに確認することができる。実態に合わせて、カードの枚数や難易度を調整する。繰り返し行うことで、読みの定着につながる。 ・「分かった。できた。」の成功体験の中に少し難しい課題を入れておくことで、次の意欲へとつながるようにする。 ・「スリットつきカード」は、読んでいる行に注目させるために効果的である。 ・「ことわざかるた」は、遊びながら回数を重ねることで、ことわざを楽しく習得できる。
② 場の工夫	
③ 導入・展開・まとめの工夫、単元計画	
④ 発問・応答・称賛などの言葉かけの工夫	
⑤ 特性に応じた支援	
⑥ 教材・教具の工夫	
⑦ ティーム・ティーチング	
⑧ 評価の工夫	

【はてなボックスの作り方】

○ 材料

段ボール
カッター・カッターマット
定規・テープ・色画用紙



①

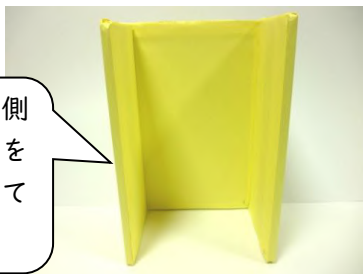
段ボールを①～⑨
まで、サイズに合
わせ切る。

ボックスの中で、カードが反転するので児童が
飽きずに取り組みます。
たし算・ひき算・かけ算・地図記号・ものの
名前などいろいろ活用できます。



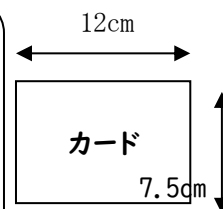
②

背面③ 側
面②④を
組み立て
る。



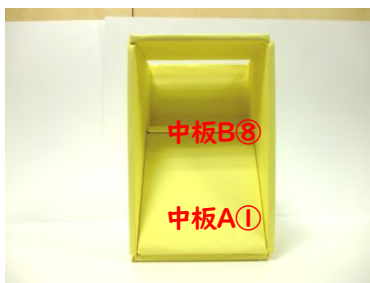
③

上部⑦をつ
ける。
この隙間が
カードの入
り口です。

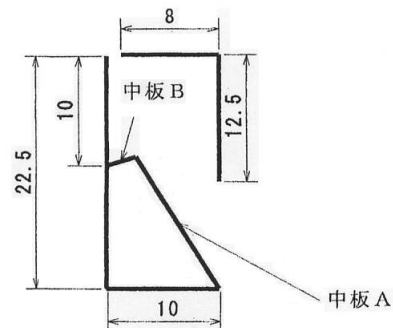


④

中板B⑧
中板A①

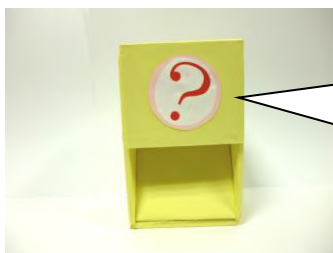


中板A①中板B⑧の角度
が、カードがうまく反転で
きるかのポイントになりま
す。また、カードの大き
さも重要です。実際にカー
ドを入れて、試してくださ
い。



⑤

最後に前
面上部⑤
をつけて
完成！！



カットした段ボールを
色画用紙などで包んで
おくと、仕上がりがきれ
いです。子供の興味関心
を引くためにどんどん
進化させてください。

ボール紙の厚みは入っていないので調整が必要です。

実践例9 作業学習「オルゴールボックスを作ろう」

中学校知的障害特別支援学級

1 単元名 オルゴールボックスを作ろう

<生徒の実態> 女子1人(中1)

- ・もの作りには意欲的に取り組むことができる。
- ・握力が弱く、指先の動きがぎこちないため、細かい作業に困難が見られる。
- ・自分からあいさつや質問、報告をすることが苦手で、言葉が不明瞭で発する声も小さい。

2 単元の目標

○働くことについての意義を理解し、使用する道具等を適切に用いて製作することができる。

【知識及び技能】

○自分の分からないことを解決する方法や、目的に応じた挨拶や返事を考えることができる。

【思考力、判断力、表現力等】

○販売する製品を作るということを意識し、手順に沿って製作しようとする。

【学びに向かう力、人間性等】

3 本時の指導

(1) 目標

○鉛筆で強く下書きをなぞり、オルゴールボックスに下書きを写すことができる。(知・技)

(2) 展開

学習の内容及び活動	生徒への手立て
1 はじめのあいさつをする。 「姿勢を正しくしましょう。これから作業学習をはじめます。おねがいします。」	・あいさつの言葉を文節で句切り、はっきり発声できるよう意識づける。 ・声のものさしを活用し、文末で声が小さくならないよう手本を示してから始める。
2 本時の学習課題を知る。 下書きを写そう。	・生徒自身の無地のオルゴールボックスと先に下絵を写し終えた生徒の作品を見比べることで、違いについて考えることができるようにする。
3 作業の手順やポイントを確認する。	・作品の違いに気付くよう発問し、生徒が本時の作業に見通しをもつことができるようにする。
4 ボックスに下書きを写す。 (1) カーボン紙の裏表に注意しながらテープで貼る。 (2) 下絵を重ねて、テープで固定する。 (3) 鉛筆で強く下絵をなぞる。 (4) 下絵がきちんと写っていることを確認する。 (5) 下絵をやぶかないようにテープをはがす。	・作業の手順カードと一緒に確認し、本時のポイントの部分は、生徒自身に発表させ、本時の作業の流れについて理解を確認する。 ・生徒自身の力で作業が進められるように、手順カードと作業のポイントカードを掲示しておく。
5 次時の学習内容を知る。 「色を塗ろう。」	・質問の言葉と報告の言葉は何かを発問し、「わかりません。おしえてください。」「おわかりました。」を再確認する。
6 おわりのあいさつをする。 「姿勢を正しくしましょう。これで作業学習をおわりにします。ありがとうございました。」	・手順に沿って進んでいることを称賛し主体的な活動を促す。 ・鉛筆が正しく持てているか、書く強さは適切かを確認する。
7 リラックスタイム ・生徒自身が選択した活動を行う。 (例：ぬりえ、ビーズ、PC等)	・着色した下書きと作業工程表を提示し、本時はどの工程であったか、次時はどこをやるのかを発問することで、作業の見通しをもつことができるようにする。 ・声のものさしを活用し、どの声の大きさにあいさつできるとよいのかを発問し、自ら確認できた際には称賛する。 ・いくつかの活動を準備しておき、生徒がやりたいことを選択することによって、作業中の緊張を解するとともに、生徒の頑張りを称賛し意欲を高める。

4 評価

○鉛筆で強く下書きをなぞり、オルゴールボックスに下書きを写し終えることができたか。

(ワークシート)

① 実態把握、目標設定の工夫

生徒の様子や作品の観察による実態把握の工夫

授業の前や後に「リラックスタイム」として、こちらが用意した何種類かの活動の中から、生徒がやりたいことを選べるようにしている。5～10分の短い時間の「リラックスタイム」で行う活動に、次時や次の単元で行う授業や活動の予行練習を取り入れ、それを行っている生徒の様子や作品の出来上がりを観察し、得意なことや苦手なことを把握して、次の授業や活動に活かすようにしている。

《 観察のポイント 》

《 授業で改善した点 》

○ぬりえ・・・・・・・・・・次時「オルゴールボックスに色を塗ろう。」

- ・筆で細かい部分が塗れるか。→ 使いやすい道具としてポスカを使用する。
- ・線からはみ出さずに塗れるか。→ 必要なところだけ塗るために塗らないところにはテープを貼る
→ 塗る順番を分かりやすくするために縁取りから先に塗るよう手順を示す。

○アイロンビーズ・・・・・・・・次時 12月の生活単元学習「クリスマスツリーを飾ろう。」

- ・ビーズを指でつかめるか。→ つかみやすくするために工作用のピンセットを使用する。
- ・見本を見ながら作れるか。→ 見本の上に透明シートを重ねてビーズを置きやすくする。

○パソコン・・・・・・・・・・次時1月の生活単元学習「パソコンで今年のカレンダーを作ろう。」

- ・パソコンの操作ができるか。→ 前回のパソコンの授業内容を提示する。
- ・文字入力ができるか。→ タイピングゲームでキーボードの場所を確認する。

「リラックスタイム」なので、パズルや折り紙、イラスト描きなど生徒の好きな活動も用意してあります。楽しそうに取り組んでいる生徒の様子から得意、不得意な面に気付くこともあります。

また、こちらで意図的に取り入れた活動でも、生徒に選ばれないことが…。そんなときは、活動に興味を引くような改善が必要ですね。



④ 発問・応答・称賛などの言葉かけの工夫

生徒が自主的に作業を進めるための言葉かけの工夫

知的障害学級在籍の生徒の中には、抽象的なことを理解したり、頭の中で想像したりすることが難しく、自分の考えや思いを伝えることが苦手な生徒がいる。そこで、次の点に注意して言葉かけをした。

具体的に・明快に・生徒の特性（気持ち）に合わせて

例えば、「何を使いますか。」→「AとBどちらを使いますか。」と、選択肢で発問したり、「動かないようにしましょう。」→「左手で紙を押さえましょう。」のように、何をどうするのかを具体的に指示したりすると、生徒も混乱せず作業を進めることができた。

授業の視点シート

授業の視点	工夫したことや配慮したこと
① 実態把握 目標設定の工夫	① 実態把握、目標設定の工夫 ○観察 自由な時間などに予行練習的な活動を取り入れ、生徒の実際の様子を観察することで得意なことや苦手なことを把握しやすい。 ○「リラックスタイム」 頑張った生徒へのご褒美として、また、集中が長く続かない生徒のリフレッシュとして「リラックスタイム」を設定した。この時間に生徒の実態把握ができるような活動を意図的に取り入れることで、次時の手立てを発見できることがある。 ○観察のポイント 生徒の活動を想定しつつ、ポイントを絞って観察するようにする。 (例) 活動「ぬりえ」→授業「ボックスに色を塗ろう。」 生徒の実態：指先の動きがぎこちない。 活動の想定：絵の具の筆で細かい部分の色塗りは難しいであろう。活動の様子：広い面は筆を使えたが、細い部分は思い通りに塗れなかったようだった。 実態の把握：細かい部分をぬるのに、柔らかい筆は扱いにくい。 授業の改善：細かい部分はポスカ（ペン）を使うようにした。 ④ 発問・応答・称賛などの言葉かけの工夫 ○具体的に・明快に・生徒の特性に合わせて 作業学習では、将来の職業生活や社会的な自立に必要なことを学習するため、教科の授業とは違った言葉かけが必要になってくる。作業の内容や手順について、作業工程表を見せながら次の作業工程について発問する。次の作業内容が分からないようなときは、具体的に作業工程表を指差し等でヒントを出しながら発問を繰り返す。 (例) ①「次は、何をすればいいですか？」 ↓（指差しヒント） ②「ここまで終わりましたね。次は、どの作業をおこないますか？」
② 場の工夫	
③ 導入・展開・まとめの工夫、単元計画	
④ 発問・応答・称賛などの言葉かけの工夫	
⑤ 特性に応じた支援	
⑥ 教材・教具の工夫	
⑦ ティーム・ティーチング	
⑧ 評価の工夫	

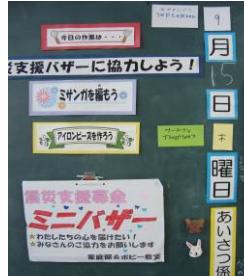
中学校の作業学習ではこんな活動をしています！

「野菜を育てよう」

		
Myゴーヤ 生徒たちが担当するゴーヤの苗にそれぞれ名前をつけて、大切に大切に育てています。	手作りの柵 畑の周りにあったブロックを手作りの柵に取り替えました。「畑」から「ガーデン」に変身！	観察日記 写真でも成長記録は撮っていますが、やはり手書きの観察日記はひと味違います。

		
収穫の喜び 収穫した野菜は、家へ持ち帰ったり、職員室で先生に配ったりします。美味しくいただきました！	お楽しみ調理実習 収穫した野菜を加えて、調理実習をしました。野菜のピザがこんがりと焼き上がりました！	絵手紙 収穫したかぼちゃを題材に絵手紙を描きました。なかなかしずい作品ができました。

「ボランティアバザーをやろう」

			
バザーをやろう！ 私たちにできることで協力しよう。	コースター アイロンビーズでカラフルに作りました。	ミサンガ 心を込めてミサンガを編みました。	準備中 もうすぐお客さんがやってきます。

実践例 10 自立活動「上手に聞こう」

特別支援学校高等部

1 題材名 上手に聞こう

＜生徒の実態＞ 男子5人・女子4人（高1）

- ・「はっきりと就労を目指している生徒」と「何となく“卒業後は働く”と思っている生徒」、「積極的に会話ができる生徒」と「他人に興味がなく自分からの働きかけのない生徒」が混在している。
- ・ほとんどの生徒が、話し手に注目しある程度内容を理解することはできるが、話の内容にうなずいたり返事をしたりできる生徒は少ない。

2 題材の目標

○聞き手の姿勢や態度が大切であることに気づき、上手な聞き方のスキルを身につけることができる。

＜6-(1)(2)＞

○人とかかわることや会話をする楽しさや面白さを感じることができる。

＜3-(1)＞

3 本時の指導

(1) 目標

○「聞き方のポイント」や「インタビューのポイント」を、必要に応じて自ら活用しながら、インタビューをすることができる。

＜6-(2)＞

(2) 展開

学習の内容及び活動	生徒への手立て＜全体、個別＞												
1 ウォーミングアップゲームを行う。 「聖徳太子ゲーム」 2 本時の活動についての説明を聞く。 <u>先生にインタビューしてみよう</u> 3 教師のモデリングを見て、どこが、なぜいけないのかを考える。 4 インタビューゲームをする。 ①作戦タイム ②インタビュータイム ③グループでのまとめ ④発表タイム  5 本時の活動について振り返り、ワークシートに記入する。 6 終わりの挨拶をする。	・「よく聞くこと」「協力して話し合うこと」がゲームに勝つポイントであることを伝える。 ・相手が答えているのに次の質問をする、答えている人の方を見ていないなどの例を提示し、そういった行動を自分がされた時にどう感じるかを考えることで、「聞き方のポイント」を再確認できるようにする。 ・3人ずつの小グループに分ける。 <table border="1" data-bbox="738 1249 1252 1382"> <tr> <th></th><th>指導者</th><th>インタビューされる人</th></tr> <tr> <td>グループ A</td><td>T1</td><td>部主事</td></tr> <tr> <td>グループ B</td><td>T2</td><td>校長先生</td></tr> <tr> <td>グループ C</td><td>T3</td><td>教頭先生</td></tr> </table>  ＜個別＞・生徒Aが話し合いに参加していなかったり、黙っていたりする時には「Aはどう思うの」などの言葉かけをする。 ・生徒Bが返答に時間がかかる時には、本人の気持ちや返答したい内容をT3が聞き出し、内容を整理しモデルを示す。また、限られた時間内で質問ができるよう予め時間を提示する。 ＜全体＞・インタビューした先生方に評価してもらうことを伝え、発表への意識が高まるようにする。 ・できるだけ全員が発表できるようにし、それぞれの感じたことを全員で共有できるようにする。		指導者	インタビューされる人	グループ A	T1	部主事	グループ B	T2	校長先生	グループ C	T3	教頭先生
	指導者	インタビューされる人											
グループ A	T1	部主事											
グループ B	T2	校長先生											
グループ C	T3	教頭先生											



4 評価

○「聞き方のポイント」「インタビューのポイント」を必要に応じて活用しながらインタビューをすることができたか。

＜6-(2)＞（観察）

③導入・展開・まとめの工夫、単元計画

学習に見通しをもち、意欲的に活動するための工夫

○ソーシャルスキルトレーニング（SST）の活用

ウォーミングアップ → モデリング・スキルの教示 → リハーサル → フィードバック



○授業のねらいに沿ったウォーミングアップゲームの活用

ゲームで気持ちもリラックス！



⑦ティーム・ティーチング

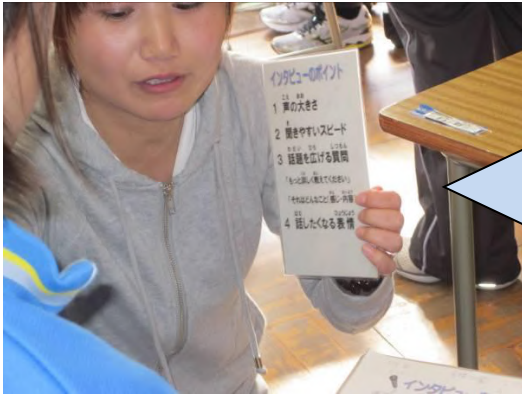
生徒それぞれの実態に応じたきめ細かな支援をするために

グループA (T1)	グループB (T2)	グループC (T3)
- 生徒Cが質問内容を一人で決めるような時には、「他の人はどうしているのかな」などの言葉かけして、全員の意見を反映できるようにする。 - 生徒Aが話し合いに参加していなかったり、黙っていたりする時には、「Aはどう思うの」などの言葉かけをする。 - 生徒Dが話の前後に関係なく自分の意見や質問を言おうとする時には、「前の人の話をよく聞いてごらん」などの言葉かけをする。	- 生徒Eが質問内容を一人で決めるような時には、「他の人はどう考えているのかな」などの言葉かけをして、全員の意見を反映できるようにする。 - 生徒Fがメモをとる時には、T2が書きたいことを聞き出し、支援をする。また、発音が不明瞭な時には「ゆっくり（はっきり）話そう」などの言葉かけをする。 - 生徒Gには、聞き方のポイントを再度個別に確認し、できた時には大いに称賛する。	- 話を切りだす人が出てこないような時は、話し合いのきっかけをT3が提示する。 - 生徒Bが返答に時間がかかる時には、本人の気持ちや返答したい内容を聞き出し、内容を整理しモデルを示す。また、限られた時間内で質問ができるよう予め時間を提示する。 - 生徒H、生徒Iがインタビューする際には、「相手に伝わるように話そう」と伝え、声の大きさや話すスードを意識できるようにする。

授業の視点シート

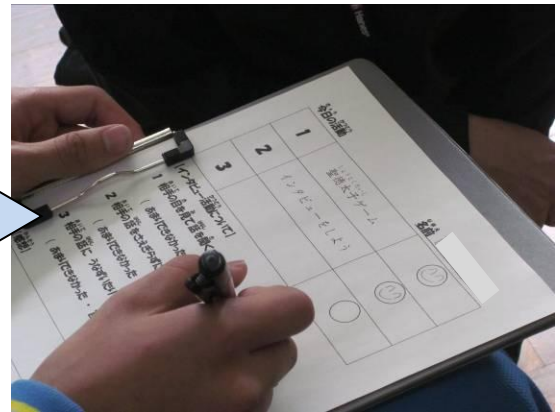
授業の視点	工夫したことや配慮したこと
① 実態把握 目標設定の工夫	③ 導入・展開・まとめの工夫、単元計画 ・ 9月の SST の指導開始時から、「ウォーミングアップ → モデリング・スキルの教示 → リハーサル → フィードバック」という SST の流れを繰り返し行ってきたことにより、生徒たちがスムーズに授業に取り組めるようになった。 ・ 1 単位時間が長い（80 分）ため、「本日の SST のねらい」に沿ったウォーミングアップを行うよう配慮した。そうすることで、生徒たちがこの時間に何を学習したのかがより明確になった。 ＜例＞：「聖徳太子ゲーム」3 文字の単語を 3 人が 1 文字ずつ分し、「せーの」で一斉に文字を言う。他のチームはその単語が何か当てるゲーム。聞くことに集中させたい、チームの中で話し合いをさせたい時に有効。 ＜例＞：「協力ネームパス」ぬいぐるみなど落としてはいけないものを、相手の名前を言いながらパスをする。名前を覚えさせたい、相手の顔を見るようにさせたい時に有効。
② 場の工夫	
③ 導入・展開・まとめの工夫、単元計画	
④ 発問・応答・称賛などの言葉かけの工夫	
⑤ 特性に応じた支援	
⑥ 教材・教具の活用	
⑦ ティーム・ティーチング	⑦ ティーム・ティーチング ・ ソーシャルスキル尺度（下記文献参照）での実態把握と、それぞれの教員の観察により、小グループのグルーピングを検討した。 ・ 各グループに、生徒の実態を考慮した教員を配置した。 ＜例＞：学級での課題（声の大きさや視線など）を継続するために、学級担任を配置。 ＜例＞：様々な人とかかわることができるように、学級担任でない教師を配置。 ⑧ 評価の工夫 ・ SST の指導開始時から同じ自己評価表を用いた。文字を書くことや自分の気持ちを表すことが苦手な生徒がいるため、表情を使って分の気持ちを表すことができるようにした。 ・ （本時に限って）インタビューをした先生から、「上手に聞くことができていたか」の評価を生徒がもらうことで、生徒たちの意欲につなげることができた。 ※参考文献 「特別支援教育 〔実践〕 ソーシャルスキルマニュアル」 上野一彦/岡田智 編著（明治図書）
⑧ 評価の工夫	

授業実践の一部を紹介します



「インタビューのポイント」はラミネートして、手元にも置きました。声が小さかったら「あれ？インタビューのポイントは何だったっけ？」と生徒に提示します。

活動した時の自分の気持ちを、表情で書き入れるワークシート。SST指導開始時から、いつもこのスタイルで活動を振り返りました。文字を書くのが苦手な生徒も、これなら「ドキドキ」「びっくり」「バッチリ」「楽しい」「残念」を表現できますね。



臨場感も大切な場の設定。
インタビューといえば、やっぱりマイクですね。
テレビでよく見る記者会見をイメージして…

校長先生から「あなたのインタビュー、こんなことができていましたよ」「ここはもう少しだったね」とその場で評価をもらいました。
「僕、気をつけたところが上手くできていた！」



実践例Ⅱ 総合的な学習の時間「和（日本文化）を味わおう」

特別支援学校高等部

1 単元名 和（日本文化）を味わおう

＜生徒の実態＞ 男子19人・女子4人（高1）

- ・穏やかな生徒が多い反面、自分を表現することが苦手な生徒が多く、日常的な挨拶でも相手の顔をしっかりと見てははっきりとあいさつできる生徒は少ない。
- ・茶道については、初めて体験する生徒がほとんどである。

2 単元の目標

- 友だちと協力して調べることで、日本の伝統文化を知ることができる。【知識及び技能】
- 日本の伝統文化について調べたことを基に、体験活動を通して、日本の伝統文化の特色やよさに気付くことができる。【思考力、判断力、表現力等】
- 自分も日本人の一員であることを自覚し、日本の伝統文化を大切にしようとする。【学びに向かう力、人間性等】

3 本時の指導

(1) 目標

- 茶道体験で得た知識をワークシートに整理して記入したり、気付いたことを発言したりすることができる。（思・判・表）

(2) 展開

学習の内容及び活動	生徒への手立て
1 はじめの挨拶をする。	
2 本時の活動を知る。 ・前時に学習した作法（所作、心得）にいて話し合う。	・茶会の雰囲気味わうこと、落ち着いて移動や活動を行うこと 思いやりの気持ちを大切にすることなどについて、生徒の言葉 を取り上げながら確認していく。
3 クラス毎に活動の準備をする。	・茶会の厳粛な雰囲気を感じることができるよう、活動①はで きるだけ正座で臨むようにする。
4 「茶会」を開始する。 活動① 茶をいただく。 活動② 茶会の様子を観察する。 活動③ ワークシートに取り組む。	・T1は全体の動きを見ながら、生徒の所作、話の聴き方などに いて助言したり、手本を示したりする。 ＜活動①の支援＞ ・自分の順番を待てない生徒には、順番を意識できるように顔写 や名前カードをミニホワイトボードに提示する。 ＜活動②の支援＞ ・お点前に集中することが難しい生徒には、ワークシートを見せ た、ポイントカードを見せたりしながら、所作の復習を行い、 お点に注目できるようにする。 ＜活動③の支援＞ ・印象に残ったことや感動したことなどを尋ねながら、生徒の言 で記入できるよう支援する。
5 感想を発表する。	
6 まとめをする。	
7 終わりの挨拶をする。	・ワークシートに沿って茶道体験を振り返りながら、どんな気持 ちになったのかを、共感的な言葉かけて引き出すようにする。

4 評価

- 茶道体験で得た知識をワークシートに整理して記入したり、気付いたことを発言したりすることができたか。（ワークシート）

②場の工夫

茶道の雰囲気を感じとることができる工夫

和室（生活訓練室）

お香を焚く。

全員が同じように

掛け軸、生け花を

正座で取り組む。

本物を見る。

※GT：ゲストティーチャー

静粛な雰囲気て

制服で臨む。

③導入・展開・まとめの工夫、単元計画

生徒の興味関心を軸に、テーマに迫っていくための工夫

日本に昔からあるもの
といえば…

・お城 ・畳 ・おにぎり ・着物
・そば ・刀 ・和太鼓 ・梅干し など

いつから？
どんなもの？ どうやって調べる？

・インターネットで…
・図書室で…

見てみたい！
やってみたい！

・剣道の体験（防具や道着を見る、竹刀を振ってみる）
・箏の体験（音楽との関連）



茶道体験へ



授業の視点シート

授業の視点	工夫したことや配慮したこと
① 実態把握 目標設定の工夫	② 場の工夫 ・掛け軸や生花を設置し、ゲストティーチャー(以下G T)より掛け軸の内容の説明、生花が醸出す季節感について説明を受けた。 ・教室ではなく、和室(生活訓練室)で行い、できるだけ正座で取組むようにした。正座が難しい生徒には、G Tより静かに足を崩す方法や、しびれを和らげる方法を伝授していただき、茶会当日にも生徒が自ら実践できるようにした。 ・香を焚き、場の空気全体が“和の空間”となるようにした。重度の害のある生徒にも、五感で雰囲気を楽しむことができるように配慮した。 ・教師はできるだけ落ち着いた声で指導にあたり、静粛な雰囲気保つようにした。そうすることで生徒たちも自然に私語がなくなり、長時間であるにもかかわらず、静粛な雰囲気を全員が共有することができた。 ③ 導入・展開・まとめの工夫、単元計画 ・「総合的な学習の時間としての取り組みである」ということを明にするため、茶道の体験だけにならないよう、「生徒の興・関心 → 調べ学習 → 体験 → まとめ」という単元計画を行った。 ・学年の中にも茶の心得のある教師がいたが、「本物を知ること、経験すること」に重点を置きたいと考え、G Tを招聘した。G Tには着物を着て来校していただくことや場の設定(掛け軸や生花など)をお願いし、生徒ができる限り「本物」を体験できるようにした。 ・総合的な学習の時間では体験として茶道を行ったが、他教科と関連として、 [音楽] 箏の学習 [特別活動] 地域交流(ライオンズクラブの方々と餅つき会) [美術] 創作書道、年賀状の作成 などの学習を行い、「和(日本文化)を味わう」という2～3学期の学習の統一感を出すことができた。
② 場の工夫	
③ 導入・展開・まとめの工夫、単元計画	
④ 発問・応答・称賛などの言葉かけの工夫	
⑤ 特性に応じた支援	
⑥ 教材・教具の工夫	
⑦ ティーム・ティーチング	
⑧ 評価の工夫	

授業実践の一部を紹介します



同じ時期に、音楽では箏の学習を行いました。茶道で習った正座のおかげで、姿勢もとても良くなりました。
♪さくら～ さくら～♪



手元で茶道の所作を確認するため「茶道のポイントカード」これがあれば、「次は何だっけ？」と思っても安心できますね。

書くことが苦手な生徒にはこのようなワークシートを用意。質問に合った写真を選んで貼ったり、丸で囲んだり…これなら時間をかけずに振り返りができますね。

本物を知ることはとても大切な体験です。
お茶の先生をお招きして、本物を教えていただきました。



実践例 12 数学「ボウリングをしよう」

特別支援学校中学部

1 題材名 ボウリングをしよう(10までの数の理解)

＜生徒の実態＞ 男子5人・女子2人(中1、2)

- ・ゲームには興味を示し、楽しむことができるグループである。
- ・数に関しては、1対1の対応、1から10までの数唱ができる。
- ・数を量としてとらえることはまだ難しいが、1から10までの数で数詞を聞いて、数字を書いたり、数字カードを取ったりすることができる。

2 題材の目標

○ゲームを通して、具体的な事物を対応させながら、数えたり、集めたり、比較したりすることができる。

【知識及び技能】〈小学部2段階〉

○数詞と数字、ものとの関係に着目し、数の数え方や表し方について考えることができる。

【思考力、判断力、表現力等】〈小学部2段階〉

○数量に関心を持ち、算数で学んだことの楽しさやよさを感じながら興味をもって学ぼうとする。

【学びに向かう力、人間性等】〈小学部2段階〉

3 本時の指導

(1) 目標

○倒れたピンの本数に着目し、得点を数字カードで示すことができる。(思・判・表)

(2) 展開

学習の内容及び活動	生徒への手立て
1 始めのあいさつをする。 2 日にち、名前の確認をする。 ・当番が黒板に日にちを書く。 ・自分の名前カードを貼る。 3 ボウリングをする。(1人2回) たくさんおして、数えてみよう！ ① 倒したピンを数え、数字カードを貼る。 ② 数字カードに対応しながら、具体物数える。 ③ 2回の合計本数を計算機で出す。 ④ 合計本数を数えて、数字カードと数図カードを貼る。 4 まとめをする。 ・1人ずつ合計本数を発表する。 ・一番多く倒した人を知る。 ・次時の学習について知る。 5 終わりのあいさつをする。	・「今日」の日付が分かるように、カレンダーで確認する。 〈全員〉 ・生徒が数える数詞の最後をT1が一緒に大きな声で言うことで、最後の数詞を意識して、数字カードを選べるようにする。 〈個別〉 ・具体物は、生徒の実態や興味に合わせて用意する。 A、B、C (T1) → ミニボウリングピン D、E、F (T2) → マッチ棒 G、H (T3) → キャラクターのカード 〈全員〉 ・計算しやすいように数式枠を用意する。 ・数字と具体物の対応を通して、全体の数分かるようにする。 ・数字カードと合わせて数図カードも示すことで、「多い」「少ない」ということが意識できるようにする。 ・一覧表を示しながら、合計本数を正しく出せたことを称賛し、次時への意欲付けを図る。

4 評価

○倒れたピンの本数に着目し、得点を数字カードで示すことができたか。(観察)

⑥教材・教具の工夫

数の学習を行うための教材・教具の工夫



ボウリングは生徒が大好きな題材。楽しみながら、各場面で色々と数の学習を設定することができる。

2回の合計本数を計算機で出す時に使用する数式枠。



倒したピンの数や合計本数を数える時に使用する教材。生徒の実態に応じた物を用意した。数字シートや対応枠は、5、10で仕切るようにして、5、10のかたまりを意識できるようにした。

ボウリングの結果を表した一覧表。合計本数は、数字カードと数図カードを対応して貼るようにした。

⑦チーム・ティーチング

学習場面に応じた役割分担

場 面	教師の役割
1 始めのあいさつ 2 日にち・名前の確認 4 まとめ 5 終わりのあいさつ	・MTが主授業者となり全体をリードする。ST（2人）は、集団全体を見ていて、適時支援が必要な生徒にかかわりを持ち、学習課題の理解を助たり、活動を補助したりする。
3 ボウリング 4 ③・④の活動	・実態に応じて小グループを作り、教師は担当するグループを支援する。同一の課題を少人数できめ細やかな配慮のもとに学習ができる。同じ教室内で行う中で、教師間で学習の進み具合を調整し合いながら進める。



授業の視点シート

授業の視点	工夫したことや配慮したこと
① 実態把握、目標設定の工夫	⑥ 教材・教具の工夫 ・生徒が楽しみながら、数の学習に取り組める題材としてボウリングを取り上げた。 ・ダイナミックさと生徒の意欲を引き出すために、教室全体で行い、ピンとボールは実物を使用した。 ・10までの数の理解というねらいと2回投球という活動を踏まえピンは5本に設定した。 ・結果一覧表には、透明のビニールテープを全体に貼ることで両面テープで数字カードを貼っても、破けることなく繰り返し使用できた。 ・2回の投球の結果を貼る場所を赤と青で色分けをした。その色は数式枠にも対応し、1回目と2回目を意識できるようにした。 ・結果一覧表の合計本数は、数字カードと数図カードを対応して貼るようにし、量も意識できるようにした。数図カードは黒字に黄色の丸シールを貼ることで見やすくした。 ・倒したピンの数や合計本数を数える時は、実態に応じて7人を3つのグループに分けた。キャラクターカード、マッチ棒、ボウリングのミニピン等を用い、具体的操作を通して理解の深まりを図った。
② 場の工夫	
③ 導入・展開・まとめの工夫、単元計画	
④ 発問・応答・称賛などの言葉かけの工夫	
⑤ 特性に応じた支援	
⑥ 教材・教具の工夫	⑦ ティーム・ティーチング（学習場面に応じた役割分担） ・始め、終わりの挨拶、まとめ等、全体の間ではT1が中心に進行しT2、T3は適宜支援が必要な生徒にかかわるようにした。 ・ボウリング中は、進行と倒れたピンの数の計算の支援・投球の支援・数字カードを選択して貼る時の支援の3つの場面をTが分担して役割を担い、生徒が活動にスムーズに取り組めるようにした。 ・数の計算で、生徒の実態に応じて3グループに分かれて活動する時は、それぞれのグループをTが一人ずつ担当することで、能力に応じた活動を同時に進めることができた。
⑦ ティーム・ティーチング	
⑧ 評価の工夫	

教材準備のための ワンポイントアドバイス!

ポイント1 ボウリング場でゲット!

ボウリングを行う場合、やはり、本物のボウリングのピンとボールを使って、ダイナミックさを出したいものです。



そんな時は、ぜひボウリング場に足を運んでみて下さい。古くなったピンとボールをボウリング場でいただけるケースが多いです。本物のピンをゲットして、子供たちとダイナミックなボウリングを楽しみましょう!



ポイント2 使いやすく、長持ちするために!



授業で使うカードやシートはラミネートすると丈夫になり、長持ちまた、子供たちも操作しやすくなります。

ラミネートしたカードやシートの四つ角は、コーナーカッター『かどまる』を使えば、簡単に丸くすることができます。教材は、子供たちのことを考え、一つ一つ丁寧に作りたいですね。



『かどまる』



結果一覧表

結果一覧表の模造紙には、透明のビニールテープを隙間なく全体に貼りました。そうすれば、数字カードの裏面両面テープを貼るだけで、取り外しが簡単にでき、なおかつ破れることなく繰り返し使うことができます。ちょっとした工夫で、使いやすく、長持ちする教材に大変身です!



ポイント3 100円ショップへGO!



倒したピンの数や合計本数を数える時に使用したケースやミニボウリングは、100円ショップで購入しました。100円ショップには、教材として使えるような物がたくさん眠っています。ぜひ、休日などに足を運んで、ゆっくりお宝をさがしてみるのもいいですよ。



参考・引用文献

○小・中学校学習指導要領解説	総則編	文部科学省	平成 29 年
○特別支援学校学習指導要領解説	自立活動編	文部科学省	平成 30 年
○特別支援学校学習指導要領解説	各教科等編(小学部・中学部)	文部科学省	平成 30 年
○交流及び共同学習ガイド		文部科学省	平成 31 年
○独立行政法人国立特別支援教育 総合研究所著	「特別支援教育の基礎・基本」	ジアース教育新社	平成 21 年
○独立行政法人国立特別支援教育 総合研究所著	「特別支援学級のGoodPractice」	ジアース教育新社	平成 18 年
○茨城県教育委員会	「推進しよう交流及び共同学習」		平成 24 年
○茨城県教育委員会	「みんなで取り組もう高等学校における特別支援教育(基本編・応用編)」		平成 22、23 年
○茨城県教育委員会	【改訂第4版】特別支援学級の教育課程編成ガイド		令和4年
○茨城県教育研修センター	令和3・4年度特別支援教育に関する研究「道徳教育はじめてガイドブック」		令和4年
○岩手県立総合教育センター	「特別支援学級経営の手引」		平成 24 年
○静岡県総合教育センター	授業を支える「チーム・ティーチング」		平成 24 年
○大阪府教育研究所連盟 教育相談部会編	「気になる子どもへの支援のヒント」		平成 21 年
○坂本裕監修	「特別支援学級ははじめの一步 -まずは押さえない100のポイント-」	明治図書出版	平成 23 年
○上野一彦・岡田 智 編著	「実践ソーシャルスキルマニュアル」	明治図書出版	平成 18 年
○熊谷恵子・青山真二編著	「長所活用型指導で子どもが変わる」	図書文化社	平成 14 年
○笹森洋樹・廣瀬由美子・ 三苫由紀夫編著	「新教育課程における発達障害のある子どもの自立活動の指導」	明治図書	平成 21 年
○石田さとみ作	「楽しく学ぶ日常生活絵カード」	エスコアール	平成 23 年
○太田正己著	「特別支援学校の授業づくり基本用語集」	梁明書房	平成 20 年
○太田正己著	「特別支援教育の授業づくり46のポイント」	梁明書房	平成 18 年
○いわいとしお著	「100かいだてのいえ」	偕成社	平成 20 年
○いわいとしお著	「ちか100かいだてのいえ」	偕成社	平成 21 年
○井上賞子・杉本陽子著	「特別支援教育はじめのいっば!」	学習研究社	平成 20 年
○井上賞子・杉本陽子著	「特別支援教育はじめのいっば!算数のじかん」	学習研究社	平成 23 年
○井上賞子・杉本陽子著	「特別支援教育はじめのいっば!国語のじかん」	学習研究社	平成 23 年
○湯汲英史著	「子どもが伸びる関わりことば26」	すずき出版	平成 18 年
○山中伸之・内田聡	「できる教師の子どもを変えるステキな言葉」	学陽書房	平成 21 年
○阿部芳久著	「知的障害児の特別支援教育入門」	日本文化科学社	平成 18 年
○名古屋恒彦著	「各教科等を合わせた指導」Q&A」	東洋館出版社	令和 4年
○名古屋恒彦著	「各教科等を合わせた指導」エッセンシャルブック	ジアース教育新社	平成 31 年

「特別支援学級スタート応援ブック【授業づくり編】」

1 研究助言者

筑波大学大学院 教授 安藤 隆男

2 研究協力員

那珂市立菅谷東小学校	教諭	藤田 優子
潮来市立潮来小学校	教諭	石田 幸子
阿見町立阿見第二小学校	教諭	安藤 尚徳
常陸太田市立太田中学校	教諭	森 むつみ
下妻市立下妻中学校	教諭	平吉 亜希子
県立鹿島特別支援学校	教諭	松沢 晴美
県立土浦特別支援学校	教諭	熊澤 つむぎ
県立友部特別支援学校	教諭	海野 有美（平成 23 年度）

3 県教育研修センター

所 長	谷田部 佳見
特別支援教育課 長	谷田部 孝子
特別支援教育課指導主事	藤森 幸子
	奥岡 智博
	外山 薫
	大木 勉
	羽成 裕明（平成 23 年度）

特別支援学級スタート応援ブック【授業づくり編】

特別支援教育に関する研究

特別支援学級における授業の実際

—特別支援学級スタート応援ブックの作成—

平成 23・24 年度

平成 25 年 3 月 初版

平成 28 年 3 月 第 2 版

平成 31 年 3 月 第 3 版

令和 6 年 3 月 第 4 版

編集 茨城県教育研修センター特別支援教育課

〒309-1722 茨城県笠間市平町 1410

TEL 0296(78)4437（特別支援教育課）

FAX 0296(78)2122

URL <http://www.center.ibk.ed.jp/>